県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

北原２号墳・北原遺跡

2003. 3

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

北原２号墳・北原遺跡

2003．3

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

北原２号墳・北原遺跡全景（第２石室検出前）

北原２号墳　第１石室出土耳環

北原 2 号墳　第 1 石室出土土器

北原 2 号墳　第 2 石室出土土器

序　　文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、四国横断自動車道の建設、サンポート高松の整備など、大規模開発に伴う発掘調査と出土品の整理・報告書刊行の業務を香川県教育委員会から受託して実施しております。

このたび、「県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」として刊行いたしますのは、平成13年度に調査を実施しました善通寺市善通寺町に所在します北原2号墳・北原遺跡についてであります。

この遺跡の調査では古墳時代後期の古墳1基と弥生時代中期末から後期初頭にかけての集落が判明しました。なかでも北原2号墳は一つの墳丘内に2基の横穴式石室をもつ珍しい形態の古墳であることが判明するとともに、石室内から土器や鉄器とともに多量の耳環が出土するなど、古墳時代後期の埋葬形態を究明するうえで貴重な資料となりました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告書の刊行に至るまでの間、香川県善通寺土木事務所及び関係諸機関並びに地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長　小原　克己

例　　言

1．本報告書は、県道観音寺善通寺線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県善通寺市善通寺町に所在する北原２号墳（きたはら２ごうふん）・北原遺跡（きたはらいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は平成13年４月１日から6月29日まで実施した。発掘調査担当は以下のとおりである。
　　森　格也・松岡　晶・漆原啓悟

4．調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県善通寺土木事務所、善通寺市教育委員会、香川県歴史博物館、地元自治会

5．報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は森が担当した。

6．報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
善通寺市教育委員会　笹川龍一

7．本報告書で用いる方位の北は、国土座標第Ⅳ系の北であり、標高はＴ．Ｐ．を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
ＳＤ　溝状遺構　　ＳＨ　竪穴住居跡　　ＳＫ　土坑
ＳＰ　柱穴　　ＳＴ　埋葬遺構　　ＳＸ　不明遺構

8．本遺跡の報告にあたっては、下記の方々に鑑定、分析を依頼し、玉稿をいただいた。
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　村上　隆主任研究官

9．土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

10．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高を示している。

11．古墳の石室の各部の左右の名称については、玄室の奥壁から見た左右を使用している。

目　　次

序文
例言
巻頭写真図版
第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　　(1)発掘調査の経過 …… 2
　　(2)整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 4
　第１節　遺跡の立地 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　北原２号墳の調査成果 …… 6
　第１節　調査前の状況 …… 6
　第２節　墳丘と周溝 …… 6
　第３節　第１石室の調査 …… 17
　　(1)墓壙 …… 17
　　(2)石室の検出状況 …… 17
　　(3)石室 …… 18
　　(4)排水溝 …… 22
　　(5)閉塞施設 …… 22
　　(6)墓道 …… 23
　　(7)遺物の出土状況 …… 23
　　(8)埋葬位置 …… 26
　第４節　第１石室出土遺物 …… 27
　　(1)土器 …… 27
　　(2)鉄器 …… 32
　　(3)装身具 …… 36
　第５節　第２石室の調査 …… 36
　　(1)墓壙 …… 36
　　(2)石室の検出状況 …… 36
　　(3)石室 …… 38
　　(4)墓道 …… 41
　　(5)遺物の出土状況 …… 41
　　(6)埋葬位置 …… 43
　第６節　第２石室出土遺物 …… 43
　　(1)土器 …… 43

(2)鉄器 ……46
第7節　墳丘上出土遺物 ……46
第8節　小結 ……46
第4章　北原遺跡の調査成果 ……48
第1節　調査区の概要 ……48
第2節　遺構・遺物 ……49
第3節　小結 ……52
第5章　香川県北原2号墳から出土した耳環の材質と製作技術 ……53
第6章　まとめ ……57
第1節　北原2号墳の築造過程 ……57
第2節　一墳丘複数横穴式石室墳について ……58
(1)はじめに ……58
(2)香川県内の様相 ……58
(3)周辺地域の様相 ……61
(4)一墳丘複数横穴式石室墳の構造 ……62
(5)北原2号墳の理解 ……63
第3節　出土副葬品について ……64
(1)鉄器 ……64
(2)耳環 ……65
第4節　北原2号墳の石室について ……66
北原2号墳出土土器観察表 ……72
北原2号墳出土鉄器観察表 ……76
北原2号墳出土耳環観察表 ……79
北原2号墳出土玉類観察表 ……80
北原遺跡出土土器観察表 ……81
写真図版
報告書抄録
付図　1枚

挿図目次

第1図　遺跡位置図
第2図　北原2号墳・北原遺跡調査位置図（1/1000）
第3図　周辺遺跡図（1/20000）
第4図　北原2号墳・北原遺跡調査前測量図（1/400）
第5図　北原2号墳平面図（1/100）
第6図　北原2号墳南北ライン土層断面図（1/50）
第7図　北原2号墳東西ライン土層断面図（1/50）
第8図　北原2号墳調査区東壁土層断面図（1/50）
第9図　周溝（SD01）断面図（1/40）
第10図　第1石室検出状況・墓壙平面図（1/50）
第11図　第1石室玄室・羨道埋土断面図（1/40）
第12図　第1石室平面図、立面図（1/40）
第13図　第1石室下層礫床平面図（1/40）
第14図　第1石室排水溝平・断面図（1/40）
第15図　第1石室羨道閉塞施設平・断面図（1/40）
第16図　第1石室遺物出土状況（1/40）
第17図　第1石室玄室棺台石（1/40）
第18図　第1石室出土遺物(1)（1/4）
第19図　第1石室出土遺物(2)（1/4）
第20図　第1石室出土遺物(3)（1/4）
第21図　第1石室出土遺物(4)（1/2）
第22図　第1石室出土遺物(5)（1/2）
第23図　第1石室出土遺物(6)（2/3）
第24図　第1石室出土遺物(7)（2/3）
第25図　第2石室検出状況・墓壙平面図（1/30）
第26図　第2石室平面図、立面図（1/20）
第27図　第2石室墓壙・墓道平面図（1/40）
第28図　第2石室遺物出土状況（1/20）
第29図　第2石室出土遺物(1)（1/4）
第30図　第2石室出土遺物(2)（1/2）
第31図　墳丘上出土遺物（1/4）
第32図　北原遺跡平面図（1/200）
第33図　SH01平・断面図（1/40）
第34図　SH01出土遺物（1/4、1/3）
第35図　SK01平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
第36図　SK02平・断面図（1/40）

第37図　SP01、SX01、包含層出土遺物（1/4）
第38図　分析耳環セット関係図（1/20）
第39図　一墳丘複数横穴式石室墳（1/400）
第40図　香川県内出土中空耳環（1/2）
第41図　仕切り石による区画をもつ横穴式石室（1/100）

表　目　次

表1　耳環の材質分析の成果(1)
表2　耳環の材質分析の成果(2)

図版目次

巻頭図版1　北原2号墳・北原遺跡全景（第2石室検出前）、北原2号墳第1石室出土耳環
巻頭図版2　北原2号墳第1石室出土土器、北原2号墳第2石室出土土器

図版1　北原2号墳調査前（北から）、北原2号墳・北原遺跡調査前遠景（南から）
図版2　北原2号墳・北原遺跡遠景（南から）、北原2号墳全景と第1石室（東から）
図版3　墳丘と周溝（SD01）（南から）、北側墳端部（東から）
図版4　周溝（SD01）土層断面（北西から）、第1石室・第2石室全景（東から）
図版5　第1石室玄室奥壁（東から）、第1石室玄室左（北）側壁（南から）
図版6　第1石室玄室右（南）側壁（北から）、第1石室玄室袖部（西から）
図版7　第1石室羨道左（北）側壁（南西から）、第1石室羨道右（南）側壁（北西から）
図版8　第1石室羨道閉塞施設（南から）、第1石室羨道閉塞石（西から）
図版9　第1石室玄室床面（南から）、第1石室玄室下部礫面（東から）
図版10　第1石室玄室遺物出土状況（南から）、第1石室玄室奥壁部分耳環・刀子出土状況（東から）
図版11　第1石室羨道仕切り石間遺物出土状況（南から）、第1石室羨道羨門部遺物出土状況（東から）
図版12　第1石室玄室排水溝（東から）、第1石室玄室排水溝断面（東から）
図版13　第1石室玄室北側墓壙断面（東から）、第1石室完掘状況・墓壙（西から）
図版14　第1石室～第2石室間の土層と墓壙断面（東から）、第2石室玄室奥壁（東から）
図版15　第2石室玄室左（北西）側壁（南東から）、第2石室玄室右（南東）側壁（北西から）
図版16　第2石室玄室遺物出土状況（南東から）、第2石室羨道（北東から）
図版17　第2石室墓道（西から）、第2石室完掘状況・墓壙（東から）
図版18　北原遺跡遺構群（東から）、北原遺跡竪穴住居跡（SH01）（北西から）
図版19　第1石室出土遺物(1)
図版20　第1石室出土遺物(2)

図版21　第1石室出土遺物(3)
図版22　第1石室出土遺物(4)
図版23　第1石室出土遺物(5)
図版24　第1石室出土遺物(6)
図版25　第1石室出土遺物(7)
図版26　第1石室出土遺物(8)
図版27　第2石室出土遺物(1)
図版28　第2石室出土遺物(2)
図版29　第2石室出土遺物(3)、墳丘上出土遺物、北原遺跡出土遺物

付図目次

付図1　北原2号墳、北原遺跡平面図

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

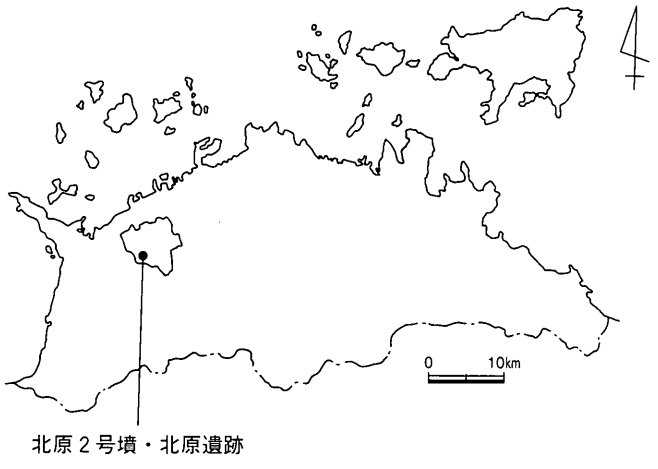
県道観音寺善通寺線は、善通寺市街と三豊郡を結ぶ幹線道路の一つで従来から交通量が多かった。しかし、道路は市街地を抜けるとすぐに狭くなり、三豊郡との境になる大日峠に向かって山間を縫って走りカーブが多く危険箇所が目立つものであった。そこで県善通寺土木事務所では善通寺市街地から大日峠までの善通寺市内の区間について、一部に新規のバイパス区間を含む道路の改良工事の計画をたて、平成３年度に路線周辺の埋蔵文化財等を県教育委員会文化行政課に照会した。

工事予定地内には前方後円墳として周知されていた北原古墳が所在しており、その取り扱いについて協議を行い、北原古墳と周辺地域の正確な内容と保存協議資料を得るために文化行政課は条件の整った箇所について試掘調査を実施した。その結果、北原古墳は前方後円墳ではなく、横穴式石室をもつ２基の円墳が隣接しているものであることが判明し、それぞれ北原１号墳、北原２号墳と命名した。これを受けて文化行政課は再度協議を行ったが、路線変更は困難であるとの判断から工事範囲にかかる北原２号墳については事前に発掘調査を実施することで合意した。

引き続き、文化行政課は平成５年度には北原１号墳、北原２号墳以外にも埋蔵文化財包蔵地が所在する可能性があるとして分布調査を実施し、これを受けて北原２号墳の南側斜面地を中心に平成６年度に試掘調査を実施した。その結果、新たに横穴式石室をもつ円墳が検出され北原３号墳として、北原２号墳とともに事前の保護措置の必要な範囲内に含めた。

しかし、県善通寺土木事務所の要望として用地買収が進捗した北原３号墳の所在する箇所を先行して工事を実施したいとして文化行政課に発掘調査の要請があったが、すでに次年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託する大規模発掘調査事業計画が組まれた後であったため、文化行政課が直営で発掘調査を実施した。その結果、北原３号墳の構築以前に弥生時代の集落が営まれていることが判明し、周辺地形から判断して北原２号墳の北側までの斜面地全体に遺跡が広がる可能性が高いと判断し、全体で北原遺跡として周知し、保護措置の対象とした。

北原２号墳については長らく用地交渉が難航していたが、平成12年度になり急に用地交渉が進展したため平成12年度中の発掘調査の要望を県土木部道路建設課から受けたが、当該年度の発掘調査の予定はすでに組まれており変更は難しいとして、年度の替わった平成13年度の４月から発掘調査を実施することで合意した。そして香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査機関として、平成13年４月１日付けで両者の間に「埋蔵文化財調査契約」を締結し、これに基づき平成13年４月１日から６月29日にかけて、延べ面積で1,670㎡を対象に発掘調査を実施した。



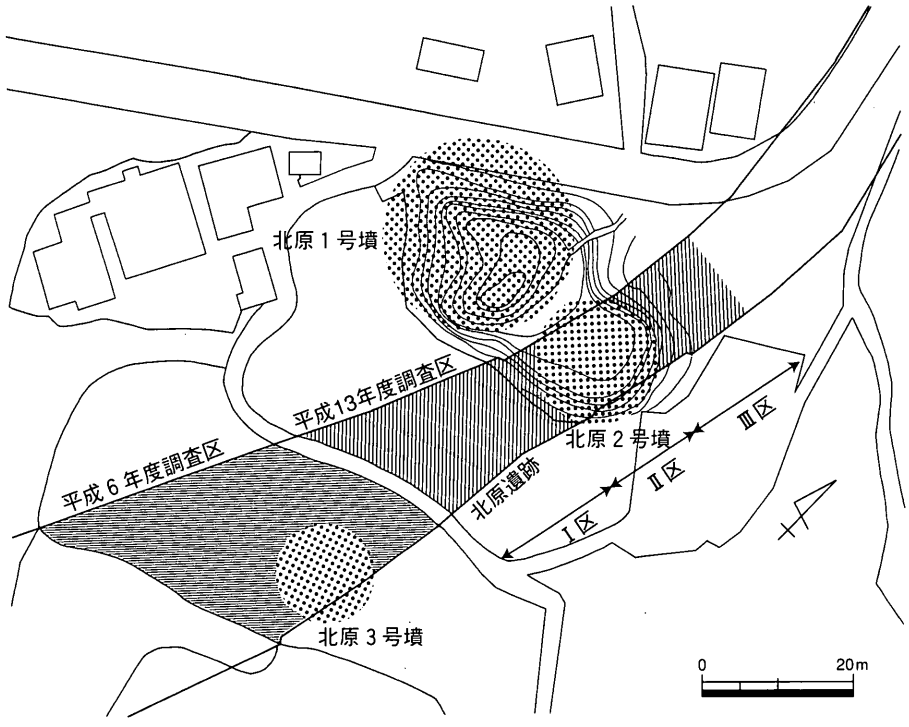
第１図　遺跡位置図

第２節　調査の経過

(1)発掘調査の経過

発掘調査対象地はみかん畑であったため、樹木の伐採、搬出作業から開始した。その後、地形測量を行い、安全対策や事務所等の設置、調査器材の搬入を行い本格的に調査を開始したのは４月16日である。

北原２号墳については土層観察用のベルトを残して表土を除去し、横穴式石室の方向を確認した段階で、石室の主軸にあわせて調査用の基準杭を打設し、国土座標と対応させた。そして石室の調査が進み墳丘の調査も進んだ段階で、北原２号墳の南側の北原遺跡部分と併せて、ラジコンヘリコプターを使用して航空測量を実施した。航空測量後に石室の調査と平行して墳丘の調査を行うため、盛土を除去している最中に、石室の南側４ｍほどのところで小型の横穴式石室を検出した。これまでの石室を第１石室、新たに検出した石室を第２石室として調査を継続したが、調査も終盤を迎えるころであわただしさを増したが、天候にも恵まれて６月29日にすべての作業を終了させることが出来た。



第２図　北原２号墳・北原遺跡調査位置図（1/1000）

本報告書に係る発掘調査の体制は以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	北原和利
	課長補佐	小国史郎
	副主幹	大山真充
総務	副主幹	中村禎伸
	主査	須崎陽子
	主事	亀田幸一

文化財グループ

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	小原克己
	次長	川原裕章
総務	参事	河野浩征
	副主幹	大西誠治
	係長	多田敏弘
	主査	山本和代
調査	参事	梅木正信

主任	西岡達哉	主任文化財専門員	廣瀬常雄
文化財専門員	古野徳久	主任文化財専門員	藤好史郎
文化財専門員	宮崎哲司	文化財専門員	森　格也
		主任技師	松岡　晶
		調査技術員	漆原啓悟
		整理作業員	漆原陽子

(2)整理作業の経過

平成13年度当初の計画では北原2号墳の調査終了後に、三豊郡詫間町本村中遺跡、高松市三谷中原遺跡の調査を実施し、その後12月から高松市岡本町の県道円座香南線関係の調査を2班体制で行う予定であった。しかし予備調査の結果、遺跡の広がりが少なかったため1班で調査を担当することとなった。従って残りの1班は急遽、当該年度に調査を行った北原2号墳、北原遺跡の整理業務を行った。

年度途中のため、従来から行っている整理作業員を雇用した整理作業体制を組むことが出来なかったため、調査を担当した3名がそのまま整理作業を行った。

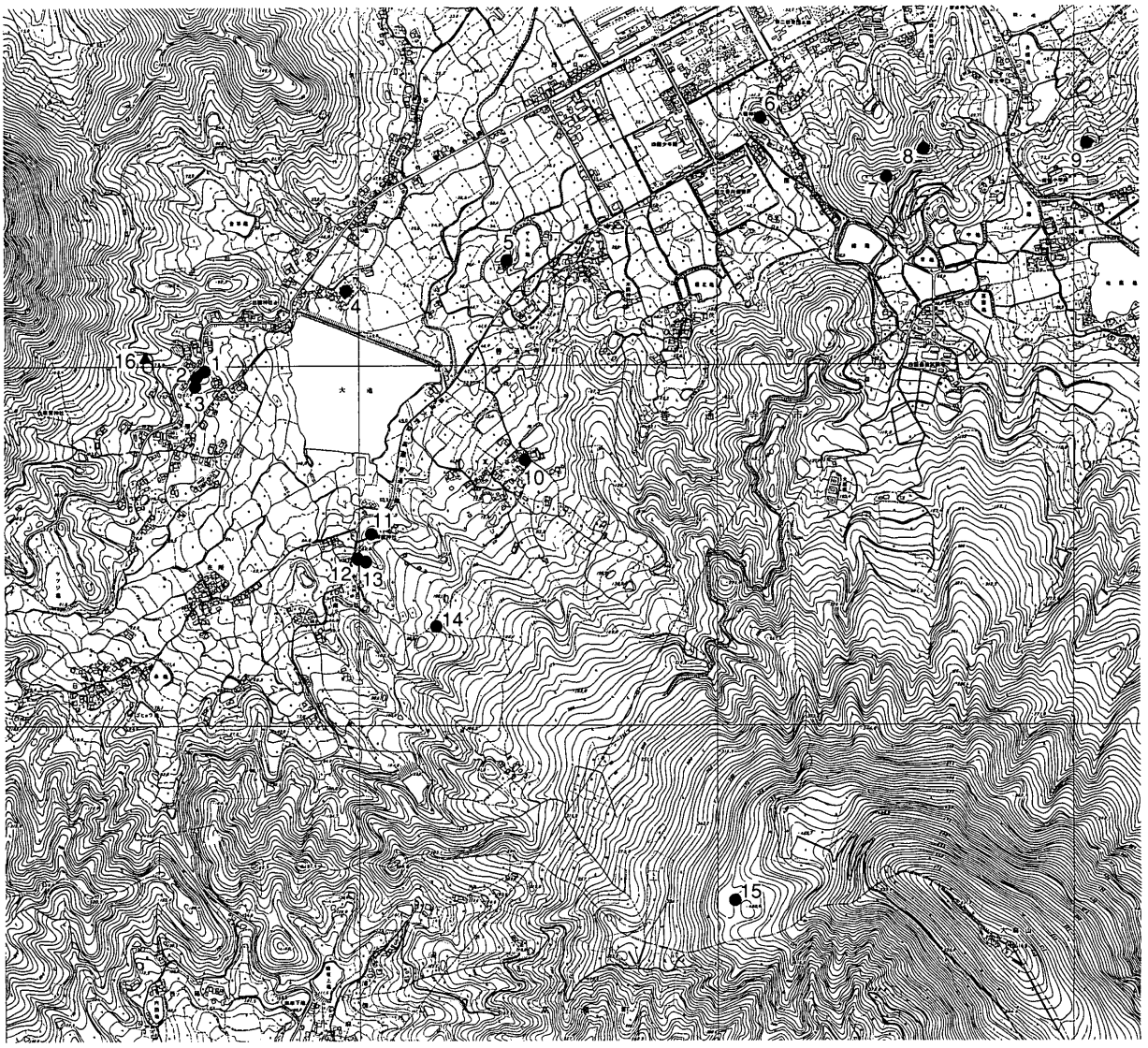
遺物の洗浄と台帳作成は4月～6月に現地作業と並行して現場事務所で行った。12月からは埋蔵文化財センターに戻り整理作業を開始した。12月に注記、接合作業・復元を行い、1月から遺物実測や遺構・遺物版下作成、トレース、遺物写真撮影、原稿執筆、編集などを行った。

整理作業は、現地調査を担当した文化財専門員　森　格也、主任技師　松岡　晶、調査技術員　漆原啓悟がそのまま担当した。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

北原２号墳・北原遺跡は善通寺市善通寺町に位置し、我拝師山から南東側に派生する尾根の先端部の標高63.5ｍ～67.0ｍの所に位置している。我拝師山を始め筆ノ山、香色山といった周辺の山はいずれも急峻な円錐形で、大部分は安山岩および凝灰岩で形成されており基盤は花崗岩である。この周囲の山と同様で北原２号墳、北原遺跡は花崗岩風化土壌層と安山岩風化土壌層上に立地している。遺跡の南東から東側にかけては我拝師山山系と大麻山山系に挟まれた扇状地が展開しており、遺跡の東側はこの扇状



１．北原２号墳　　２．北原１号墳　　３．北原３号墳
４．菊塚古墳　　５．王墓山古墳　　６．丸山古墳
７．鶴ヶ峰４号墳　　８．鶴ヶ峰山頂古墳　　９．磨臼山古墳
10．瓦谷古墳　　11．御館神社古墳　　12．宮ヶ尾１号墳
13．宮ヶ尾２号墳　　14．宮ヶ尾３号墳　　15．野田院古墳
14．銅鐸出土推定地

第３図　周辺遺跡図（1/20000）

地に向かって下ってゆく。この扇状地を挟んで反対側には大麻山山塊が広く展開している。また遺跡の南西側は中山と東部山が接近し三豊郡高瀬町との境をなす大日峠となっている。反対に北東側に下ると丸亀平野の南西部に至る。

第2節　歴史的環境

我拝師山山麓と大麻山山麓、および両者にはさまれた扇状地一帯の北原2号墳、北原遺跡周辺の遺跡を概観する。

当地域には今のところ旧石器時代と縄文時代の遺跡は見つかっていない。

弥生時代では集落遺跡では本報告および北原3号墳部分の北原遺跡が知られるのみである。しかし我拝師山の北側の月信遺跡や吉原火上山遺跡のように山麓の緩斜面部などに集落が存在する可能性は高い。しかし青銅器の出土は多い。遺跡のすぐ西側で我拝師山の山裾の斜面の通称シンネバエで、弥生時代中期と考えられる扁平紐式銅鐸が出土している。同じく我拝師山北麓の我拝師山A遺跡、B遺跡で平形銅剣が1口ずつ、我拝師山C遺跡では外縁付紐式流水文銅鐸が1口出土している。大麻山の北西側の山裾に位置する瓦谷遺跡では中細形銅剣4口、中広形銅剣1口、平形銅剣2口、中細形銅矛1口が出土している。墳墓としては王墓山古墳の北東部で後円部に隣接した箇所で、弥生時代終末期の箱式石棺と小竪穴式石槨からなる集団墓が検出されているのが注目される。

古墳時代になると最初に大麻山の西麓の標高405mのところに野田院古墳が築かれる。全長45mの前方後円墳で前方部は盛土、後円部は積石となっており、後円部には竪穴式石槨が2基築かれている。県内でも最古式の古墳の一つである。野田院古墳から北西に下った山裾に竪穴式石槨を主体部にもつ御館神社古墳がある。一方、この大麻山の北側山裾部に位置する独立丘陵に丸山古墳、鶴ヶ峰4号墳、磨臼山古墳、鶴ヶ峰山頂古墳がある。これらのうち前3基は前方後円墳で4世紀後半～5世紀前半のものと考えられている。磨臼山古墳では綾歌郡国分寺町鷲ノ山産角閃安山岩を使用した造付石枕をもった刳抜式石棺が出土している。これらに対し、大麻山北西山裾の大池付近には後期古墳が展開している。王墓山古墳は全長46mの前方後円墳で、緩やかに持ち送りする割り石積みの横穴式石室内に石屋形をもつ6世紀前半に築造されたものである。須恵器とともに冠帽・大刀・馬具・玉類などの豊富な副葬品をもち、地方豪族の墓として注目される。6世紀末から7世紀前半に築かれた宮が尾1号墳では玄室の奥壁に線刻画が施されている。

その後、善通寺市の市街地に仲村廃寺、善通寺といった白鳳寺院が建立され、官道である南海道や条里制地割が施工されてゆき古代以降、讃岐の中心地の一つとして栄えて行く。

第3章　北原2号墳の調査成果

第1節　調査前の状況（第4図）

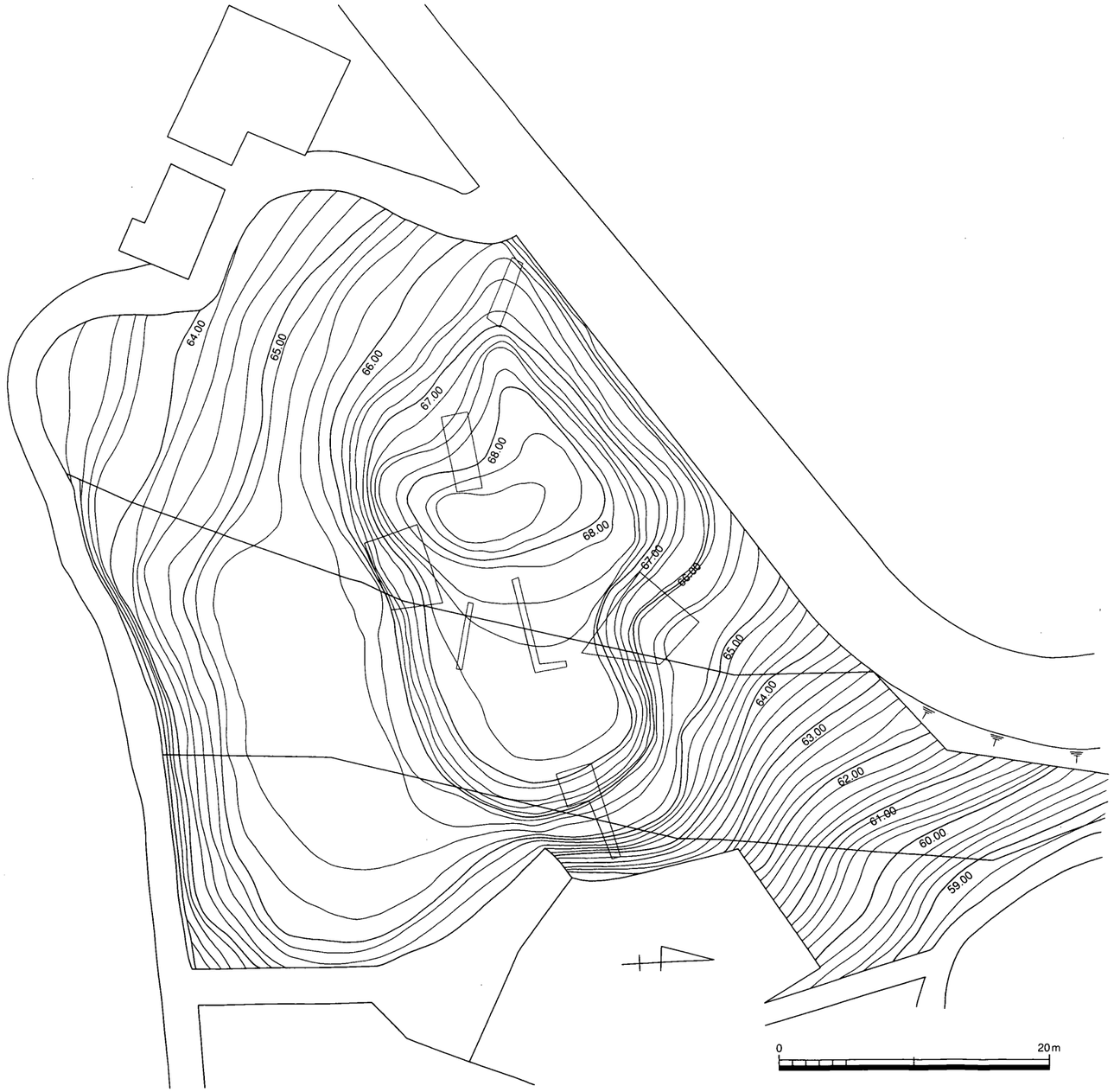
北原2号墳は当初は北原1号墳と合わせてひとつの前方後円墳とされ、2号墳側が前方部と考えられていた。調査前の地形を観察すると確かに前方後円墳状になっていた。しかし平成3年度の試掘調査の結果、1号墳と2号墳の間に周溝を確認し、この周溝は両者を分けるものであり、別の古墳が並んでいることが判明した。この北原2号墳が所在する丘陵はみかん畑として開墾されており、開墾する際に1号墳と2号墳の間が埋められ一つになり、また古墳のすぐ南側に緩く曲がる境界の石垣が作られたこともあって、偶然に前方後円形になったのである。2号墳の東側は墓地造成のために削られており、墓地の水汲み場には古墳の天井石と考えられる石材が置かれている。また南側は平坦な面が続いた後に傾斜して北原3号墳の所在した場所に至る。しかし調査の結果、この平坦面は開墾の際に大きく削られた箇所であることが判明し、元々は2号墳から3号墳にかけて緩やかな斜面になっていたと考えられる。

第2節　墳丘と周溝（第5図～第9図）

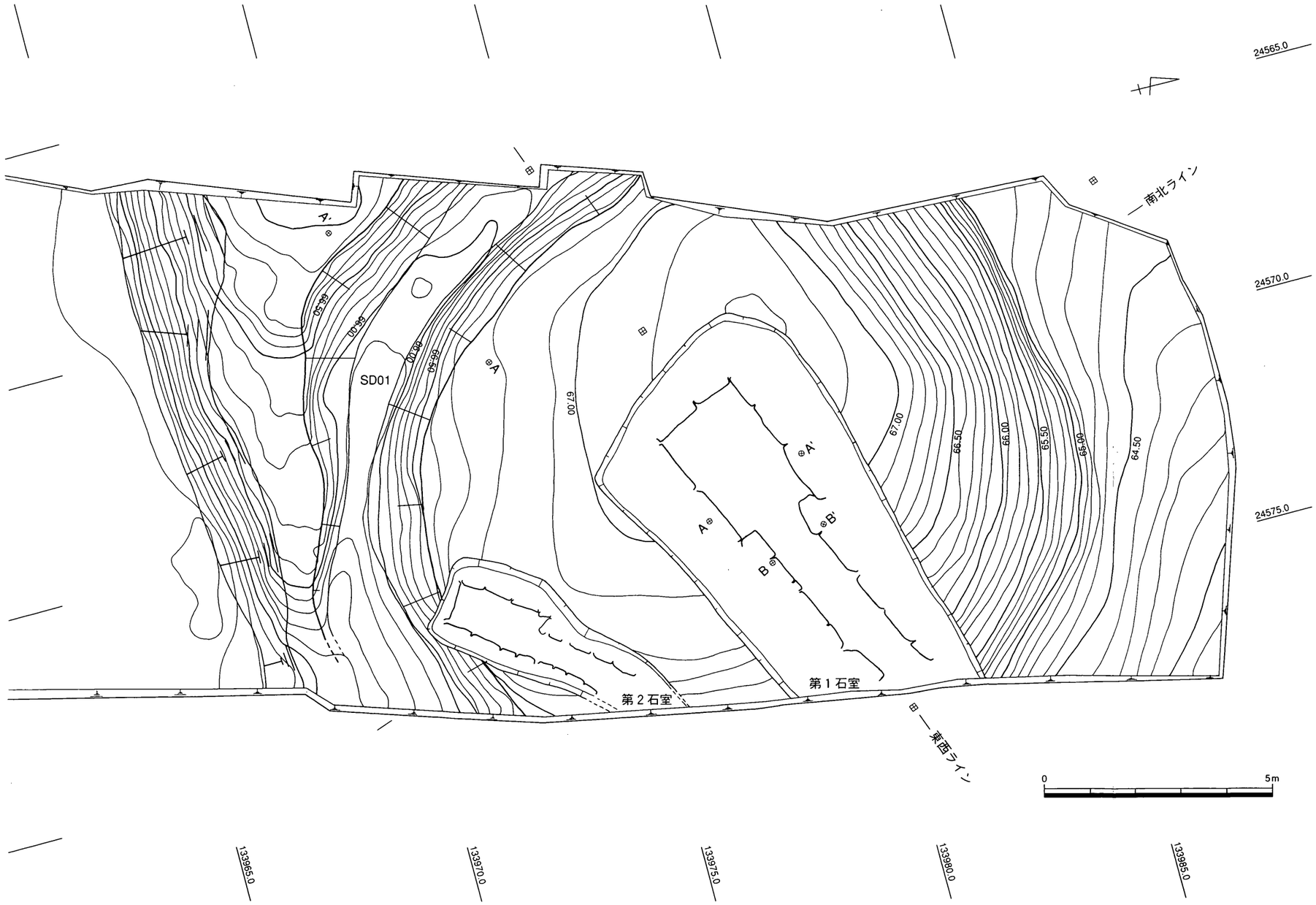
ほぼ東側に開口する大小2基の横穴式石室（大きいほうを第1石室、小さいほうを第2石室とする）を主体部にもつ円墳である。墳丘の東西は調査区外のため全体を検出することが出来なかったが、南北方向は全体を検出することが出来た。

古墳は丘陵の先端部に位置しており、北側はみかん畑のための開墾により改変されている部分もあるが急斜面になっており、調査前の墳丘頂上部と丘陵裾部との比高差は9.5mほどある。墳丘の南北方向の土層の観察によると、66.4mのところで厚さ15cmほどの黒褐色粘質土が堆積しているが、これは古墳築造時の旧地表面と考えられる。この層から10～15cm下で橙色粘土の地山層に至る。この地山層は北側では旧地表である黒褐色粘質土層が途切れた箇所から下り、64.9～65.0mのところで傾斜がやや強く変換した後に緩やかになっている。またこの高さが第1石室の羨門部のすぐ東側の調査区東壁断面に現れた墓道床面の高さと一致していることからも、墳丘の北側部分については64.9～65.0mの傾斜変換部分を墳端と考えたい。一方、墳丘の南側は周溝が巡っており、墳丘側の周溝の下端を墳端とすると直径15.2mの円墳が復元出来る。また№3杭から№2杭に向かって4m地点の第1石室のほぼ中央部を中心にして円を描くと、直径15.2mの円墳のラインに重なる。

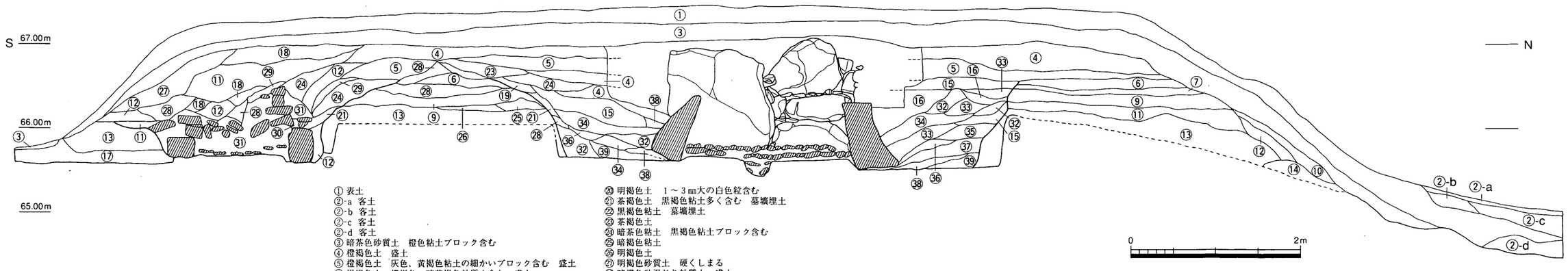
現表土下40cmで橙褐色粘質土となるが、この面が残存する古墳の盛土の上面である。この面ですでに第1石室の奥壁の一部が検出され、石室の天井石は一石も残っていないことが判明した。このことからも墳丘はかなり削平を受けていたことが分かる。この面と墳端との比高差は2.31mでこれが残存する古墳の高さである。また旧地表面である黒褐色粘質土は水平に堆積しており、古墳が築かれる以前のこの丘陵頂部は平坦面があったことが分かる。そしてこの層から残存する盛土上面までは60cmの厚さがある。盛土は黄褐色砂質土、橙褐色や黄褐色粘質土ブロックを含む黒褐色粘質土、橙褐色粘質土の3種類に大別出来る。このうち黄褐色砂質土は旧地表である黒褐色粘質土層の上に敷かれており墳丘築造のための整地土と考えられる。粘質土ブロックを含む黒褐色粘質土は墓壙の一部にかかるようにその上に



第４図　北原２号墳・北原遺跡調査前測量図（1/400）

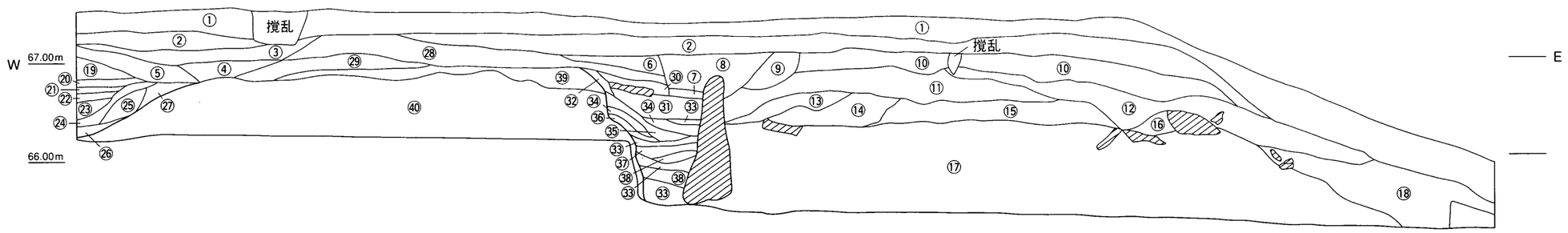


第5図　北原2号墳平面図（1/100）



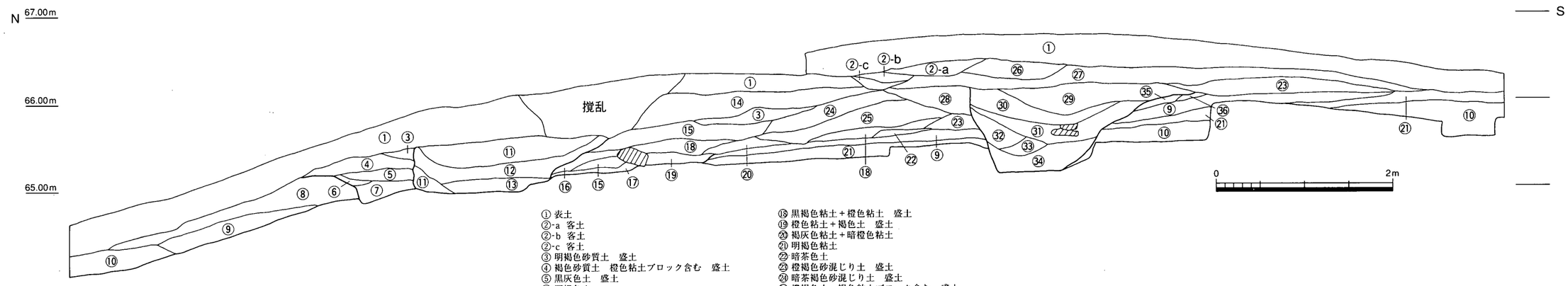
① 表土
②-a 客土
②-b 客土
②-c 客土
②-d 客土
③ 暗茶色砂質土　橙色粘土ブロック含む
④ 橙褐色土　盛土
⑤ 橙褐色土　灰色、黄褐色粘土の細かいブロック含む　盛土
⑥ 黒褐色土　橙褐色＋暗黄褐色粘質土含む　盛土
⑦ 明黄褐色砂質土　盛土
⑧ 暗黄褐色砂質土　黒褐色粘土ブロック含む
⑨ 黒褐色土　旧地表
⑩ 暗褐色土
⑪ 褐色土　盛土
⑫ 橙褐色土
⑬ 橙色粘土　地山
⑭ 橙褐色花崗岩ばい乱土　地山
⑮ 橙色粘土　黒褐色粘土ブロック多い　墓壙埋土
⑯ 橙褐色粘土　灰色粘土ブロック含む
⑰ 黄褐色花崗土　やや風化　地山
⑱ 褐色土　盛土
⑲ 暗褐色土　黒褐色粘土含む
⑳ 明褐色土　1～3㎜大の白色粒含む
㉑ 茶褐色土　黒褐色粘土多く含む　墓壙埋土
㉒ 黒褐色粘土　墓壙埋土
㉓ 茶褐色土
㉔ 暗茶色粘土　黒褐色粘土ブロック含む
㉕ 暗褐色粘土
㉖ 明褐色土
㉗ 明褐色砂質土　硬くしまる
㉘ 暗橙色砂混じり粘質土　盛土
㉙ 暗茶色土
㉚ 暗茶褐色砂混じり粘質土
㉛ 橙色粘土　部分的に砂質ブロック含む　炭水化物少々含む
㉜ 褐色土＋黒褐色粘土　墓壙埋土
㉝ ⑯よりやや砂質　墓壙埋土
㉞ 黒褐色粘土＋橙褐色土　墓壙埋土
㉟ 橙褐色砂混じり粘質土　墓壙埋土
㊱ 黄褐色砂混じり粘質土　墓壙埋土
㊲ 暗橙褐色土　墓壙埋土
㊳ 茶色粘土　墓壙埋土
㊴ 茶褐色砂混じり粘質土　墓壙埋土
㊵ ㊳より砂質強い　墓壙埋土

第６図　北原２号墳南北ライン土層断面図（1/50）



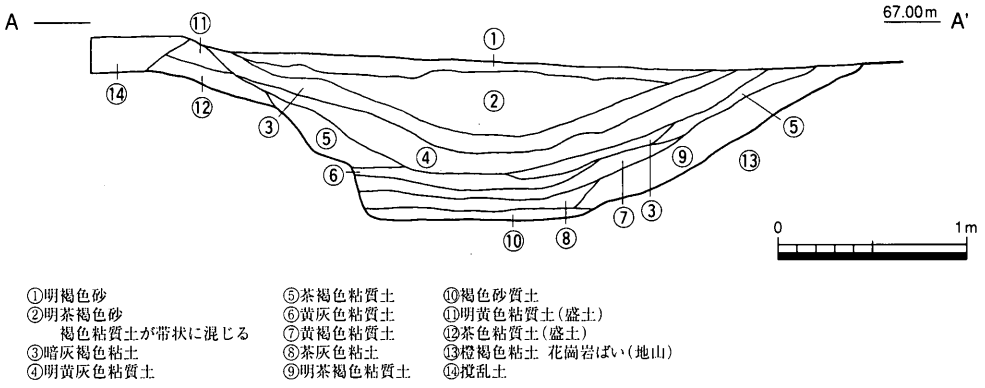
① 表土
② 暗茶色砂質土
③ 褐色土　近世以降の溝
④ 明褐色砂混じり粘質土　近世以降の溝
⑤ 褐色砂混じり粘質土　近世以降の溝
⑥ 橙色土　盛土
⑦ 明褐色土　1～3㎜大の白色粒含む　石室内流入土
⑧ 褐色土　硬くしまる　石室内流入土
⑨ 明褐色土　石室内流入土
⑩ 暗茶色砂質土　橙色、灰色粘土ブロック含む　石室内流入土
⑪ 茶褐色土　橙色粘土ブロック含む　石室内流入土
⑫ 明褐色土　石室内流入土
⑬ 暗茶色土　石室内流入土
⑭ 暗茶褐色砂混じり粘質土　石室内流入土
⑮ 暗茶色土　橙色と暗灰色粘土ブロック含む　石室内流入土
⑯ 暗褐色土　石室内流入土
⑰ 茶褐色土＋茶褐色砂質土　褐色、橙色粘土ブロック含む　石室内堆積土
⑱ 黒灰色土　硬くしまる　石室内堆積土
⑲ 明茶色砂質土　周溝埋土
⑳ 褐色粘質土　周溝埋土
㉑ 暗黄褐色粘質土　周溝埋土
㉒ 暗茶色粘質土　周溝埋土
㉓ 茶褐色粘質土　周溝埋土
㉔ 茶色粘土　周溝埋土
㉕ 明茶色粘土　周溝埋土
㉖ 暗褐色砂質土　周溝埋土
㉗ 褐黄色砂混じり粘質土　周溝埋土
㉘ 橙褐色土　盛土
㉙ 褐色土　盛土
㉚ 明褐色土　墓壙埋土
㉛ 茶褐色土　黒褐色粘土多く含む　墓壙埋土
㉜ 黒褐色粘土　墓壙埋土
㉝ 茶色粘土　墓壙埋土
㉞ 褐色土＋黒褐色粘土　墓壙埋土
㉟ 橙色粘土　黒褐色粘土多く含む　墓壙埋土
㊱ 黄褐色砂混じり粘質土　墓壙埋土
㊲ 茶褐色土　墓壙埋土
㊳ 茶褐色砂混じり粘質土　墓壙埋土
㊴ 橙褐色花崗岩ばい乱土　地山
㊵ 黄褐色花崗土　やや風化　地山

第７図　北原２号墳東西ライン土層断面図（1/50）



① 表土
②-a 客土
②-b 客土
②-c 客土
③ 明褐色砂質土　盛土
④ 褐色砂質土　橙色粘土ブロック含む　盛土
⑤ 黒灰色土　盛土
⑥ 灰褐色土
⑦ 褐灰色土
⑧ 橙褐色土　盛土
⑨ 黒褐色土　旧地表
⑩ 橙色粘土　地山
⑪ 黒灰色土　硬くしまる
⑫ 黒褐色土　やや粘質
⑬ 褐色土
⑭ 褐色砂質土
⑮ 橙褐色土　黒灰色粘土ブロック含む　盛土
⑯ 暗褐色土
⑰ 暗褐色砂混じり土
⑱ 黒褐色粘土＋橙色粘土　盛土
⑲ 橙色粘土＋褐色土　盛土
⑳ 褐灰色粘土＋暗橙色粘土
㉑ 明褐色粘土
㉒ 暗茶色土
㉓ 橙褐色砂混じり土　盛土
㉔ 暗茶褐色砂混じり土　盛土
㉕ 橙褐色土　褐色粘土ブロック含む　盛土
㉖ 明褐色砂質土
㉗ 明茶褐色砂質土
㉘ 灰褐色土＋橙色粘土
㉙ 黒褐色砂混じり土
㉚ 橙褐色土
㉛ 褐色粘土＋黒褐色粘土＋橙色粘土
㉜ 灰褐色土＋橙色粘土
㉝ ㉜よりやや砂質
㉞ 黒褐色粘土＋橙色粘土＋灰色粘土
㉟ 暗橙色土　盛土
㊱ 暗茶色土　盛土

第８図　北原２号墳調査区東壁土層断面図（1/50）



第９図　周溝（SD01）断面図（1/40）

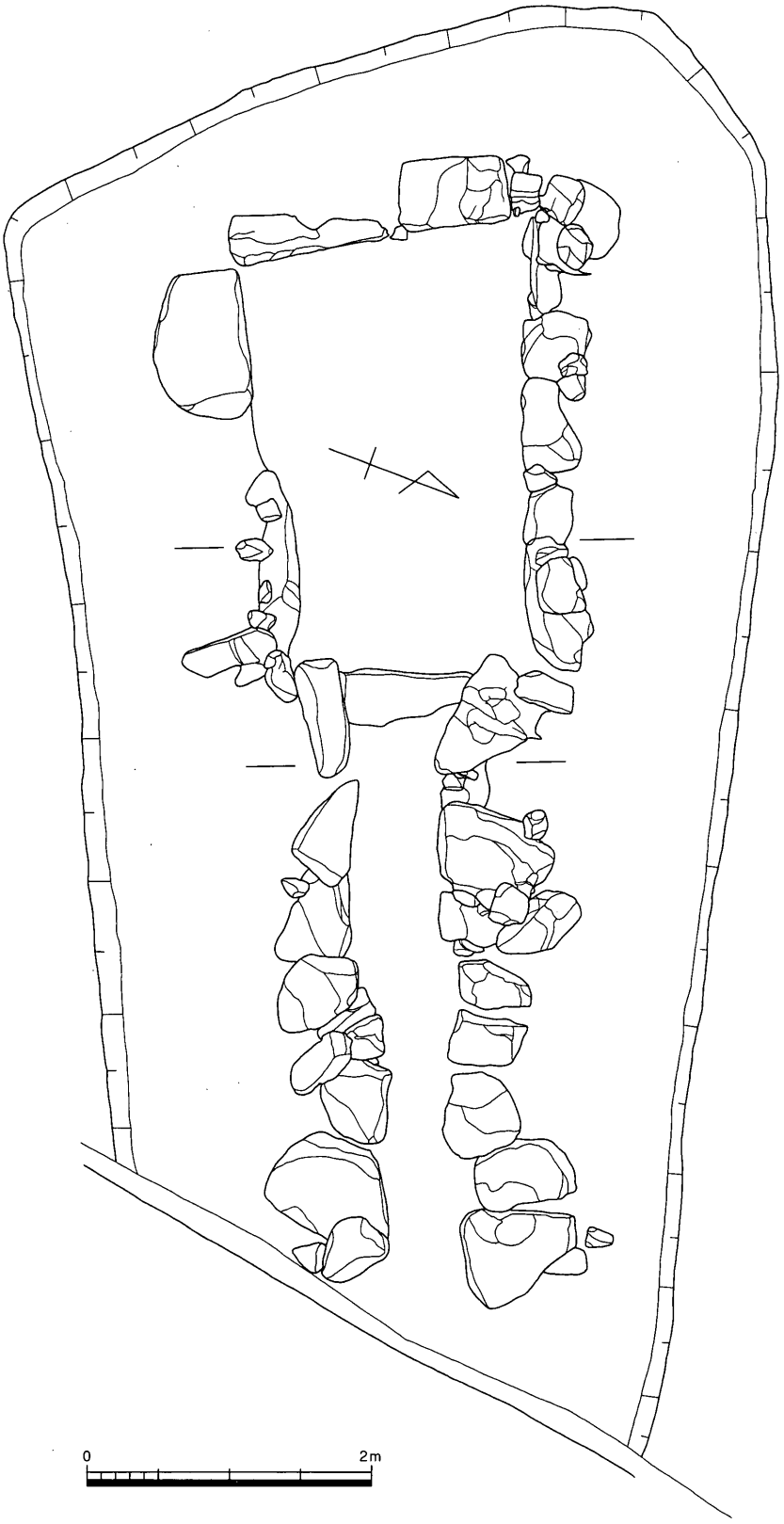
盛られていることから、石室基底石設置後の最初の盛土と考えられる。この土はおそらく周溝を掘削時の初期の段階の土、あるいは丘陵の高い部分を削って整地した土を利用したため、旧地表面の有機物を含んだり地山土に近いものを含んだため黒褐色の粘質土ブロック混じりの土になったものと思われる。橙褐色の粘質土は細かい灰色や黄褐色粘土のブロックを含むものと含まないものがあり、これらを交互に版築していったと考えられる。

これに対して東西方向であるが、第１石室の奥壁側の断面を見ると、67.0ｍ付近で地山層が現れている。反対側の第１石室羨道側の調査区端では65.0～65.1ｍのところに地山層が現れている。古墳の東西両端で地山層で約２ｍの差があり、丘陵が西から東に向かって傾斜していたことが分かる。また第１石室奥壁より西側では、旧地表面である黒褐色粘質土層は見られず、地山面に直接盛土が見られることから墳丘構築時に丘陵の高い部分を削って整地していることが伺える。

第１石室の墓壙掘り方の北側１ｍの66.50ｍの墳丘盛土内で須恵器壷（158）が１点出土している。墳丘築造時の祭祀行為によるものと考えられる。

周溝は墳丘の南側で検出したが、南東部分の調査区際になると撹乱を受けていることもあり不明瞭になる。周溝の幅は2.2～3.7ｍで、調査区の中央部分で狭くなっている。深さは0.7～0.95ｍで底部は西側から東側に向かって徐々に浅くなる。底部の標高は65.7～66.1ｍである。断面形は逆台形に近く底部は平坦に近い。土層断面を観察した箇所では墳丘側は緩やかな段になっていたが、全体としては丸みを帯びている。西側の周溝が明瞭に残っている部分では、墳丘側のほうが掘削角度が急である。埋土は褐色系の砂質土と灰色系の粘土および茶褐色系の粘質土が交互に堆積していた。なお周溝が完全に埋没した後に近世以降の溝が調査区西壁際に掘削されているため、調査区西壁付近の周溝は墳丘側が削平を受けている。周溝からは底部付近で須恵器甕の体部の破片が少量出土したにとどまる。

墳丘の北側部分では周溝を検出することが出来なかった。墳丘の真西部分まで周溝が続き、そこで急に途切れるのは不自然であることと、墳丘北東墳端部の調査区東壁付近で僅かであるが溝状の痕跡が認められたこと、さらに調査区北端部分は削平された後に客土が堆積していることなどから、本来は北側部分にも周溝が巡っていたと考えられる。周溝の墳丘側が墳丘としてそのまま残り、北側の部分が全体に削平されたものと考えられる。南側の周溝の規模を考えると、北側では66.0ｍあたりから周溝になっていたと思われる。北側の墳端は南側の周溝の底部より１ｍ前後低くなっている。これは丘陵先端部の条件の悪い場所に古墳を築いたためか、あるいは丘陵斜面側を意図的に低くして丘陵北側の下方から古墳の側面が良く見えるように配慮したためかも知れない。



第10図　第１石室検出状況・墓壙平面図（1/50）

葺石などの外部施設は認められなかった。また墳丘の盛土や旧地表面から微量の弥生土器が出土している。墳丘の下部や周辺からも古墳時代以前の遺構は検出されなかった。

第3節　第1石室の調査

(1)墓壙（第10図）

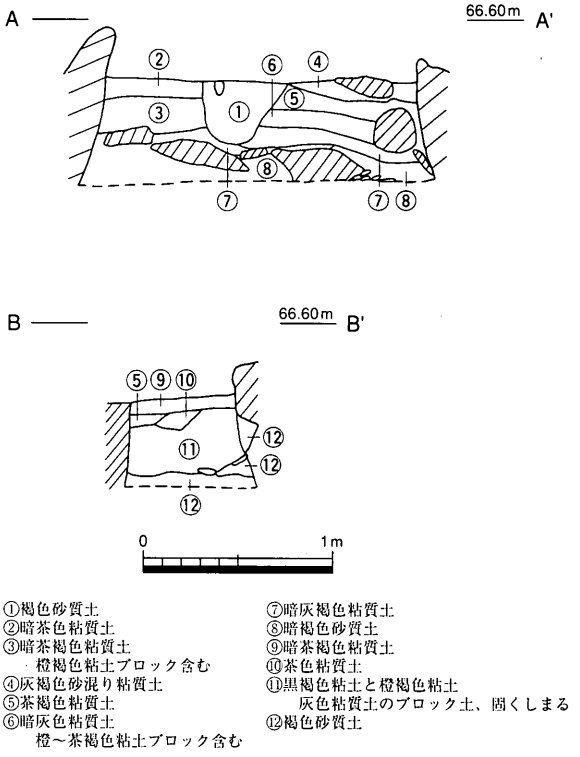
平面形は長方形であるが、東側の開口部に向かって徐々に狭くなってゆく。北西隅は丸みを帯びている。最大幅は玄室奥壁にあたる部分で5.3mあり、これに対して開口部では幅4.0mになっている。墓壙は旧地表面である黒褐色粘質土面に薄く整地土を盛った面から掘削されている。玄室中央部分での墓壙掘削面は66.5m、墓壙底面は65.6mとなっており、90cmの深さがある。また西側部分、すなわち奥壁の裏側部分では墓壙掘削面は66.9m、墓壙底面は同じく65.6mで1.3mの深さがある。羨道中央部では66.2mと墓壙掘削面が低くなっているが、これは旧地形が東に向かって下っているためである。
墓壙の深さは玄室部分では基底石がほぼ収まるものである。羨道部分では墓壙が浅いため基底石が突出した状態であった。墓壙壁面と石室石材との間は奥壁部分で40cm、玄室部分で80～90cm、羨道部分では1mほどと全体に余裕がある。

墓壙の埋土は南北方向では玄室の袖部に近い部分で観察したが、側壁の石が土圧により傾いており、これに伴い埋土も動いているが、大きな層序の乱れは認められなかった。埋土は基底石の下半部までは15cmほどの厚さで橙褐色や黄褐色の砂混じり粘質土を交互に充填している。そして底部の石材を据える部分には粘性の強い茶色粘土を敷いている。上半部では黒褐色や灰色粘土の混じった燈褐色系粘土をやや厚めに充填している。奥壁部分でも同様にして石を固定しているが、石の上半部については黒褐色粘土を多く含む茶褐色粘質土を厚く充填している。

(2)石室の検出状況（第10図～第11図）

現表土下40cmで奥壁の一部を検出し、同時に天井石が残っていないことも確認した。試掘調査時に羨道の一部を検出していたので、石室の部分のみ若干掘り下げて側壁と奥壁の上部を検出して石室の規模を確認した。検出時には羨道の幅が50～60cmと非常に狭く奇異に感じたが、調査の進展とともにこれは基底石より上部の石が土圧により押し出されたためと判明した。また北側の袖石も斜めに開いていたが、これも土圧により動いたものと後に判明した。

石室の埋土は床面から20cmほどの65.8mまでは茶褐色系の砂質土と粘質土が堆積していた。これは石室がその形状を保っている時に堆積した層である。ここから石室検出面までの70cmの間は茶色や褐色系の粘質土や橙色系の粘土がブロック状に堆積



第11図　第1石室玄室・羨道埋土断面図（1/40）

しているとともに、側壁の石材が多量に崩落していた。石材は一部床面近くまで達しているものもあり、この崩落の衝撃により破砕した土器や潰れた金属器も見受けられた。橙色系の粘土は側壁の石を固定していた墳丘盛土が石とともに崩落したものと考えられる。天井石や側壁の上部の石はおそらく開墾時に引き抜かれたものだが、石室上部から盗掘を行った痕跡は認められなかった。

(3)石室（第12図～第13図）

主軸をN－70°－Eにとり、東側に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の残存状況は悪く大形の基底石と下から2～3段しか残っていなかった。基底石でも土圧によりずれたり傾いたりしているものもあった。特に羨道では大部分の基底石の上に積まれた石が内側に押し出されていた。石材は花崗岩、角礫凝灰岩、安山岩があるが、大形の石材は前2者の割合が多い。

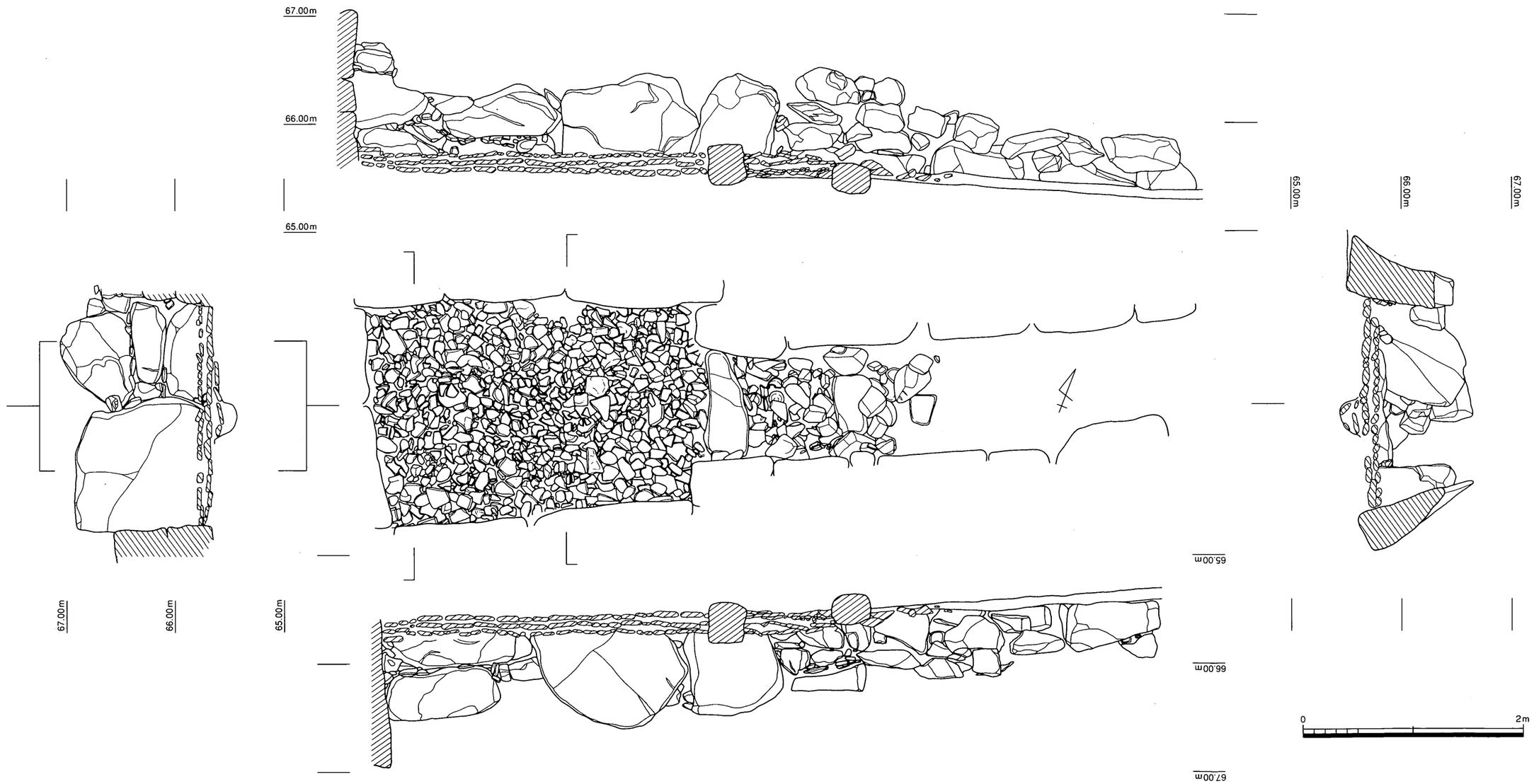
石室の規模は玄室で長さ3.0m、奥壁幅2.05m、玄門側の幅1.85mと奥壁側に比べて玄門側の幅が若干狭くなっている。玄室の最大幅は奥壁幅になり、側壁は右側（南側）が直線的、左側（北側）が袖付近で内側に少し突出する。玄室の長さに対する幅の割合、いわゆる玄室比は3.0／（2.05＋1.85）÷2＝1.54となり寸詰まりの長方形になる。羨道は長さ4.6m、幅1.05m、開口部幅0.9mで玄室に比べて約1.5倍の長さをもつ。玄室と合わせた石室の全長は7.6mとなる。残存する最大高は奥壁部分で1.3mである。

奥壁は1.1m四方の正方形の大形の石を南側に据え、北側に長方形の石を横にして2段積み上げ、さらにその上に山形の石を積んでいる。右（南）側壁は基底石は2石で、奥壁側は長方形の石を横にして2段積んでいる。奥壁側基底石と奥壁は角を合わすようにして据えられている。袖側は大形の基底石である。左（北）側壁は基底石は3石で、奥壁側の2石は隅丸の長方形の石を横にして3段と2段積んでいる。奥壁側の基底石は奥壁の側面に組み合わせている。奥壁側の下から2段目の石は角を削って石を積みやすいように工夫している。袖側は右（南）側壁と同様に大形の石を据えている。石と石の隙間には拳～人頭大の塊石や掌大の板石を詰めている。

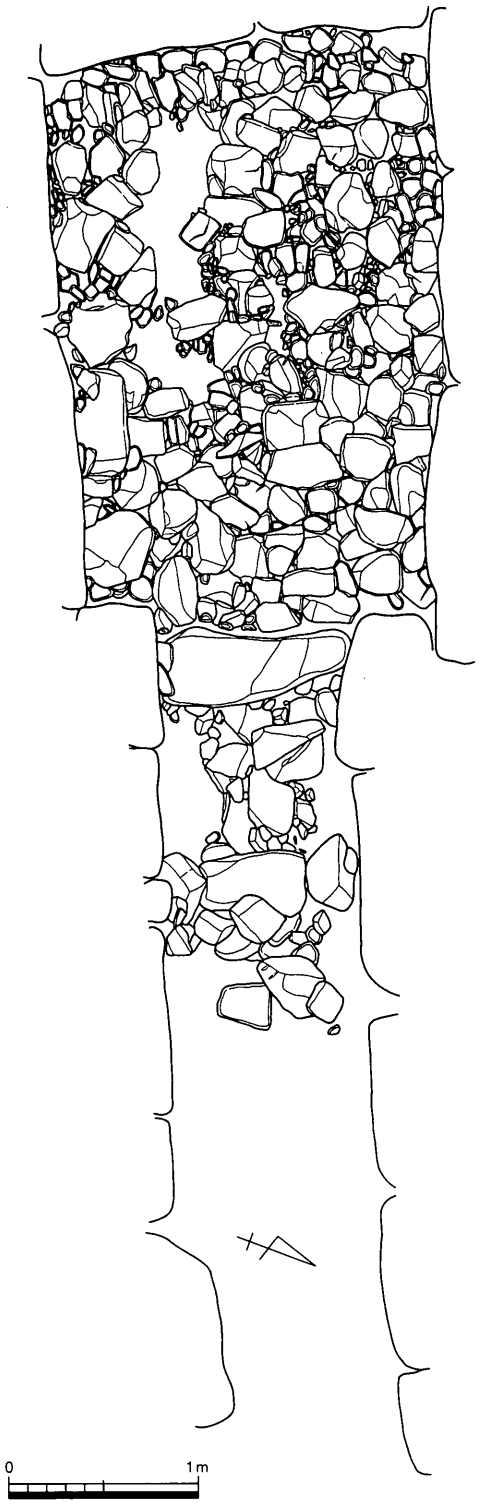
袖石は両側とも幅80cmの大形の石を据えている。左（北）袖石は土圧により動き傾いている。原位置を保っている右（南）袖石は玄室部分で40cmの幅をもつ。この両袖石の幅のまま羨道に続いている。袖石の高さは両方とも75cmで、側壁の1石の大形基底石の頂部と2段目の石の頂部と同じになっている。

羨道は右（南）側の基底石は袖石を入れて6石、左（北）側の基底石は袖石を入れて5石である。羨道の基底石は長方形の石の狭い面を羨道側に向けている。その上には幅40～60cmほどの玄室よりも一回り小さい石を積んでいる。中には丁寧に面取りをしている石もある。左（北）側の基底石の最も東側の石の50cm東側の調査区東壁部分ですでに墓道の断面が現れていることや、石の抜き取り痕跡が認められないことから、この東端の石が羨門石と考えられる。右（南）側の基底石のうち最も東側の石は他の基底石に比べて20cmほど内側に突出している。調査の最終段階でこの石を引き抜いてその痕跡を見ても動いている様子はないことから、当初から内側に突出していたものである。明瞭な抜き痕は認められなかったが、左（北）側の羨門石に合わせて、右（南）側にあと1石あった可能性がある。

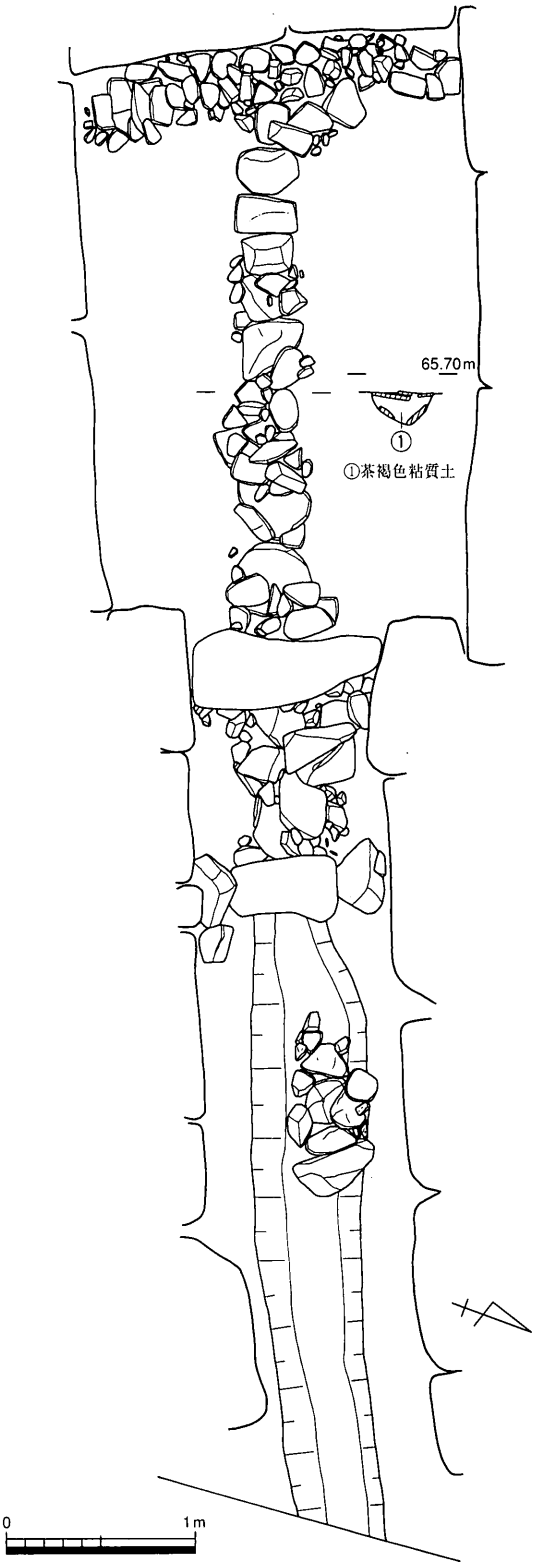
玄室の床面には全体に主に10～15cmの安山岩の板石が敷き詰められていた。玄室の中でも玄門部付近の1mほどの範囲は大きめで厚みのある石が目立ち、石が重なっている部分が多々ある。さらに右（南）側壁と奥壁の交点付近も同様に大き目で厚みのある石が目立つ。これらの礫床上から遺物が多数出土したことからこの面が埋葬面と考えられる。さらにこの5cmほど下には主に20～25cmほどの一回



第12図　第１石室平面図、立面図（1/40）



第13図　第１石室下層礫床平面図（1/40）



第14図　第１石室排水溝平・断面図（1/40）

り大きい板石が敷かれていた。中には40～50cmほどのものも数点あり、板石と板石との隙間には拳大の円礫が詰められていた。そして上層の石と下層の石の間には上下の石を粘着するように粘性の強い暗灰～灰色粘土が敷かれていた。この粘土層と下層の礫床上には遺物は全く出土しなかった。

両袖石の間の玄門部には長さ1.05cm、最大幅40cm、厚さ38cmのやや先細りの長方形の仕切り石が置かれていた。さらにこの仕切り石の東側（羨門側）80cmのところに、長さ60cm、最大幅35cm、厚さ28cmのやや小さめの仕切り石が置かれていた。この仕切り石の両側には羨道側壁との隙間を埋めるように人頭大の塊石が置かれていた。また小形の仕切り石のある部分の右（南）羨道側壁には幅20cm、高さ30cmほどの立柱石が据えられており、内側に僅かに突出している。この両仕切り石の間の部分にも玄室と同様に基本的に上下２層の礫が敷き詰められていたが上下間の粘土層は認められず、下層礫層上まで遺物が多量に出土した。礫が敷かれても玄門部の仕切り石はなお10cmほど突出しているが、羨門側の仕切り石は上面の礫とほぼ同じ高さになる。この東側の小さい仕切り石を境に羨門部までの間は礫は敷かれず土床となる。

(4)排水溝（第14図）

玄室から羨道の仕切り石間にかけては上下２層の礫床であったが、下層の礫を除去すると排水溝が検出された。排水溝は奥壁に接するように玄室幅全体に施され、奥壁中央部分で玄室中央部分を羨道方向に向かう溝と合流し、玄室部分ではＴ字形になっている。玄室からの排水溝はそのまま羨道を抜けて羨門部へと至る。調査区外になるがおそらくこのまま墓道に取り付くものと思われる。

排水溝は玄室部分では幅30cm前後、深さ15cmほどで地山面を掘り込んでいる。断面形はＵ字形で埋土は茶褐色粘質土の単一層であった。溝の内面の壁には特に奥壁部分には入念に護岸状に板石を貼り付けていた。この貼石は玄室の中央を羨道方向に向かう排水溝では部分的であった。そして30cmほどの板石で蓋をしている。この状況は羨道の羨門側の仕切り石部分まで続いている。排水溝は２つの仕切り石の下を通過しており、この部分は仕切り石が蓋の代わりをしていた。羨門側の仕切り石から羨門にかけては素掘りになり部分的に石が充填されていた。

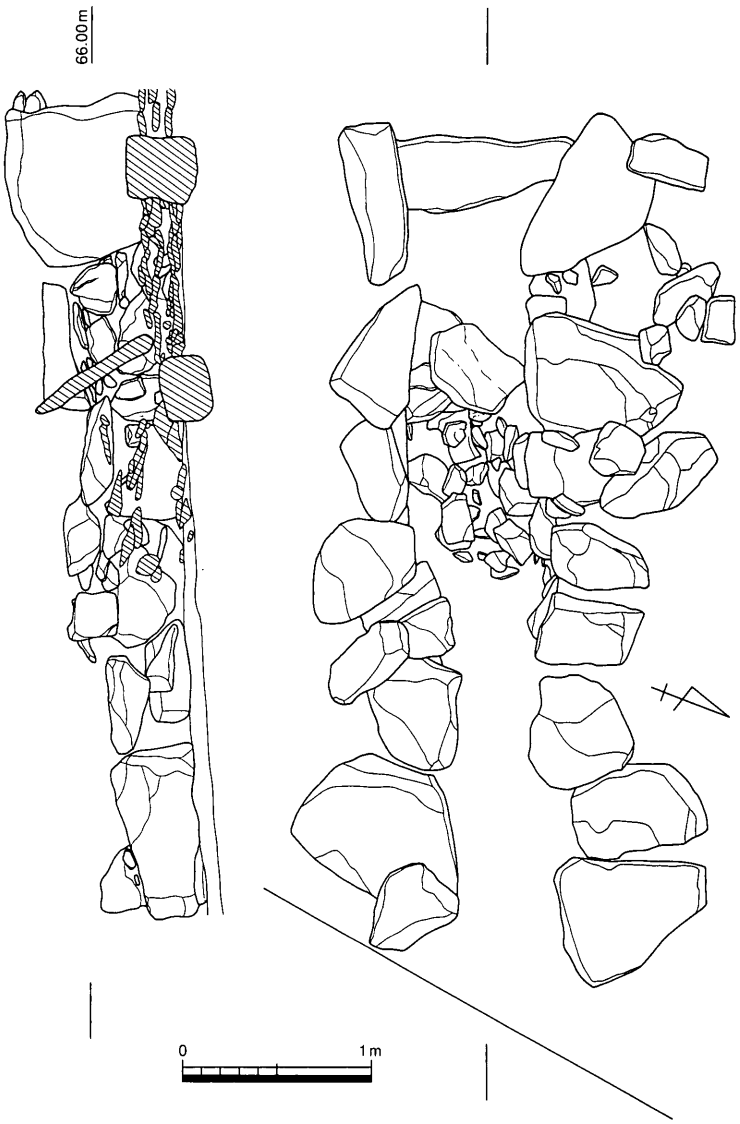
排水溝は玄室から羨門部にかけて緩やかに傾斜をつけており、床面に礫を敷く部分にはその礫が転落しないように石で蓋をするなど全体に入念な作りになっている。

(5)閉塞施設（第15図）

羨道の羨門側の仕切り石部分で、現存最大高75cm、最大幅60cm、最大厚7.5cmの安山岩の板石を検出した。先端部から側縁部にかけては折れており、その破片が周囲に散乱していた。検出時にはこの板石に隣接して崩落して落下した羨道側壁の大形の石があったので、板石はおそらくこの石が落下した時に当たり割れたものと思われる。検出時にはこの板石は基部を玄室側に、先端部を羨門側に向けて斜めになっていた。この板石は閉塞に用いられたもので、本来は羨門側の仕切り石の上に立てられていたと考えられる。

また羨門側の仕切り石から羨門方向に80cmほどの部分には人頭大の塊石や10～15cmほどの板石が盛り上げられていた。当初、羨道の石が崩落して落下した可能性も考えたが、羨道の他の部分ではこのような盛り上がりが見られないことや、盛り上げられた石と石の隙間には他の部分の羨道の埋土とは異なる硬くしまった暗茶色粘質土が堆積しており意図的に固められた様子であることから判断して、板石の

裏側の支えとしての閉塞施設と考えたい。



第15図　第１石室羨道閉塞施設平・断面図（1/40）

(6)墓道

羨門石の0.5ｍ東側で調査区の東端になるが、羨門部から調査区東壁までの間で平面的に墓道の検出は出来なかったが、この東壁の土層（第８図）に墓道の掘り方が表れている。この部分の上部は削平を受けた後の客土が堆積しており、墓道の掘り込み面は65.5～65.6ｍで床面から0.6ｍほどしか残っていない。そして石室の墓壙掘削後に石材の積み上げとともに盛土をおこなった面からの掘削になっている。墓道の掘り方は南側は斜めであるが北側は急になっている。埋土は硬くしまる黒灰色砂混じり粘質土と黒褐色粘質土の黒色系の土が堆積している。

羨門石と調査区東壁までの僅かな部分で、杯蓋（25）、高杯（48）、平瓶（55）が出土している。

(7)遺物の出土状況（第16図）

第１石室は石室の上半部は石材の抜き取りや崩落で失われていたが、玄室・羨道ともに床面は良好に残っていた。しかし一部は石材の崩落時に割れたり潰れたりしていた。そのため遺物の若干の動きはあるものの概ね埋葬時の状態をとどめているものと考えられる。また遺物は最終埋葬時の姿であり、初葬時や早い段階での遺物は新しい段階での埋葬時に二次移動している可能性がある。

玄室では土器はすべて須恵器で杯蓋13点、杯身12点、壺１点が出土した。土器は玄門部から右（南）袖部にかけてと、南西部分に集中していた。しかし早い段階の埋葬時の土器を玄室隅に片付けて集めているような状況は認められなかった。玄門部の土器集中部分は玄室内の礫床がやや厚みを増しており、礫が重なり合っている部分が多い場所である。この重なり合った礫の間から１・２・15・19の古い様相を示す須恵器が出土した。そして礫の上面に貼り付くようにして９・10・20・21などの新しい様相を示す須恵器が出土している。このことから玄門部付近では追葬時に礫を上から薄く敷き直しているこ

第16図　第１石室遺物出土状況（1/40）

とが分かる。この玄門部の土器集中箇所では9・15・18・19の杯蓋が天井部を下にした反対向きで出土している。10の杯身も底部を上にした反対向きで出土している。これに対して南西部分では土器は同じ高さの礫床上から出土している。このうち8・28・32の杯身が底部を上にした反対向きで出土しており、杯蓋はすべて天井部が上の通常の向きで出土した。

これら玄室出土の須恵器は形態・法量・胎土・色調から判断して5組の杯蓋・杯身のセット(1－2、3－4、5－6、7－8、9－10)が確認された。このうち3－4のセットが1m離れているほかは、隣接して出土している。7－8のセットのうち8の杯身が底部を上にした反対向きで、さらに9－10のセットは杯蓋・杯身とも反対向きでそれぞれ出土した。

玄室内の鉄器は図化出来たもので25点でこのうち18点は鉄鏃である。原位置を保っているものは須恵器の分布とほぼ重なるように出土している。玄門部付近ではすべて鉄鏃が出土しているのに対して、南西部分では鉄鏃に加えて奥壁際で刀子とそれに伴うと考えられる鞘口金具が出土している。

玉類・耳環といった装身具はすべて玄室で出土している。特に耳環は確実なもので17点と多量に出土しており、形態上から8対16点が考えられる。このうち5対は10～20cmの間隔で装着していたと考えられる状況で出土している。104－105は玄室南西隅、112－113は左(北)側壁の奥壁から1石目と2石目の境部分、115－116は玄室中央、110－111は玄室中央やや北寄りで出土している。また119－120は60cmほど離れているが120の耳環が押し潰されて曲がっていることから崩落した石材に当り潰れて動いたものと考えられ、本来は119に隣接していたものと考えられる。この他4点は単独で、3点は玄室埋土中からの出土である。玉類は玄室中央やや北寄りで121の空玉と122のガラス小玉が出土しており、その他の玉はすべてガラス小玉で玄室埋土中からの出土である。この玄室中央やや北寄り部分が最も耳環・玉類が集中しており、この部分で人骨の細片が3点出土している。

羨道でも出土土器はすべて須恵器であった。杯蓋7点、杯身7点のほか、高杯・平瓶・横瓶・壷・甕が出土している。羨道の2石の仕切り石の間の部分では最下部の排水溝の蓋石の直上まで礫とともに遺物が出土している。この部分で出土した須恵器は13点が図化出来たが、11－12、13－14の杯蓋と杯身のセットがある。このうち11の杯蓋は反対向きで出土した。ほかに2点の杯蓋、1点の杯身があるがそれ以外の6点が高杯であった。半分近くが高杯であったことは注目される。また羨門側の仕切り石上から高杯2点と平瓶2点が出土している。さらにこの仕切り石間で、図化出来た18点のうちの94以外のすべての鉄器が出土している。鉄器は鉸具・雲珠あるいは辻金具・轡・兵庫鎖といった玄室では1点のみであった馬具類が中心で、鉄鏃は3点と少ない。また図化出来なかったが、大刀の刀身部分と考えられる鉄片が3点ほど出土している。羨道の埋土から耳環の破片と考えられるものが1点出土した以外は玉類・耳環といった装身具は出土していない。

遺物ではないが、羨門側の仕切り石上の北側20cm四方と、この仕切り石の西側(玄室側)25cmのところにある礫の上面に炭化物が付着しており、火を使った痕跡が認められることは注目される。

羨門部から羨道の玄室方向約1mにかけての部分では壷(57・58)、甕(59)・横瓶(60)・平瓶(55)・高杯(47・48)・高杯蓋(40)・杯蓋(25)・杯身(38)が出土しているが、横瓶がやや奥まった位置にあるほかは羨門部中央に集中している。55の平瓶が底部を上向きにした反対向きであった以外は通常の方向、あるいは高杯などはそのまま横に倒れた状態で出土している。38の杯身は58の台付壷の下に重なって出土している。また59の甕・60の横瓶はそこに据えられた状態で一部土圧で押し潰されて出土している。

(8)**埋葬位置**（第17図）

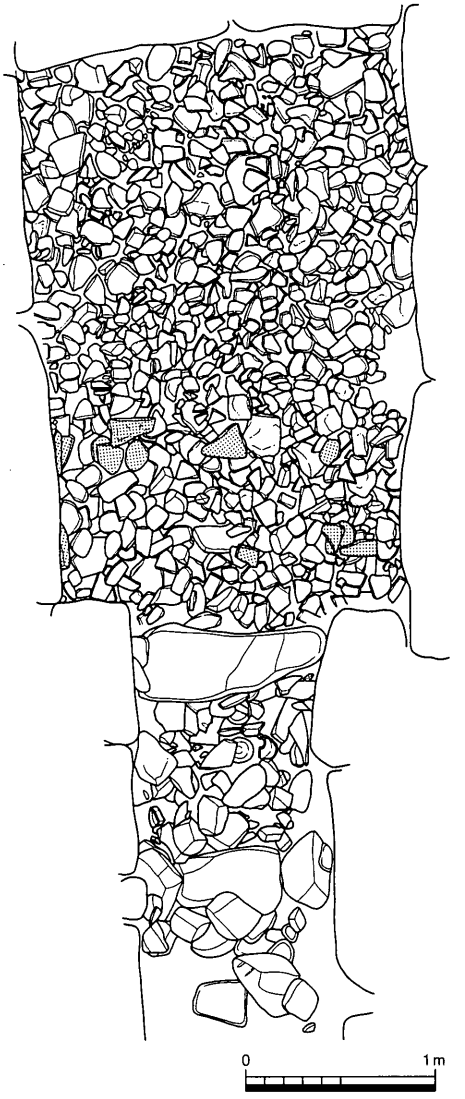
玄室からは17点の耳環が出土しており、このうち形状から8対のセットが認められる。耳環が2点で対になって被葬者に装着されていたという前提に立つと、出土状況から104・105、110・111、112・113、115・116の4対はその場での埋葬が考えられる。特に110・111の30cm西側には骨片が3点出土しており、この部分の埋葬は確実といえる。119・120は60cmほど離れているが、120は側壁の落下により押し潰されて動いていると考えられ、本来は119の位置にありそこが埋葬位置と考えられる。107と117はそれぞれ対になる耳環が玄室埋土中からの出土となっているが、対になるものが本来は107と117の部分にあったかどうかは不明で、埋葬位置を確定することは難しい。108と109の対は2m離れているが、このうち108は他の遺物より高い位置から出土していることから二次移動が考えられる。しかし109が本来の位置であるとは言い切れない。

上記の耳環のセットのうち104・105は玄室の奥壁際の南西部分で原位置を保って出土していると考えられる。またこの耳環104と20cmほど離れた奥壁沿いではこの被葬者への副葬品と考えられる刀子が出土している。耳環の位置が被葬者の頭部の位置と考えると、耳環と奥壁との間は15～20cmしかなく、被葬者の頭部の長さや刀子の位置を考慮すると、木棺を置くには奥壁との間が狭い。

これに対して、玄室の玄門部前面の部分には一石欠けているが、40cm間隔で突出した石が玄室に直交方向に長方形に並んでおり、棺台の石の可能性が高い。この他に玄室の礫床のなかで特に棺台となり得るような突出した礫は数点あるが、規則正しく並んだものはなく、右（南）側壁際や奥壁際に多かった。これは追葬時に古い埋葬時の棺台を隅に動かしたためかも知れない。しかし玄室・羨道を含めて鉄釘は全く出土していないし、木棺そのものや粘土化した痕跡も認められなかった。

玄室には追葬に伴い遺物を片付けた状況は認められなく、また玄室の規模からも被葬者がすべて木棺に埋葬されていたとは考え難い。木棺の可能性があるのは上記のように玄室の玄門部前面部分の南北方向部分である。位置的にもこれが最終埋葬と考えられる。

以上のことから被葬者は耳環配置から5体、棺台配置から1体の合計6体の復元が出来る。鉄釘が出土しないことが、組合式の木棺を使用していたという証明にはならない。したがって104・105の部分のように木棺を使用しない直葬の可能性を考慮に入れなければならないものも含まれている。そのために玄室床面は湿気を防ぐために、間に粘土を挟んだ二重の礫床で排水



第17図　第1石室玄室棺台石（1/40）

溝をもつ丁寧な造りになっていたのではなかろうか。耳環が2個1対で装着されていたという前提での復元であるが、この前提が正しいのか、あるいは本来の位置から遊離した他の耳環をどのように考えるのか、これにより被葬者数が増えるのかどうかなど、議論の余地はある。

第4節　第1石室出土遺物（第18図～第24図）

第1石室からは土器・鉄器・玉類・耳環が出土した。土器は羨道の整地土から弥生土器の細片が少量出土した以外はすべて須恵器である。玄室から26点、羨道から34点が出土した。鉄器は図化出来たもので玄室で25点、羨道で18点である。玉類はすべて玄室出土で6点、耳環もすべて玄室出土で17点と耳環と考えられる細片が1点あるがこれは図化出来なかった。

(1)土器

杯蓋・杯身（第18図　1～33、第19図　34～39）

石室出土の杯蓋・杯身は形態・法量・胎土・色調から判断して玄室で5組のセット（1－2、3－4、5－6、7－8、9－10）が、羨道で2組のセット（11－12、13－14）がある。

（杯蓋）

杯蓋は天井部に回転ヘラ削りを施すもの（1・7・11・13・15・16・17・18・23）と、ヘラ切り未調整のもの（3・5・9・19・20・21・22・24・25）に大別出来る。26・27は天井部が欠損しているがおそらくヘラ切り未調整と思われる。

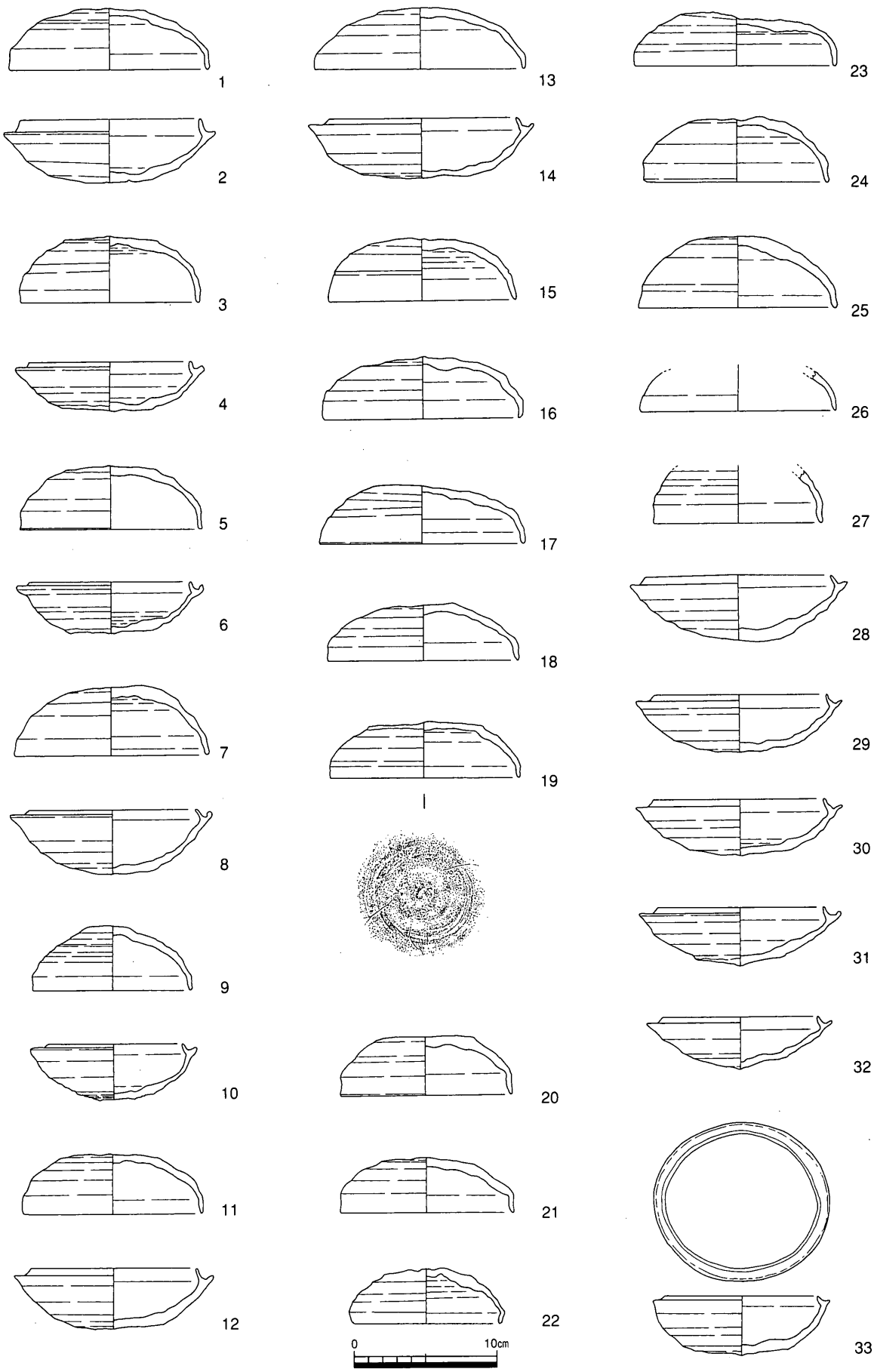
回転ヘラ削りを施す一群の口径は12.6～14.8cmで平均13.7cmである。また器高は4.0～4.8cmで平均4.3cmである。回転ヘラ削りは天井部1/3の部分に施されており、中には23のように天井部の頂部にヘラ切り痕を残し、その周囲に回転ヘラ削りを施すものもある。7・11・23がロクロ左回転の回転ヘラ削りの他はロクロ右回転である。回転ヘラ削り以外の天井部～口縁部と内面は回転ナデで、13・15・17は最後に天井部内面に仕上げナデを施す。形態的には、天井部は17・23が斜めで平坦に近い他は丸みを帯びている。1は口縁部は真下に向き、天井部との境には稜線をもつ。15は天井部と口縁部の境に沈線が巡る。1・15ともに焼成は悪く摩滅している部分が多い。

天井部ヘラ切り未調整の一群は口径10.5～14.0cmで平均12.6cm、器高3.8～4.9cmで平均4.2cmとなっており、回転ヘラ削りを施す一群よりも小型化している。ヘラ切り痕が突出したりして天井部は雑である。口縁部は真下を向くものが多く、強くナデているものが多い。9・22は回転ナデによる凹凸が著しい。19は天井部内面に同心円状の当て具痕がある。

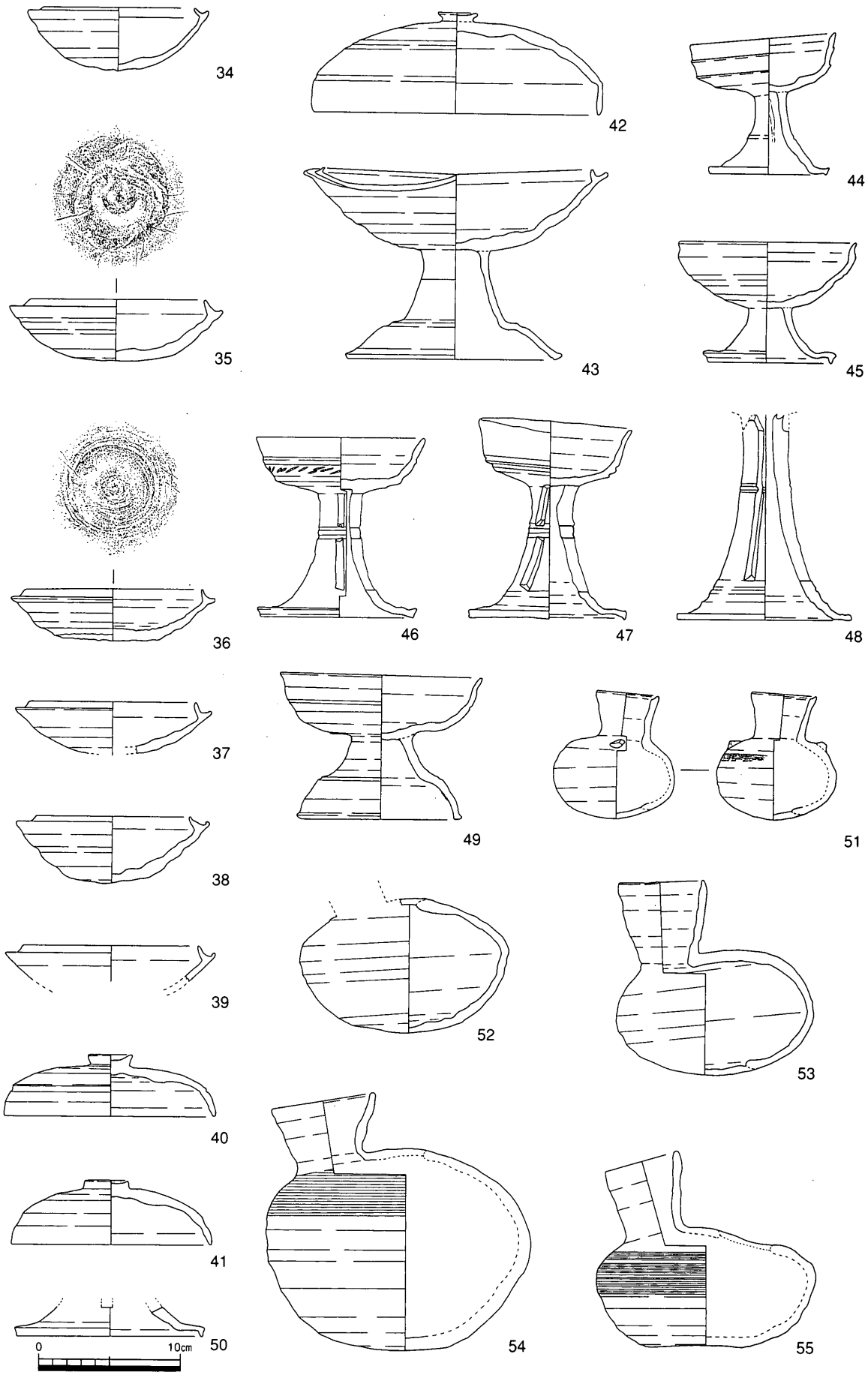
（杯身）

杯身も底部に回転ヘラ削りを施すもの（2・12・14・29・30・35・37）と、ヘラ切り未調整のもの（4・6・8・10・28・31・32・33・34・36・38）に大別出来る。39は底部が欠損しているがおそらく回転ヘラ削りと思われる。

回転ヘラ削りを施す一群の口径は11.6～13.2cmで平均12.2cmである。また器高は3.7～4.4cmで平均4.1cmである。回転ヘラ削りは底部1/2～1/3の部分に施されている。底部を上にして見ると、12・35がロクロ左回転の回転ヘラ削りの他はロクロ右回転である。回転ヘラ削り以外の底部～口縁部、内面は回転



第18図　第１石室出土遺物(1)（1/4）



第19図　第１石室出土遺物(2)（1/4）

ナデで29・30は最後に底部内面に仕上げナデを施している。35は底部内面に同心円状の当て具痕がある。立ち上がり部は斜め上方に突出し、端部は丸く収めている。受け部も短く斜め上方を向いている。立ち上がり部・受け部とも薄手のものが多い。底部はまだ安定感のあるものが多い。

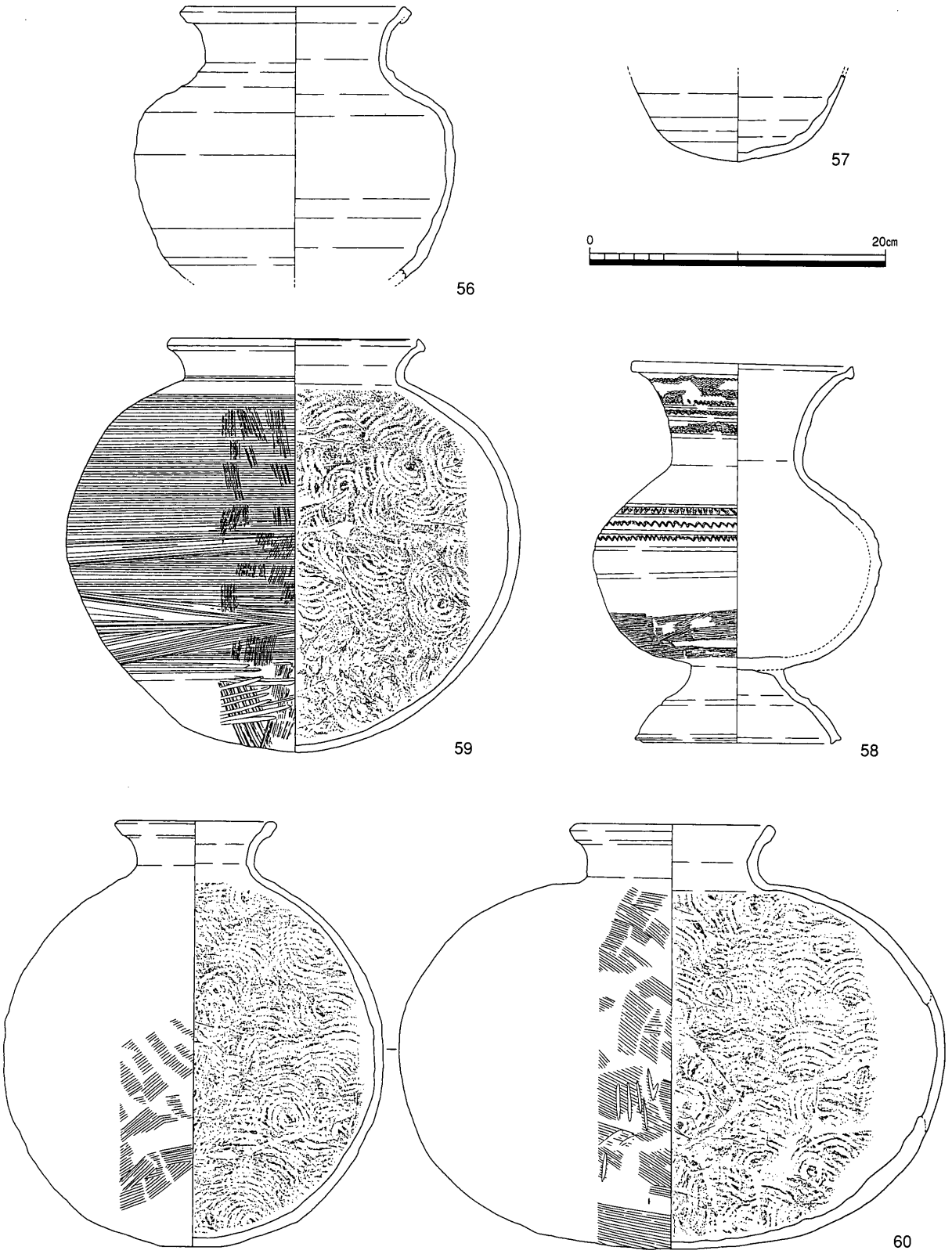
天井部ヘラ切り未調整の一群は口径9.5～12.8cmで平均11.3cm、器高3.4～4.7cmで平均4.0cmとなっており、回転ヘラ削りを施す一群よりも小型化している。立ち上がり部は短く斜め上方を向き、突出も弱くなっている。受け部も短く、6・8・31・38のように端部を内側に曲げているものもある。33は楕円形に歪んでいる。底部は不安定なものが多く、31・32・38のように受け部にかけて直線的になるものもある。36は底部内面に同心円状の当て具痕がある。

高杯（第19図　40～50）

有蓋高杯の蓋が3点出土しているが、このうちセット関係になるものは42－43のみである。40は天井部と口縁部の境に稜がある、天井部はロクロ右回転の回転ヘラ削りで頂部には中央が大きく窪んだつまみが付く。41の天井部は丸みを帯びている。42は口径20.2cmと大型で、天井部上半1/3に回転ヘラ削りを施し、回転ヘラ削りと回転ナデの境部分にナデによる凹線が2条巡るが、部分的に1条になっている。また天井部と口縁部の境にもナデによる凹線が巡るが、これも部分的に途切れている。口縁部は直線的に下を向いている。頂部には扁平なつまみが付いている。43は42に対応するもので杯部口径19.0cm、器高13.2cm脚部径14.6cmの大型品である。杯部は口縁部が歪んでおり、下半部には回転ヘラ削りを施している。脚部は屈曲して大きく開き、端部は外側に斜めの面をもつ。屈曲部にナデによる凹線が1条巡っている。脚部は内・外面ともに回転ナデである。44の杯部には稜が2条あり、下半部の回転ヘラ削りは弱い。脚部は中央部に沈線が1条巡り、裾部で真横に開く。45は口縁部を強くナデており端部は外反して先細りになる。脚部は短く端部は下方に拡張し、外側に面を作る。46は杯部中央に沈線が2条巡り、下半部には板状工具の小口部分による圧痕文がある。脚部は長く、向かい合う位置に長方形の2段透かしがある。47は杯部の口縁部はやや歪む。脚部は長く、向かい合う位置に長方形の2段透かしがあるが、上下の透かし穴はずれている。脚部の裾部の回転ナデは強い。48は脚部のみであるが、長方形2段の3方透かし穴がある。杯部は欠損しているが、杯身と報告した39が底部を欠損していることからも、この高杯の杯部になるのかも知れない。49の脚部は中央部分で丸みを帯びて屈曲しており、端部は外側に拡張しており、下方に平坦な面をもつ。

平瓶（第19図　51～55）

51は器高8.3cmのミニチュアの平瓶である。口縁部端部は内面に段を作る。体部は球状に近く底部には成形時の円孔を塞いでいる。全体に回転ナデであるが体部上半部の外面にはハケ目状の板ナデの痕跡がある。また把手が形骸化したと考えられる突起が2個ある。52は体部のみであるが底部付近の外面は回転ヘラ削りである。また口縁部が欠損した部分には体部成形時の円孔を塞いだ跡が見られる。53の口縁部端部は強いナデにより先細りになっている。体部は扁平で底部には成形時の円孔を塞いでいる。54の口縁部は短く大きく開いている。体部は全体に丸みをもち、上部の口縁部付近に成形時の円孔を塞いだ跡がある。外面の上半部にはカキ目を施した後にナデており、下半部には回転ヘラ削りを施している。55の体部は著しく扁平で底部は平底である。外面半部にはカキ目を施し、下半部は回転ヘラ削りである。体部上面の中央からややずれた場所に成形時の円孔を塞いだ部分があるが、この場所がまだ柔らかいうちに手で押したためか窪んでいる。



第20図　第１石室出土遺物(3)（1/4）

横瓶（第20図　60）

60は器高の低い口縁部に長径37㎝、短径25.8㎝の楕円形の大きな体部をもつ。口縁部は外反し端部は肥厚している。体部の長径側中央部の片側に成形時の円孔を塞いだ跡がある。体部外面は全体にタタキが施されているが、下半部では一部に棒状工具によりナデておりヘラミガキ状になっている。内面には同心円状の当て具痕が顕著である。全体にマメツが進んでおり、焼成も良くない。

壷（第20図　56～58）

56の口縁部は上部で外反し、端部は外側に肥厚する。体部は最大径が上部にあり肩が張っている。体部外面の下半は回転ヘラ削りで、それ以外は回転ナデである。58は底部に脚部が付いている。脚部は中央部で丸みをもって屈曲している。端部は外側にナデによる窪んだ面をもっている。口縁部は大きく開き端部は上下に拡張し、外側に面を持つ。体部はやや扁平で中央部にナデによる凹線が2条巡っている。体部外面下半部にカキ目が施されている以外は全体に回転ナデである。また口縁部外面と体部上半部外面には櫛描波状文が施されているが、それぞれの上下には沈線により区画している。体部の最上部の櫛描波状文は工具の端部を1回ずつ止めながら施文している。それ以外のものは連続して施文している。

甕（第20図　59）

59の口縁部は強く外反し、端部を上方に拡張している。体部は球形で外面は全体にタタキの後にカキ目を施している。しかし底部付近にカキ目は及ばず、この部分には須恵器には珍しく雑ではあるがヘラミガキを施している。内面は全体に同心円状の当て具痕が見られる。

(2)鉄器

（武器）

刀子（第21図　61～65）

61は茎部分で茎尻は丸みを帯びている。全体に膨らんで裂けているが、柄の木質が良く残っている。62は現存で長さ19.7㎝の刀身部分で、切先と関部は欠損している。一部に鞘の木質が残っている。出土位置や色調などから判断して61と同一個体と考えられる。63の茎は短く茎尻は丸みを帯びている。刃部側に鈍角の関が作り出されている。64も刃部側に鈍角の関があり、茎には柄の木質が残っている。65は茎部分であるが、全体に膨れて裂けている。

鏃（第21図　66）

66は鏃で内面に木質が残っている。

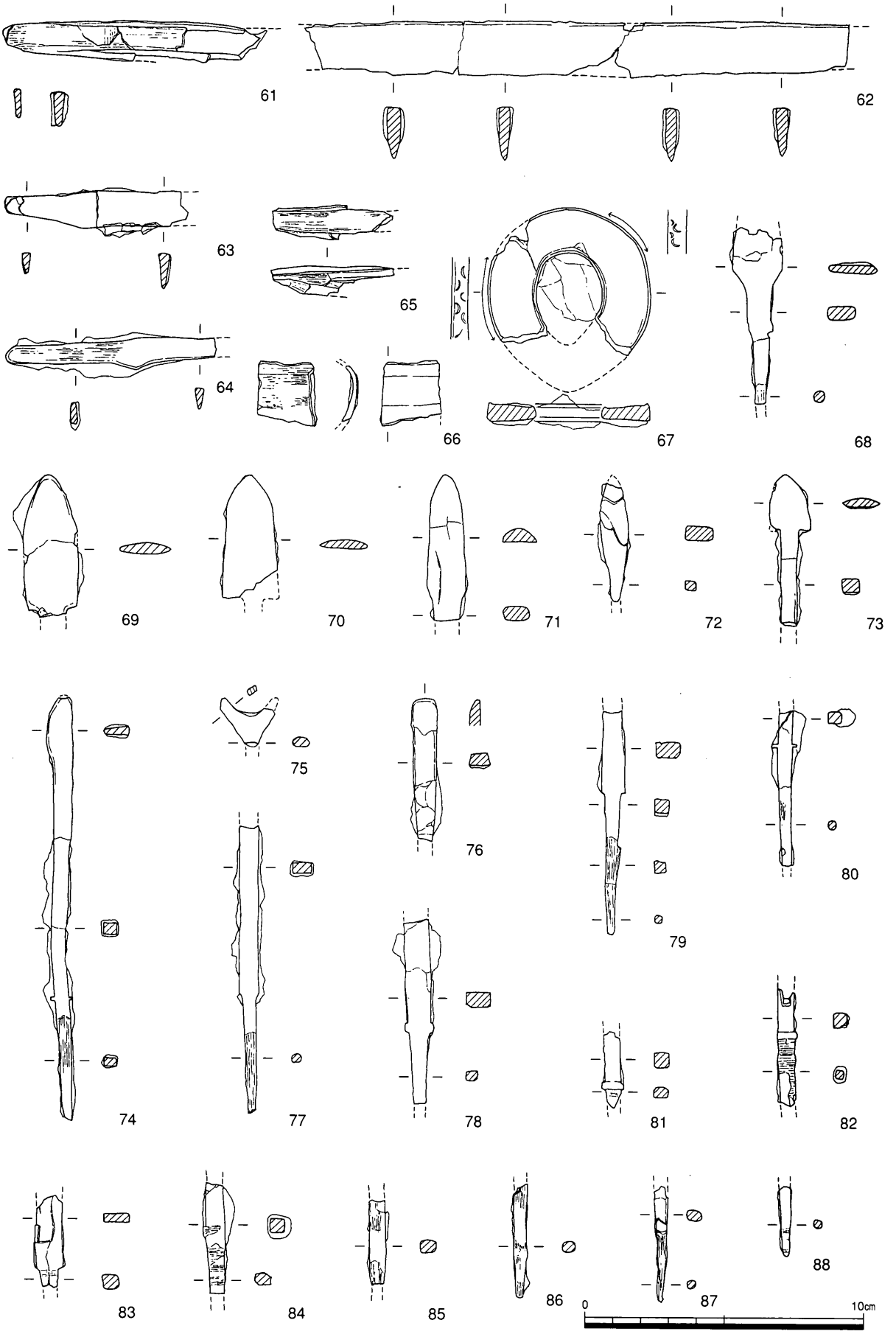
鍔（第21図　67）

無窓式の鍔で下部を欠損している。現存部分で幅5.7㎝、鍔身幅1.7㎝、縁厚0.6㎝で、縁から内側に向かって緩く傾斜している。側縁部の一部にC字形を交互に組合せた象嵌が認められる。表面は剥落しているが、黒い錆が残っていることから銀象嵌と考えられる。

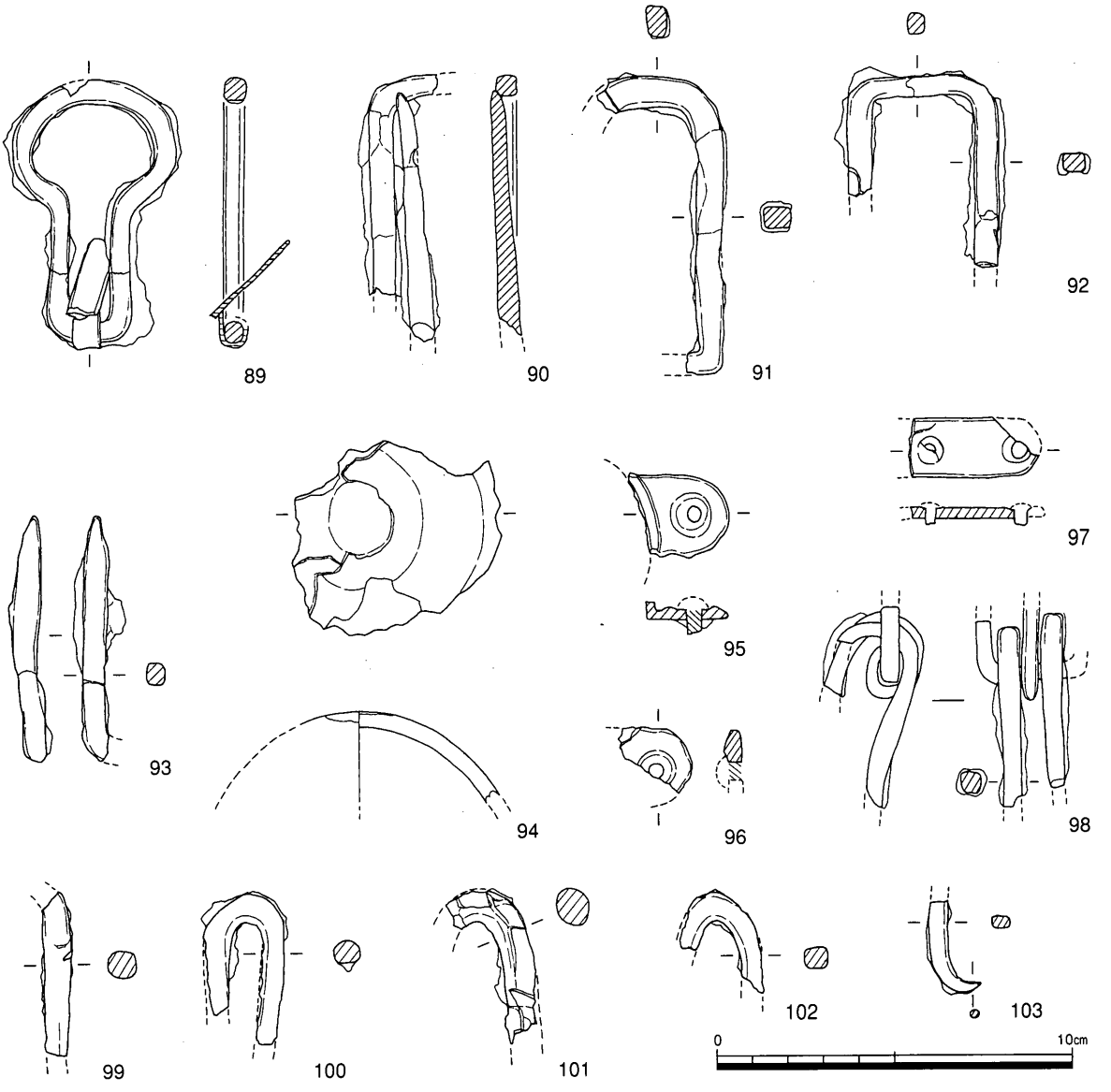
鉄鏃（第21図　68～88）

68～70は平根式である。68は鏃身の先端部側半分が欠損しているが短茎柳葉式と考えられ、関は撫関になっている。69の関はやや鈍くなっている。70の関は直角である。

71～74・76～84は長頸式である。71は鏃身のみであるが長頸式に分類した。柳葉式で関は不明瞭で鏃身断面は片丸である。72も柳葉式であるが全体に錆膨れしており、関は不明瞭である。73は腸抉柳



第21図　第1石室出土遺物(4)（1/2）



第22図　第1石室出土遺物(5)（1/2）

葉式であるが三角形に近くなっており、逆刺は弱い。鏃身の断面は片丸に近い。74は片刃箭式で関は鈍く不明瞭である。箆被部と茎部の境は棘箆被になっている。また茎部には矢柄の木質が残っている。76は鑿箭式で鏃身の先端の刃部は片刃で、断面は台形になっている。77～84は箆被部から頸部にかけての部分である。このうち78・80・81は棘箆被である。81・82・83・84には糸巻きの痕跡がある。

75は雁股式であるが、二股部分は短くなっている。

85～88は茎部分で、いずれも矢柄の木質が残り、88は樹皮を巻いた痕跡がある。

(馬具)

鉸具（第22図　89～93）

鉸具はいずれも鉄製である。89は上半が円形、下半が方形の鍵穴形の輪金の基部に板状の刺金を巻き付けている。刺金は基部の部分で折れている。90の輪金は大部分が欠損しているが方形のものと考えられ、先細りの棒状の刺金が付く。91・92ともに輪金部分であるが、方形で上部が隅丸になるものである。93は刺金で先細りの棒状のものである。

雲珠・辻金具（第22図　94～96）

いずれも破片で全体形が不明であるため、雲珠か辻金具かの判断は出来ない。94は鉢部で頂部に宝珠飾の剥離痕があり、また稜線などは認められない。劣化が激しく鉄地部分のみが残っており金銅を張っていたかどうかは不明である。95・96ともに脚部で幅広で短く先端は丸い。鋲は一つで鋲頭は欠損しているが痕跡から直径8㎜程度のものである。95は鋲が脚部の下まで突出している。

飾金具（第22図　97）

2㎝の間隔をもった二鋲のものでいずれも鋲頭は欠損しているが痕跡から直径6㎜のものである。鉄地金銅張りである。

鉸具と兵庫鎖（第22図　98）

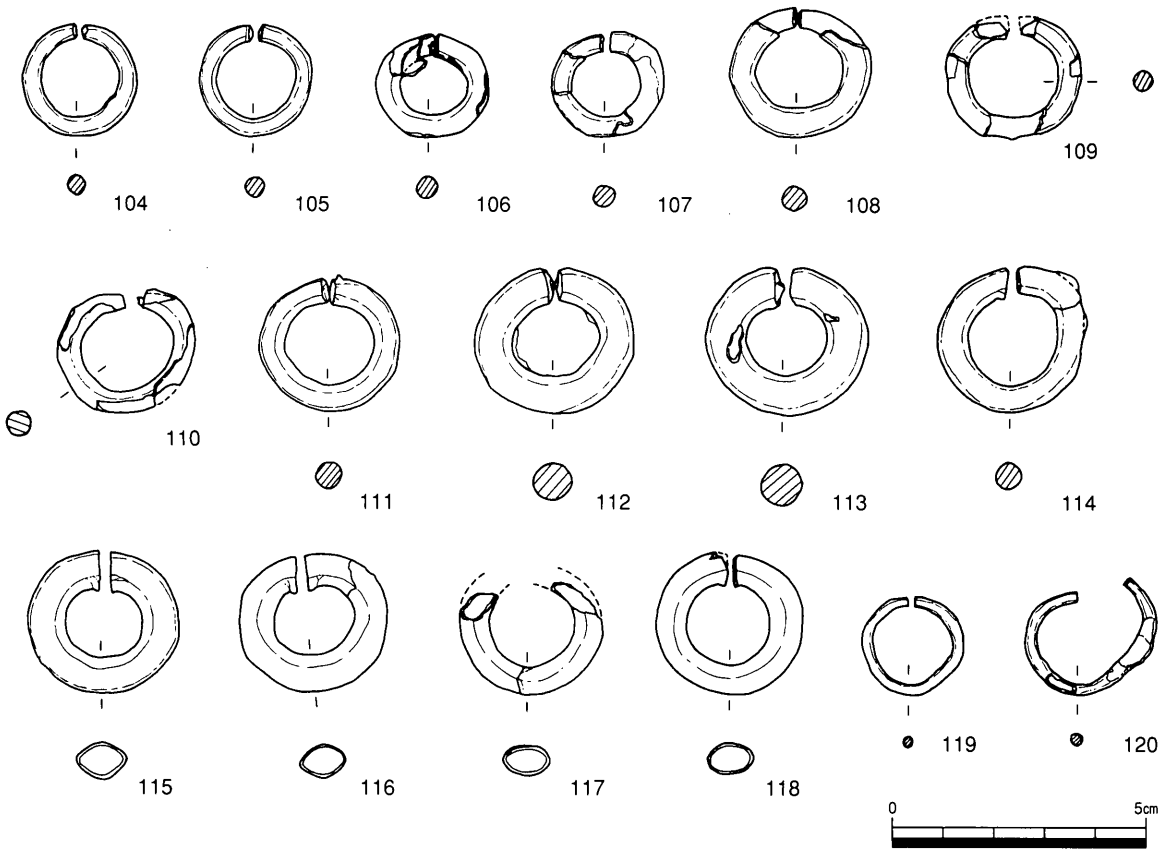
鉸具の基部に兵庫鎖を取り付けているものである。鉸具の刺金は棒状のもので輪金の基部に巻き付けている。輪金は基部の一部が残るだけで全体形は不明である。この鉸具の基部に中央に刺金を挟んで両側に兵庫鎖を巻いている。しかし兵庫鎖にしては二連の鎖部の端部がずれているのは少し不自然である。両者を組み合わせて鐙を吊っていたのではなかろうか。当初、錆が強固に付着しておりX線写真撮影を行っても不明瞭であった。保存処理途中での錆落とし時の所見を加えているが、実測図の精度はあまり高くない。

兵庫鎖（第22図　99～102）

断面が隅丸方形のものでいずれも破片である。

その他の鉄器（第22図　103）

103は先端部が尖り、横に曲がっている。鉄鏃の茎の先端部が曲がったものにしては先端部まで太くなっている。釣り針にしては先端部の曲がりが弱い。

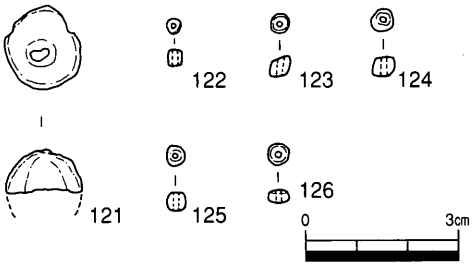


第23図　第1石室出土遺物(6)（2/3）

(3)**装身具**

耳環（第23図　104～120）

材質・形状・出土位置などから判断して104－105、106－107、108－109、110－111、112－113、115－116、117－118、119－120の8対がセットになると考えられる。このうち108～111は109がやや異なる成分を含むものの、成分的に非常に近いものである。



第24図　第1石室出土遺物(7)（2/3）

104～114は中実のものである。104・105が中実銅芯金薄板巻き、106～113が中実銅芯銀薄板巻きである。これらのうち112－113は左右の外径が3.1～3.2cm、断面径が0.8cmと他の一群より大型で、重量も21～23gと圧倒的に重い。114は鉛製で全体に白錆に覆われている。この耳環のみが単独である。

115～118は断面が楕円形の中空耳環でいずれも開口部は薄板を貼り付けている。115・116は芯を持たず、銀薄板のみで作られている。117・118は銅芯銀薄板巻きである。115・117・118は環体内側外面に、環状に曲げたときの皺痕がある。

119・120は断面径0.2cmの中実銀の細環で、120は石室石材が崩落した際に押し潰されて変形している。

玉類（第24図　121～126）

玉類は空玉1点、ガラス小玉5点の合計6点が出土しているが量的には少ない。

121は銀製の空玉で下部は欠損して部分的に変形しているが、元々は球形のものである。頂部には2～3mmのやや変形した孔があいている。厚さ0.5mmと非常に薄いものである。

122～126はガラス小玉である。123は片側の端部が傾斜している。126は扁平である。孔径はいずれも1mmである。

第5節　第2石室の調査

(1)**墓壙**（第25図）

玄室部分で隅丸方形になっており、南側は羨門方向に向かって直線的である。これに対して北側は袖部で緩く屈曲し羨門方向に向かい幅を狭める。そして羨門部で全体に東側に向かって緩やかに曲がるが、どのくらい曲がるかは調査区外に至るので不明である。墓壙の最大幅は玄室部分で、幅2.2mである。墓壙は第1石室と同様に旧地表面である黒褐色粘質土面に整地土を薄く盛った面から掘削されている。玄門部分での墓壙掘削面は66.5～66.6m、墓壙底面は65.7mで80～90cmの深さがある。南西部分の墓壙は天井石が抜かれた時の撹乱により66.1mより上の部分が失われている。墓壙壁面と石室基底石との間は玄室北側で20～30cm、それ以外の部分は20cm以内で余裕はない。

墓壙の埋土は最下部の基底石部分では地山層に似た橙褐色粘質土である。上部は石室石材が崩落した時に内側に向かって滑っているが、暗茶色の粘土・粘質土が交互に堆積している。

(2)**石室の検出状況**（第25図）

第1石室を検出した段階の墳丘盛土面ではまだ第2石室を検出していない。第1石室の調査の進展と

ともに墳丘構造の調査のために南北ラインで墳丘の掘り下げを行っているときに、第２石室の羨道部分の石材を検出した。最初の検出状況は第25図に示した段階の前の段階であるが、南側部分の石列が墳丘の斜面の傾きにあうように南側を低く斜めに傾いており、また北側の石列も内側を上にして傾いていた。そして北側と南側の石列が東側調査区壁際で一つに合流しＶ字状になっていた。そして北側の石列のほうが全体に高い位置にあった。そしてこの時点で玄室は幅１ｍの墳丘土層観察用のベルトの中に隠れており検出されていない。さらに最初に石材を検出した羨道に相当する部分は、旧地形が東に向かって下る箇所で、斜面地に盛土をしている部分、つまり盛土が流出しやすい箇所である。以上のことから当初はこの石列を墳丘の盛土流出防止のための墳丘内列石と誤認していた。従って羨道と玄室の調査が別々になってしまい、図面の整合性の図れない部分が生じた。

石室の石材は玄室、羨道とも基底石以外の大部分は内側に崩落していた。玄室では天井石の一つと考えられる長さ1.1ｍほどの石が斜めに落下した状態にあった。石材の崩落の原因は土層観察によると土圧によるものであるが、後世に天井石を引き抜いた際に崩れた部分もあろう。石室の床面の遺物は石材の落下により割れているものもあったが残存状況は良好で埋葬時の原位置を留めていると考えられる。これは天井石が引き抜かれた時にはすでに大部分の石材

第25図　第２石室検出状況・墓壙平面図（1/30）

は崩落しており、崩落した石により玄室が埋まったために遺物が保護されたためである。この天井石の引き抜き以外には盗掘等の痕跡は認められなかった。

(3)石室（第26図）

主軸をN－48°－Eにとり東側に開口する奥壁から見て左片袖式の横穴式石室である。石室の残存状況は悪く、全体に内側に崩落しており原位置を留めているのは基底石と2，3の積んだ石だけである。石材は花崗岩と安山岩であるが、安山岩のほうが多い。

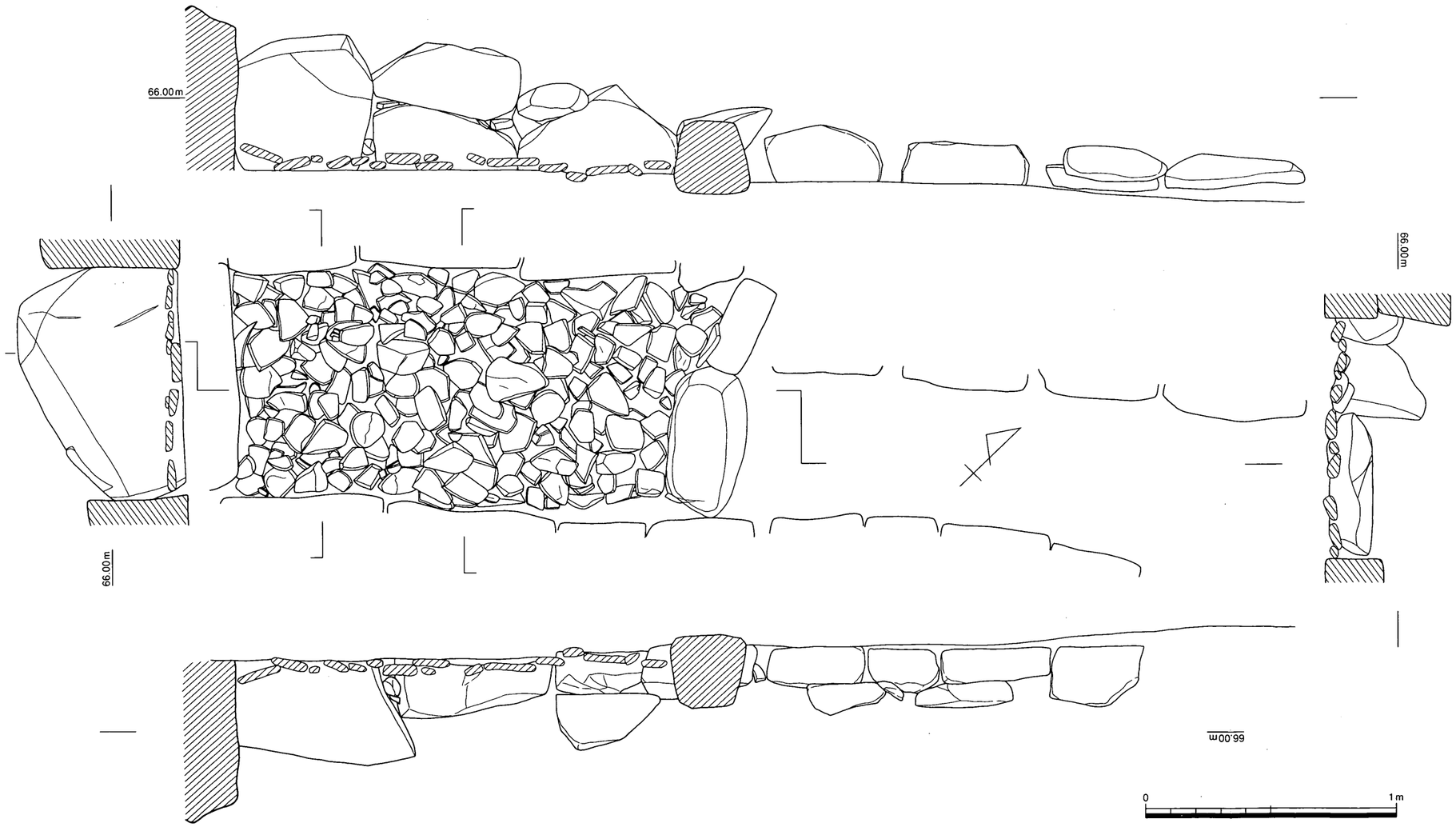
石室の規模は玄室で長さ1.8m、奥壁幅0.95m、玄門側の幅1.03mと奥壁側が若干狭くなっている。左（北西）側に袖部を作り、袖部幅は0.4mである。玄室の最大幅は玄門側の幅になり、側壁は左（北西）側の袖側が内側に少し突出し、右（南東）側は逆に玄門側が退いている。玄室の長さに対する幅の割合、玄室比は1.8／（0.95＋1.03）÷2＝1.82となり、通常の長方形になる。羨道は長さ2.5m、幅0.6m、開口部幅0.7mで玄室に比べて1.4倍の長さをもち、玄室と合わせた石室の全長は4.3mになる。現存する最大高は奥壁部分で62cmである。

奥壁は大型の安山岩の一枚石であるが、この石は南側が斜めになっておりこの部分に石を積んでいたと考えられる。側壁の基底石は両方とも3石で、奥壁側の石は大きく奥壁とは隅を合わせている。他の2石は両側壁とも高さ20～30cmで、上に同じくらいの石を積み上げている。右（南東）側壁は玄門側の1石が他の2石より一回り小さくなり、この石と同規模の石が羨道に続いていく。袖部の石は、この石の裏側に配置された左（北西）側壁部の続きの石が土圧で内側に押し出されたのに伴い、羨道側に動いて傾いている。この袖石は玄室側と玄門側に対して丁寧に面取りを行っている。袖石の裏側の石は袖石に隠れて本来見えないものである。幅25cmと小さいが袖石の裏側の支えとして機能していたもので、袖石と重なる部分は面取りを行っている。玄室や羨道内に落下している石はやや大型の板石が多く、基底石に用いられているような厚みのある長方形の石はない。石室の上部はこうした板石を積んでいたと考えられる。

羨道は幅30～57cm、高さ15～23cmの板石に近いものを基底石に据えている。そして玄門から3石目から羨門に向かって全体に緩く東側に向かって湾曲している。左（北西）側の玄門に近い部分では小型の基底石が内側に倒れていた。開口部の端の石であるが、ここから30～50cm離れた調査区東壁部分ではすでに墓道の掘り方が認められることから、この石が羨門石と考えられる。羨門部の石は左右の端がそろっていない。右（南東）側の羨門部の石のほうが玄室方向に奥の部分にあるが、これは羨道が右（南東）側に湾曲しているためと考えられる。羨道部分には閉塞施設と考えられるものは認められなかった。

玄門部には側壁に挟まれて30cm×60cmの隅丸方形で厚さ20cmほどの花崗岩製の仕切り石が置かれていた。

玄室の床面には全体に10～20cmの安山岩の板石が敷き詰められていた。玄室中央部から左（北西）側壁にかけての部分は厚みのある石が多く、小さく薄めの石の上に重なるように敷かれていた。これらの板石上で遺物は出土している。多少の重なりがあるものの、これらの板石の直下は地山面で、下部に排水溝などの施設は認められなかった。羨道部分には礫は敷かれず、土床となっている。

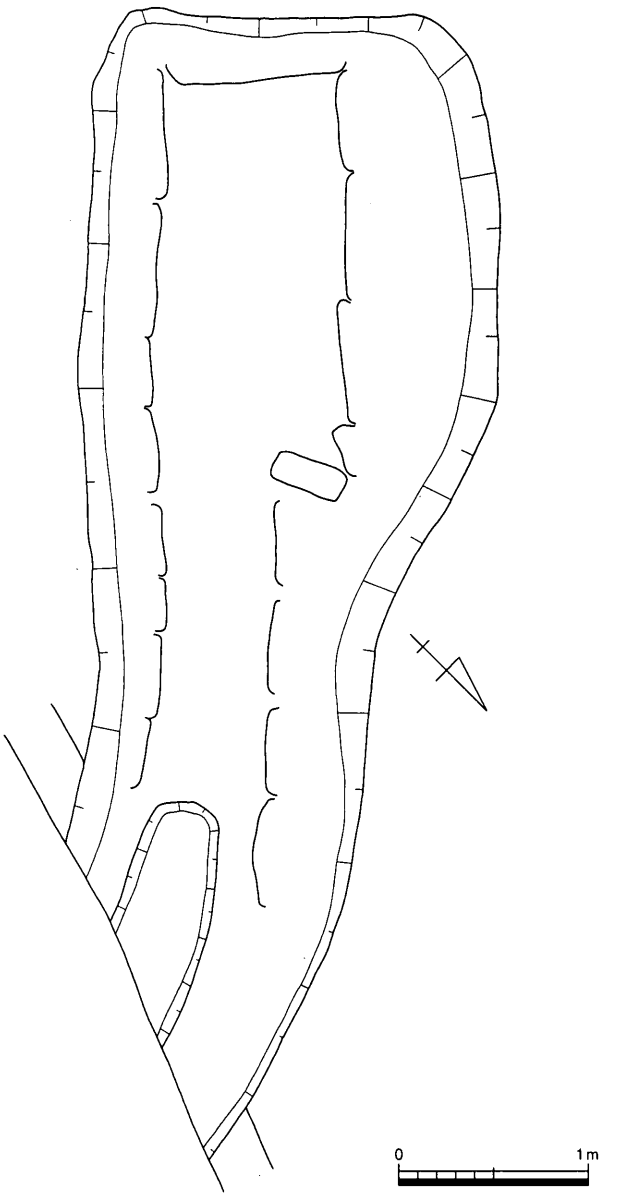


第26図　第２石室平面図、立面図（1/20）

(4)墓道（第27図）

石室の羨門石部分から調査区東壁までの１ｍほどの部分で検出したにとどまる。調査区東壁に現れた断面によると、旧地表面である黒褐色粘質土の上に盛土を行った66.1ｍのところから掘削を行っている。掘り方は南側が緩やかで北側は急になっている。墓道は羨門石部分から下り、調査区東壁部分で65.2ｍとなる。墓道の床面はほぼ平坦で幅0.7ｍである。埋土は褐色粘土、黒褐色粘土、橙色粘土がそれぞれブロック状に混じった土が主体で、掘削後に人為的に埋め戻されていることが分かる。この墓道の北側の掘り方は、明らかな墳丘の盛土である（25）橙褐色土、（24）暗茶褐色砂混じり土を切り込む（28）灰褐色土＋橙色粘土層から掘り込んでいる。後述するように第２石室には追葬が考えられないので、追葬時の墓道の再掘削とは考えがたい。これは第２石室の墓壙のラインで石室を積み上げる際に一度埋め戻して、最終的に再度掘削したためと考えたい。

羨門から0.7ｍほど調査区東壁方向に向かった箇所で、墓道床面から30cmほど上で須恵器の提瓶（148）がその場に据えられた状態で出土した。



第27図　第２石室墓壙・墓道平面図（1/40）

(5)遺物の出土状況（第28図）

第２石室は天井石は抜かれており、基底石以外の石室の石材が内側に崩落していたが、玄室・羨道ともに床面は良好に残っていた。遺物は石材の落下により割れたり飛び散ったものもあるが、その場で押し潰された状態であった。この落下した石材により石室内が充填されたことが、後世の撹乱を免れた要因となったのである。

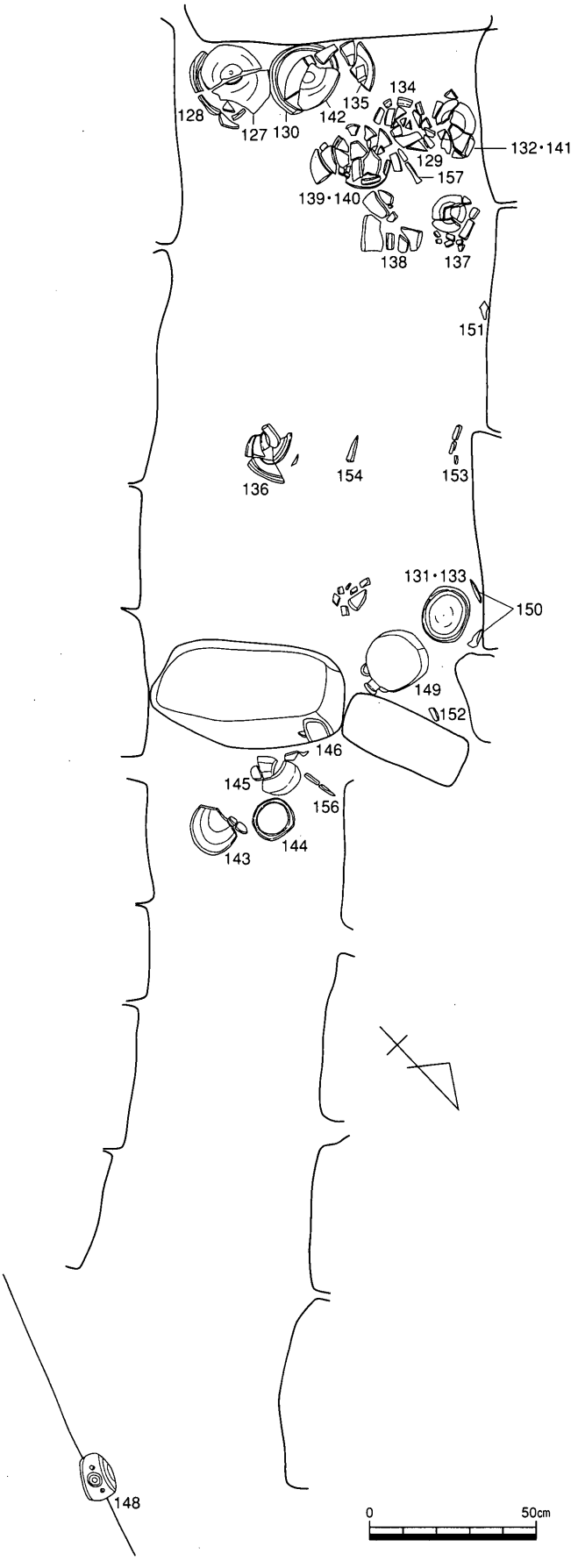
玄室から出土した土器はすべて須恵器で杯蓋８点、杯身８点、提瓶１点の合計17点が出土した。土器は奥壁部分から左（北西）側壁の最も奥壁寄り部分にかけてと、袖石部分に集中していた。杯身と杯蓋は８セットあるが、第29図では形態・法量・胎土・色調など土器そのものから判断したセット関係を図示した。しかし出土状況から判断したセット関係は奥壁沿いに127－128、130－142が並んでいる。

奥壁近くから左側壁部分で139－140、129－134、132－141が横に並んでいる。この3セットの北側に隣接して137－138がある。袖部で131－133があり、合計で7セットとなる。136は玄室中央付近に単独であり、残りの135が奥壁沿いにあり136とは1.1m離れている。

奥壁沿いの一群は127－128は通常の上向きで、127の蓋杯が128の杯身に少しずらして蓋をした状態であった。130－142は130の通常の上向きの杯身の上に、142の杯身を底部を上向きにした反対向きにして被せていた。

139－140は140の杯身の上に、139の杯蓋が通常の向きでややずれて重なっていた。その横で134の杯身に129で蓋をしている。左（北西）側壁沿いで132の杯身に141で蓋をしている。この3セットの北側のセットは、138の杯身が底部を上にした反対向きで、その横では137の杯蓋が天井部を上にした通常の方向にあった。袖部では131－133のともに杯蓋のセットがあるが、両方とも天井部を下にした反対向きで、133の上に131を重ねていた。そしてこの横に149の提瓶が倒れた状態で出土している。袖石が動いていることから提瓶の本来の状態は不明である。

玄室内出土の鉄器は鉄鏃5点、刀子1点である。157の刀子は奥壁近くの139－140、129－134の横で出土している。鉄鏃は左（北西）側壁沿いの中央から袖部にかけて出土している。鉄鏃のうち鏃身は



第28図　第2石室遺物出土状況（1/20）

2点のみで、他は箆被部から茎部の破片であるため個体数は正確ではない。

羨道から出土した土器は土師器の把手付き椀が1点出土した以外は須恵器で、杯蓋2点、杯身1点、甕1点、提瓶1点である。147の甕、148の提瓶が羨門部の墓道上で出土した以外は仕切り石の羨門側に隣接した部分での出土である。143－144は144の杯身を通常の向きにして、その横で143の杯蓋が天井部を下にした反対向きで蓋を開けた状態で出土した。このセットに隣接して145の杯蓋、146の土師器の把手付椀、156の鉄鏃が出土した。

第2石室では玉類、耳環といった装身具は出土していない。

(6)埋葬位置

石室の規模や遺物の出土状況、片付けや集積した痕跡が認められないことなどから、単葬と考えられる。玄室からは鉄釘が出土しておらず、木棺の板材が粘土化した状況も認められなかった。

玄室の須恵器は奥壁部を中心に出土しており、刀子が奥壁側で出土している。また奥壁に接して須恵器が並んで出土しているため、木棺であれば小口部分、直葬であれば遺体の端部はこの須恵器より玄門側に下がった位置である。さらに出土した鉄器は刀子以外はすべて鉄鏃であるが、鉄鏃は左（北西）側壁沿いで出土している。以上のことから、頭部を奥壁側に向けて、奥壁から少し離したやや左（北西）側壁寄りに埋葬したと考えられる。

第6節　第2石室出土遺物（第29図～第30図）

第2石室からは土器・鉄器が出土した。土器は羨道で土師器が1点出土した以外は須恵器で、玄室から17点、羨道から6点出土している。鉄器は図化出来たもので玄室で6点、羨道で2点出土している。

(1)土器

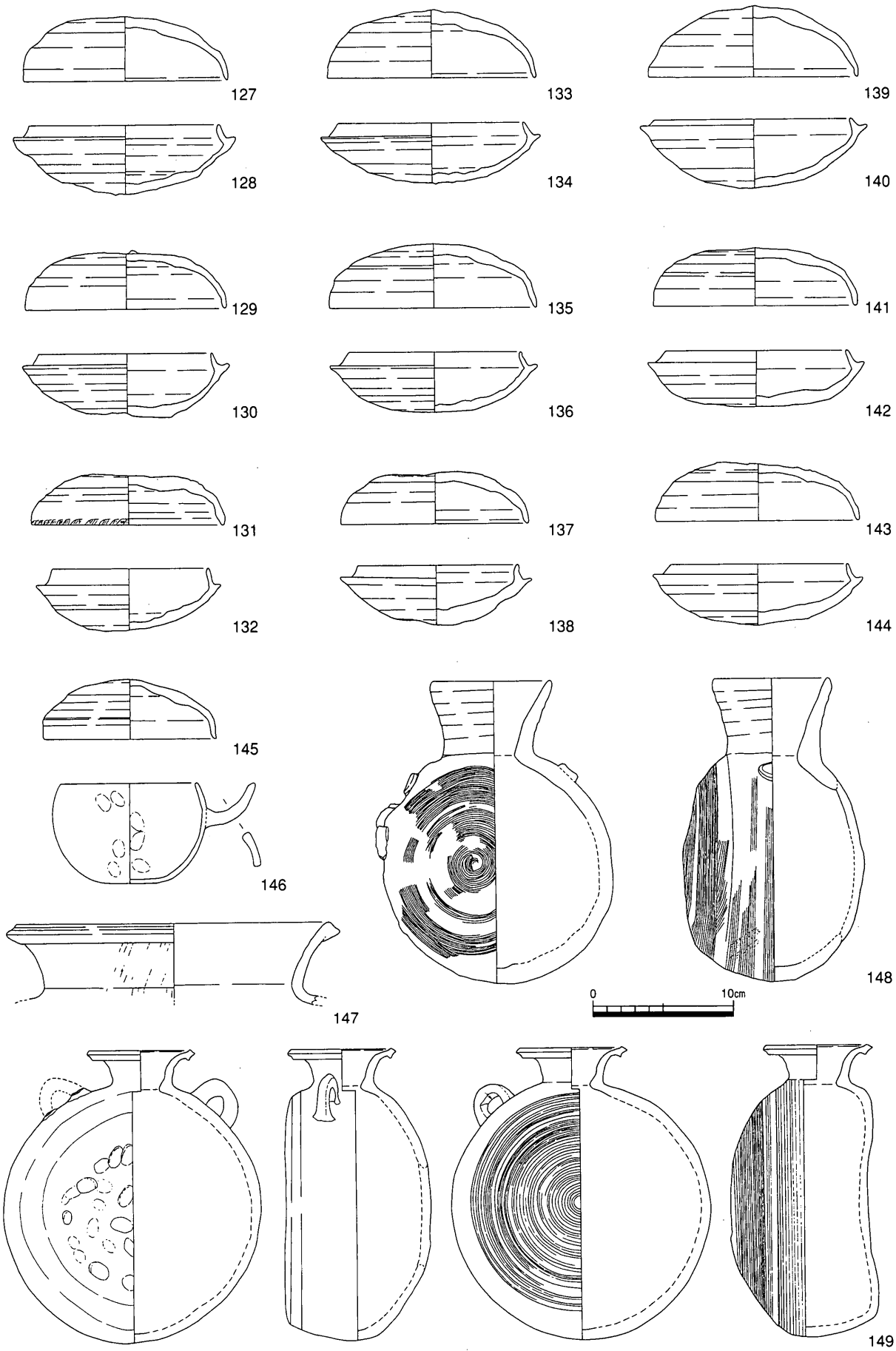
杯蓋・杯身（第29図　127～145）

石室出土の杯蓋・杯身は形態・法量・胎土・色調から判断すると玄室で8組のセット（127－128、129－130、131－132、133－134、135－136、137－138、139－140、141－142）が、羨道で1組のセット（143－144）がある。しかし出土状況から考えられるセット関係は前述したとおりである。

（杯蓋）

137以外は天井部に回転ヘラ削りを施す。139は摩滅しており天井部の調整の観察が不能であるが、セットとなる140から判断しても回転ヘラ削りは施されていた可能性は大きい。

回転ヘラ削りを施す一群の口径は12.4～15.0cmで平均14.3cmである。極端に小さい145を除くと口径の平均は14.6cmである。器高は3.5～4.7cmで平均は4.2cmである。回転ヘラ削りは天井部の1/3に施されているが、131はヘラ切り痕が残っている。127・129・133・135・143がロクロ左回転、131・141がロクロ右回転の回転ヘラ削りである。145はロクロ左回転の回転ヘラ削りの後に、頂部からやや下にロクロ右回転の回転ヘラ削りで仕上げを行っている。天井部の回転ヘラ削り以外は、内面にかけて全体に回転ナデである。形態的には大部分が天井部は丸みを帯びているが、131は扁平で厚みがあり、口縁部外面に板状工具の小口部分を断続的に押し付けて調整している。133は口縁部端部内面に段をもつ。



第29図　第２石室出土遺物(1)（1/4）

141は天井部回転ヘラ削り部分の直下を強くナデている。

137の天井部は摩滅しているがヘラ切り未調整となっている。口径13.5cm、器高3.5cmで胎土には長石・石英・黒色粒が多量に含まれている。

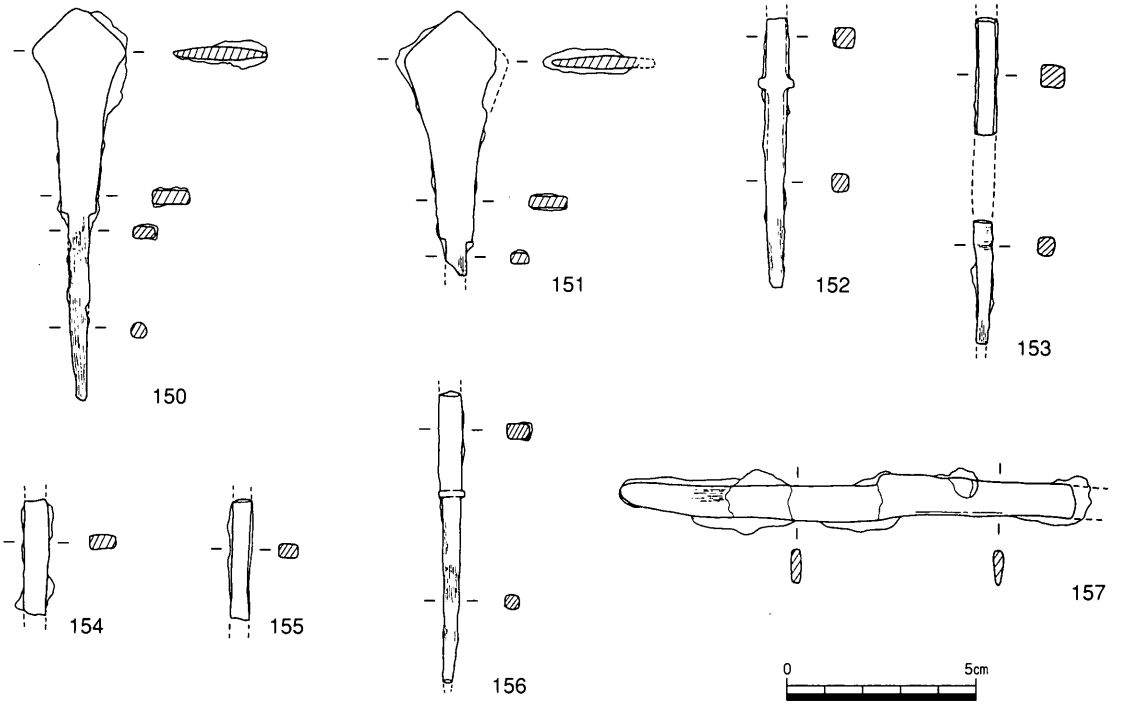
(杯身)

138以外は底部に回転ヘラ削りを施している。回転ヘラ削りを施す一群の口径は11.3～14.0cmで平均は12.8cm、器高は3.9～4.8cmで平均4.4cmとなっている。回転ヘラ削りは底部1/3～1/2に施されているが、130にはヘラ切り痕が残っている。底部を上にして見ると、128がロクロ左回転以外はロクロ右回転の回転ヘラ削りである。回転ヘラ削り以外の底部～口縁部、内面は回転ナデで、底部内面に仕上げナデを行っているものもある。立ち上がり部は斜め上方に大きく突出し、128・136・144は立ち上がり部の端部がナデにより上方に向かって緩く屈曲している。受け部も斜め上方を向き、全体に短いものが多い。

138の底部はヘラ切り未調整となっている。口径は11.5cm、器高4.2cmで胎土は137と同様である。口縁部は一部歪んでおり、底部には焼成時の火膨れが著しい。

提瓶(第29図　148・149)

148の体部は扁平で部分的に歪んで火膨れがある。外面にはカキ目を施しているが、底部付近には方向の異なるカキ目が認められる。また体部中央に1箇所大きく成形時の円孔を塞いだ痕跡がある。肩部には1対の把手が退化した円形浮文が見られ、窯壁が付着している。口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁部内面にも火膨れがある。口縁部は全体に回転ナデである。149の体部は扁平な半球状である。丸みをもった面にはカキ目を施している。反対側は周辺部に回転ヘラ削りを施し、中央部には指押さえを多用したためか少し窪んでいる。側面にはカキ目の後にナデている。体部中央に1箇所大きく成形時の円孔を塞いだ痕跡がある。肩部には1対の環状の把手が見られる。口縁部は短く強く外反し、端部は外側に面を持ち強くナデている。口縁部は全体に回転ナデである。



第30図　第2石室出土遺物(2)(1/2)

甕（第29図　147）

147の口縁部端部外面は肥厚している。外面はタタキの後にナデている。体部は欠損しているが、口縁部との境付近の内面に当て具痕が見られる。

把手付き椀（第29図　146）

土師器で体部は薄く丸みを帯びており、底部は不明瞭な平底である。全体に摩滅しているが内・外面には指押さえを施している。体部の片側に扁平な舌状の把手を一つ貼り付けている。把手の先端部は口縁部の高さに合わせている。

(2)鉄器

（武器）

鉄鏃（第30図　150～156）

150・151は平根系圭頭形の鉄鏃である。両者とも鏃身の関はほぼ直角であるが、151は左右の関の位置が少しずれている。150の茎部には明瞭に矢柄の木質が残っている。

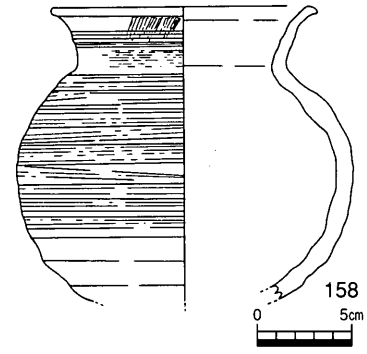
152～156は長頸式の箆被部から茎部の破片である。いずれも鏃身は欠損している。153の茎部には矢柄の木質と糸巻きの痕跡がある。152は棘箆被で156は円形輪状の箆被である。155と156は直接接合はしないが、出土位置からみて同一個体かも知れない。

刀子（第30図　157）

157の切先部分は欠損している。関部は背部側は鈍角になっており、刃部側は不明瞭である。茎尻は丸みを帯びており、柄の木質が部分的に残っている。

第7節　墳丘上出土遺物（第31図　158）

第1石室の墓壙掘り方の北側1mの66.50mの墳丘盛土内で出土した須恵器壷である。底部を下にして据えられたような状態で出土しており、墳丘がある程度完成した段階の所産と考えられる。158は底部が欠損するものの、ほぼ完形である。体部は上半部にカキ目を、下半部が回転ヘラ削りを施している。頸部はカキ目の後にナデている。



第31図　墳丘上出土遺物（1/4）

第8節　小結

北原2号墳は北原1号墳の東側に隣接して築造されている。同一丘陵の先端部に位置し、羨道部分はすでに丘陵の先端部の斜面地になるなど立地的には悪い条件のもとに築造されている。あえてこの箇所に築造しなければならなかった理由、つまり北原1号墳に規制された関係が考えられる。

北原2号墳では同一の墳丘内に第1石室、第2石室とした大小2基の石室を検出した。この2基の石室は旧地表面に若干の盛土を行った同一面から墓壙を掘り込んでいる。そして第1石室は盛土を行いながら石材を積み上げているが、この盛土によって第2石室の墓壙全体が覆われている。このことから第

1石室と第2石室は同時に築造されたと考えられる。これら2基の石室は主軸方向は異なるが、第2石室の羨門部から墓道を湾曲させることにより、調査区外になるため調査は出来なかったが、前庭部では開口部分の方向を合わせようとした意識が伺われる。

第1石室は墳丘の中心に位置し、規模も第2石室に比べて大きく北原2号墳において主となる石室である。石室は両袖式の横穴式石室で、玄室の平面形は短い長方形である。玄門部と羨道部にそれぞれ仕切り石を置き、その間の空間に前室的な意味を持たし、板石で閉塞を行う北部九州系の石室構造をもつ。玄室には土器、鉄鏃を中心とした鉄器、耳環・玉類の装身具が出土した。特に耳環の多さが注目される。これに対し羨道の仕切り石間の前室的空間からは土器と馬具を中心とした鉄器が出土した。また羨門部で壷・甕・平瓶・横瓶などの大型の土器が出土した。出土した須恵器は1・2に見られるＴＫ43段階から9・10のＴＫ209の新しい段階までの時期幅があり、6回（耳環の数を考慮すると最高9回まで）の埋葬が考えられる。しかし、埋葬の順序までは復元出来なかった。

第2石室は小型の左片袖式の横穴式石室で玄室の平面形は長方形である。石室の規模や遺物の出土状況などから1回のみの埋葬が考えられる。玄室では埋葬時の土器の配置状況が伺え、鉄器は鉄鏃と刀子のみで馬具はない。また耳環・玉類といった装身具も出土していない。出土した須恵器は埋葬時において同一時期のもので、第1石室の最も古い段階の土器と同型式であるが、137・138といったやや新しい様相を示すものも含まれており、ＴＫ43段階でも新しい段階と考えられる。

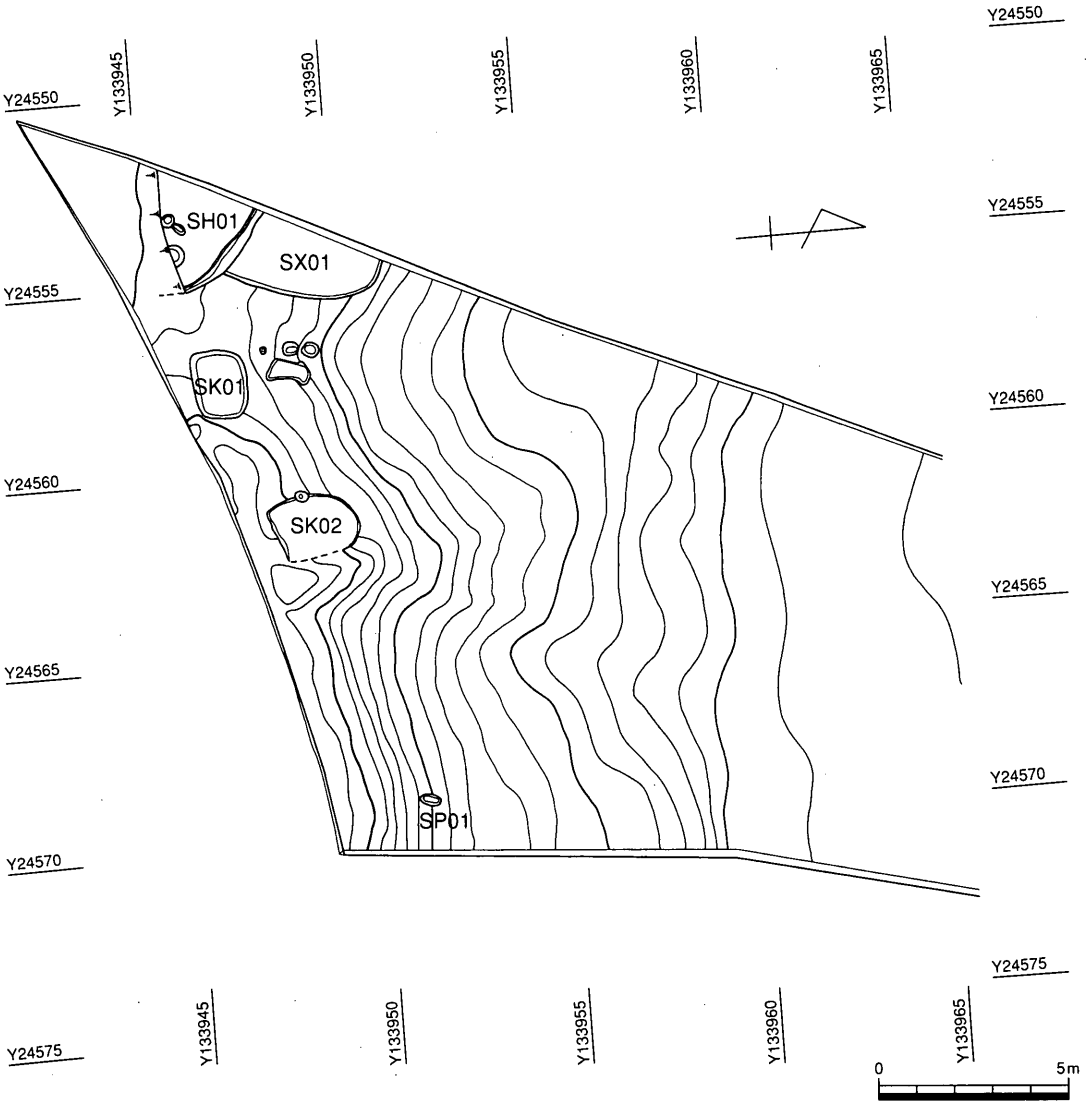
第４章　北原遺跡の調査成果

第１節　調査区の概要（第２図、第４図、第32図）

北原遺跡は北原２号墳の所在する場所から南側へ80ｍほどの間の部分である。当初は北原２号墳の下部を含めて北原２号墳の北側部分まで北原遺跡が広がると予想された。従って北原２号墳より南側をⅠ区、北原２号墳部分をⅡ区、北原２号墳より北側をⅢ区と定めた。しかし北原２号墳から南へ50mの私道までの区間のⅠ区のみで遺構・遺物が検出されたにとどまるため、この部分を北原遺跡とする。

調査前の現況では北原２号墳の墳端付近に地境の石垣あり、そこから南に向かって平坦地が15mほど続いた後に傾斜して私道に至る。この私道は本来の斜面地を掘削して作れており、北原遺跡周辺は全体にみかん畑として開墾されていた。

調査の結果、北原２号墳の墳端付近の石垣のある斜面は開墾時の人為的な斜面であり、さらにここから続く平坦地も開墾時の削平によるものであることが判明した。この削平は深く、地山面も削平して平



第32図　北原遺跡平面図（1/200）

坦面を作っていた。このため遺構・遺物は皆無であった。そして南側の私道際7～10mの部分が本来の地形が残っている部分であり遺構・遺物が検出された。これらのことから、本来は北原2号墳の南側周溝部分から私道付近にかけて緩斜面が続いていたことが判る。

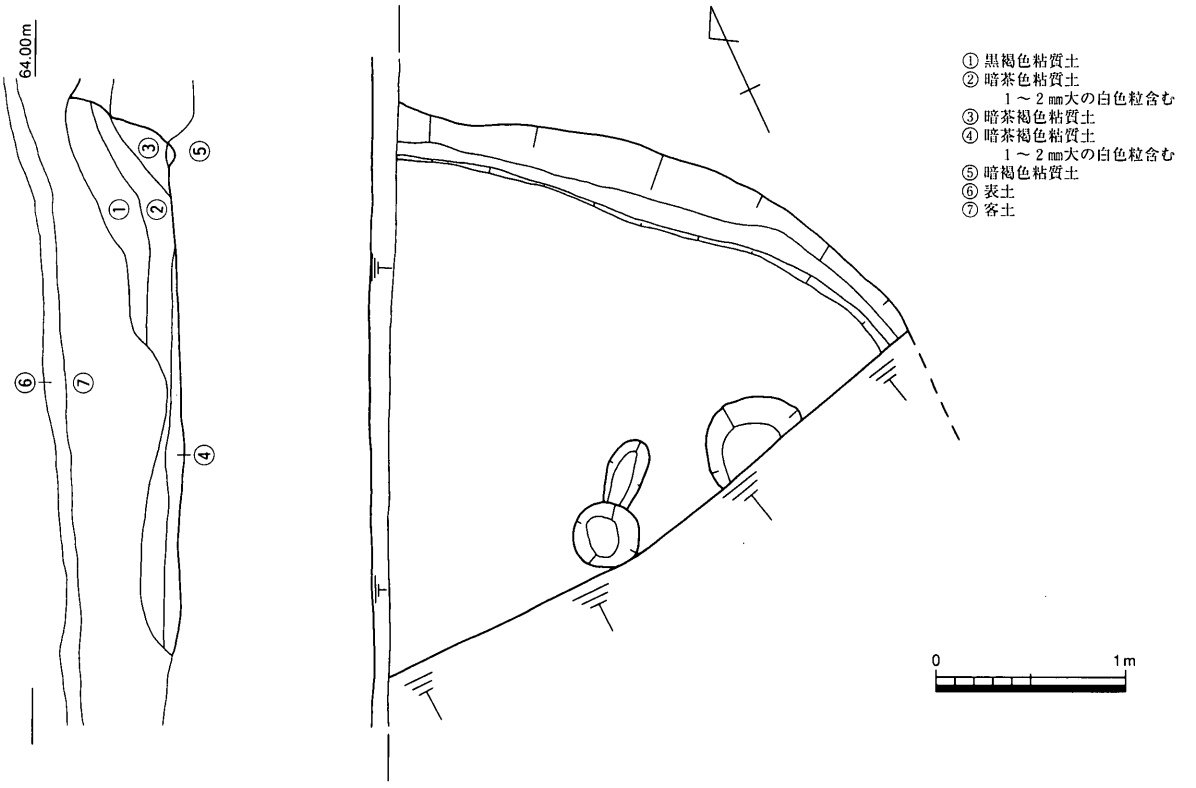
遺構は表土から40cmほど下で検出された。遺構面と表土の間は全体に客土になっていた。斜面地であるため斜め方向に土層が堆積しており、茶色系の砂混じり粘質土層が遺構面になっている。調査区の南西部では黒褐色系の粘質土の包含層が見られた。

第2節　遺構・遺物

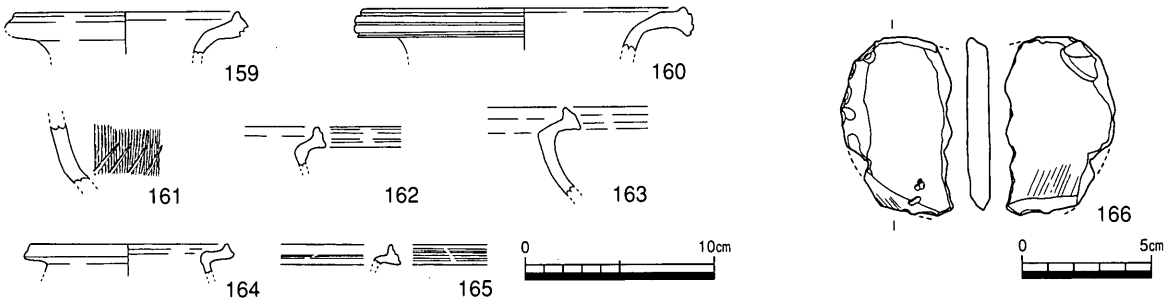
SH01（第33図～第34図）

調査区の南西隅で検出した円形の竪穴住居跡である。東側は調査区外になり、南側は撹乱を受けていたため検出できたのは全体の1/6ほどである。床面には柱穴が3基検出されたが、全体の構造等は不明である。また壁際には幅8～16cm、深さ6cmほどの壁溝が巡っていた。埋土は検出した部分の最上層に黒褐色粘質土が堆積し、床面近くには暗茶～暗茶褐色の粘質土が堆積していた。

埋土から弥生土器と石器、サヌカイト片が出土した。159～161は壷である。159は口縁部端部を上方に拡張する。160の口縁部は大きく開き端部を上下に拡張する。161は頸部の破片であるが、板状工具の小口部分による圧痕文が巡っている。162～165は甕であるがいずれも口縁部端部を主に上方に拡張し、端面に凹線を巡らせている。163の口縁部内面の屈曲部は鋭い。166は流紋岩製の磨製石庖丁であ



第33図　SH01平・断面図（1/40）



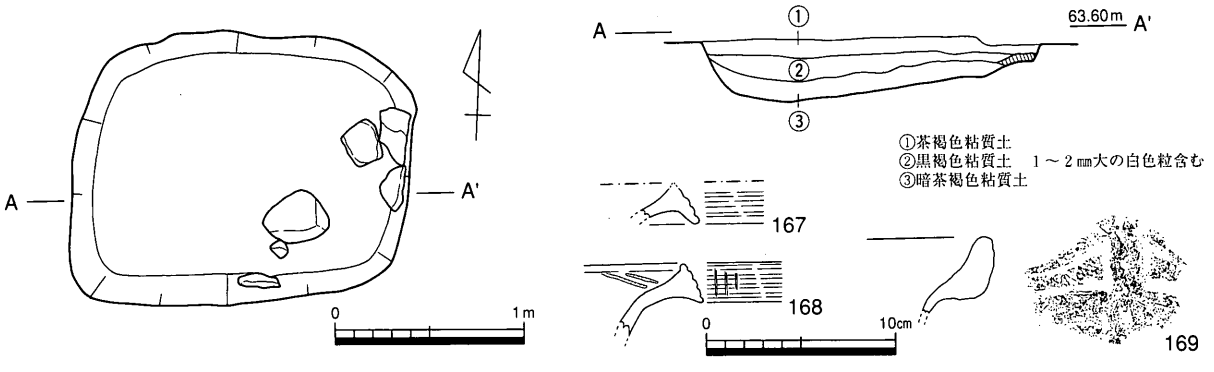
第34図　SH01出土遺物（1/4、1/3）

る。刃部は両面から作り出しており、部分的に使用痕と考えられる擦痕が認められる。

SK01（第35図）

調査区の南端部でSH01の東側に隣接して検出した土坑である。平面形は1.8m × 1.4mの長方形で、深さは0.32mであった。底部は東側が浅くなっており、この東側の部分に20cm前後の角礫が数点あった。茶褐色系の粘質土が堆積していた。

167・168は壷である。167は口縁部端部を下方に大きく拡張している。168は口縁部端部を上下に拡張し、外面に凹線を施した後に3条1単位のヘラ描文を加えている。内面には板状工具の小口部による圧痕文が見られる。169は混入した縄文土器である。波状口縁部の一部で、沈線による文様が見られる。口縁部の方形に描かれた沈線の内側には縄文が見られる。



第35図　SK01平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SK02（第36図）

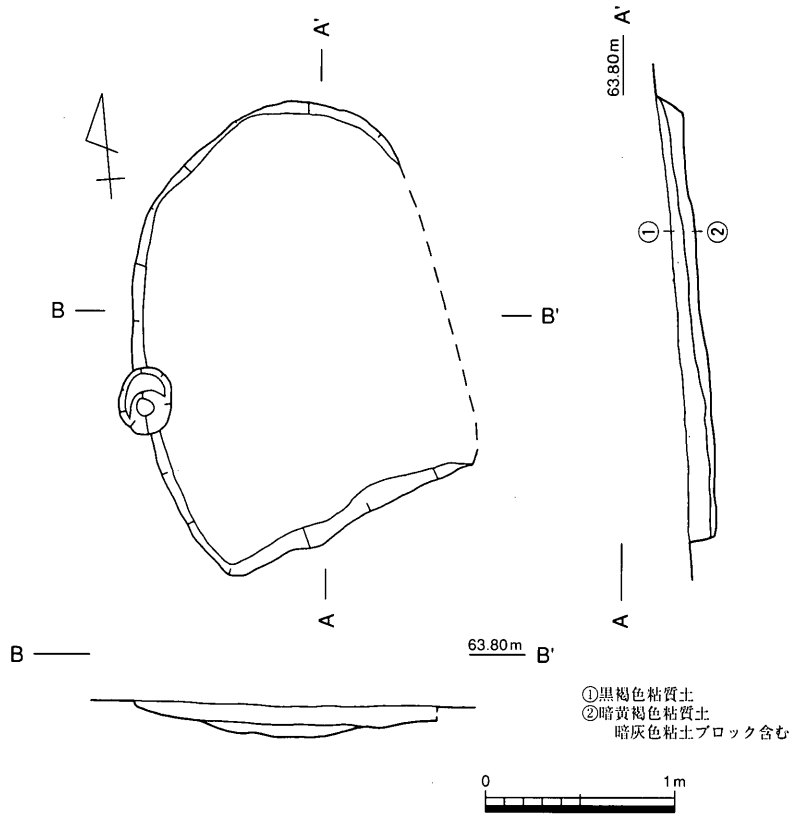
調査区の南端部でSK01の東側3mのところで検出した土坑である。不整形なもので、北側から西側にかけては丸みを帯びているが南側は直線的である。また東側は撹乱により失われている。南北方向に2.15m、東西方向に1.7mあるが、深さは16cmと浅いものであった。底部は中央付近がやや深くなっており、この部分を中心に暗灰色粘土ブロック混じりの暗黄褐色粘質土が堆積していた。遺物は弥生土器の細片が少量出土したにとどまる。

SP01（第37図）

調査区の南端部の東壁付近で検出した柱穴状の遺構である。楕円形に近いが北側の隅は角張っている。

南北方向に55cm、東西方向に25cmで、深さは30cmほどである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。壷の体部が1個体出土した。

170は壷の底部であるが、同一個体の体部は細片が多く接合出来なかった。外面にはハケ目があり、内面には指押さえが目立つ。底部は安定した平底である。



第36図　SK02平・断面図（1/40）

SX01（第37図）

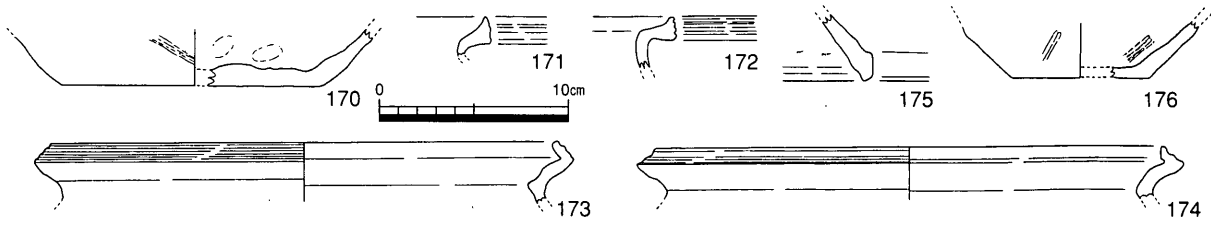
調査区南西部の西壁際で検出した遺構である。西側は調査区外に広がり、南側はSH01に壊されている。部分的ではあるが隅丸方形のような形である。深さは60cmほどで底面は地形に合わせて傾斜している。暗茶色～暗茶褐色粘質土が堆積していた。人為的に掘り込んでいるが、柱穴などの施設が認められないことや底面が傾斜していることから、竪穴住居跡とは考えられないものである。弥生土器の細片が少量出土したにとどまる。

171は甕の口縁部であるが、端部を上方に拡張し端面に凹線を施している。

包含層出土遺物（第37図）

調査区の南西部を中心に見られた包含層からの遺物で、遺物量はコンテナ半箱程度である。

172～174・176は甕である。172は口縁部は真横に開き、端部を上方に少し拡張している。173・174はともに口縁部端部を上方に大きく拡張し、傾斜する端面に凹線を施している。いずれも口縁部を強くナデている。176は底部の細片で外面にはヘラミガキが認められ、内面にはハケ目状の板ナデとなっている。175は高杯の脚部である。脚部端部は下方に拡張し、外側に面をもつ。内面にはヘラ削りを施している。



第37図　SP01、SX01、包含層出土遺物（1/4）

第3節　小結

北原遺跡は大部分が削平を受けており、遺構を検出したのは調査区の南端部の限られた箇所であった。北原2号墳の下層からも検出されなかった。しかし竪穴住居跡（SH01）といった生活遺構を検出した意義は大きい。今回竪穴住居跡を検出した位置から私道を挟んで南東へ15ｍほどのところで平成6年度の調査で、北原3号墳の下層から竪穴住居跡が1棟検出されている。この竪穴住居跡は今回の調査で検出した竪穴住居跡（SH01）と同時期の弥生時代中期末～後期初頭のもので、同一の集落と考えられる。北原2号墳との間の削平された部分にも本来は集落が展開していたものと思われる。今回の調査でも標高63.8ｍの丘陵部に位置する集落の一端がつかめたことは、弥生時代後期前半以降の低地に位置する集落との関係を考える上でも意義がある。

第５章　香川県北原２号墳から出土した耳環の材質と製作技術

奈良文化財研究所　村上　隆

１．はじめに

耳環は、古墳の副葬品の中でもっともポピュラーでありながら、あまり系統的に論じられたことがない。それは、その形状のシンプルさのために、個々の特徴を捉えにくいことも一因であろう。しかし、耳環それぞれの材質や構造、さらには製作技術まで細かく見ていくことで、これまでとは異なった視点で耳環を見直すことができる可能性を秘めていると考える。実際に、耳環の製作にあたっては、当時考えられるさまざまな金工技術を駆使して作られていることが最近の調査で徐々に解明されてきている。今回調査を行った香川県北原２号墳出土の耳環18個は、一つの石室内でほとんど原位置を保ったとみられる状態で検出された。しかも、形状も大小様々ながらペア関係がわかるものも多く、これらの材質と構造、さらには製作技術を一括して探ることは、耳環の調査研究に有意義な情報をもたらしてくれるものと考える。

２．調査対象と調査方法

調査に供したのは、香川県北原２号墳から出土した耳環18個（Ｊ１～Ｊ18）である。ほぼ完形とみられるものも多いが、腐食の激しいものも多く、中には破損し当初の形がわからないものも含まれている。また、耳環のタイプも多岐にわたっている。筆者は、以前に兵庫県中町の東山古墳群から出土した耳環33個の材質と製作技術を探り、耳環製作の時代的変遷を追う試みを行った。今回の調査では、一つの石室内から出土した耳環を材質と製作技術で分類し、考古学的な考察との整合性を検討することを行ってみた。調査結果は、表１・２にまとめて示してある。

調査は非破壊的手法で行った。Ｘ線ラジオグラフィーで内部の構造を探るとともに、蛍光Ｘ線分析法で材質を分析した。用いた装置は、テクノス製文化財用蛍光Ｘ線分析装置TREX640S。測定条件は、管電圧45kV、管電流0.3mA、測定時間100～300秒。Ｘ線照射面積は、１mm ϕ。

３．調査結果、並びにまとめ

個々の耳環の観察と分析の結果は、一括して表にまとめた。ただし、形体的特徴の一つである開口部の作り方については、ほとんどの耳環が、腐食のため錆びたり破損しているため、詳細を観察するには至っていない。また、大きさや形状に加えて、分析結果を踏まえた上で、対（ペア）関係を探ったが、これは「耳環は、同じ大きさ、同じ形状、同じ材質の２個が対である」という前提に従っている。しかし、今回の調査で、出土位置から確実に対になると思われても、大きさや形状、さらに分析結果から考えると、説得力に欠けるものもあることがわかった。これは、上で述べた耳環の対関係の前提が常に成立するものでもないのか、あるいは、後世の撹乱のために、その前提が崩れたのかなど、今後の耳環研究に検討を要する問題を想起させることになるのではなかろうか。

【参考文献】

村上　隆：「東山古墳群から出土した耳環の分類と分析」(2001)、『東山古墳群Ⅱ』、中町教育委員会

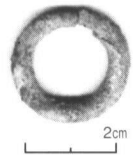
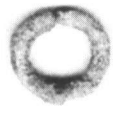
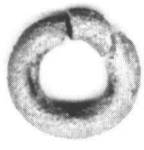
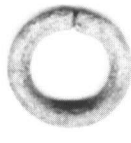
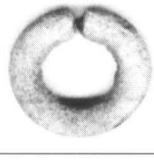
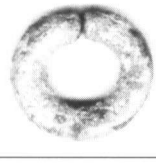
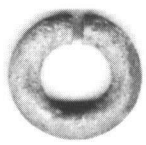
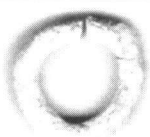
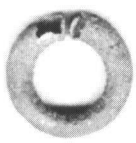
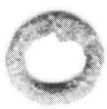
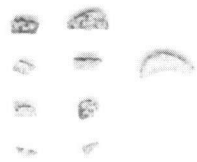
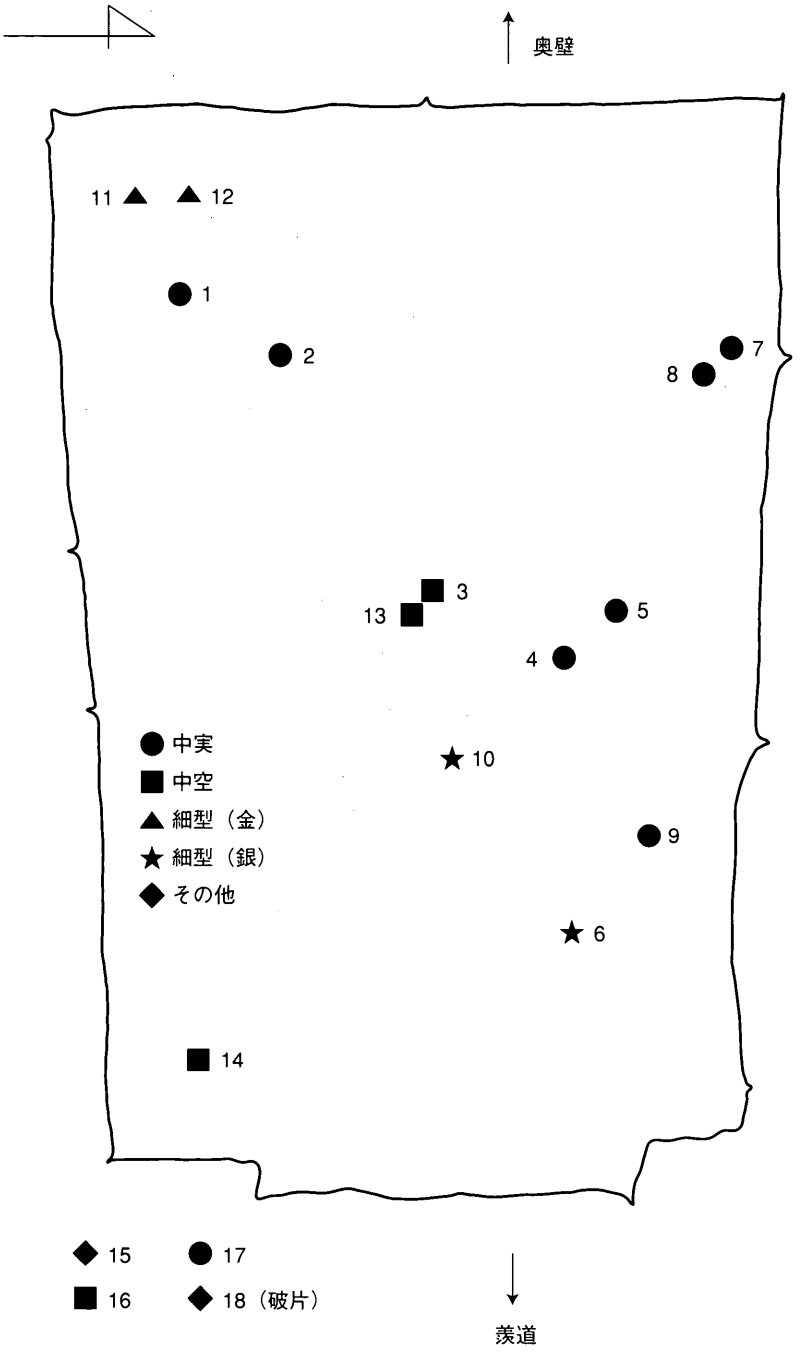
写　真	番　号 (報文番号)	外形上下(cm)	外形左右(cm)	断面径上下(cm)	断面径左右(cm)	質量(g)
			所　見			
	**J1** **(108)**	2.6	2.7	0.5	0.5	7.73
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	ほぼ純銅芯の表面を純度の高い銀の薄板で巻いて仕上げていることがわかる。開口部の隙間が極めて小さいのが特徴。出土位置から、J2と対になりそうだが、大きさなどが異なる。形状からは、J4、J5、J9と対になる可能性を持つが、表面からの分析結果では、いずれも説得力に欠ける。			
	**J2** **(107)**	2.0	2.1	0.4	0.4	3.53
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	ほぼ純銅芯の表面を純度の高い銀の薄板で巻いて仕上げていることがわかる。この耳環も開口部の隙間が極めて小さいのが特徴。出土位置からは、J1との対が考えられるが、大きさなどが異なる。むしろ、J17と、大きさも分析結果もよい一致を示す。			
	**J3** **(116)**	2.7	2.9	0.6	0.9	4.51
		中空　無芯 断面：楕円 銀薄板のみ 開口部：銀板貼	中空耳環でありながら、ベースとなる銅製のパイプを持たず、断面が楕円の銀薄板パイプのみで構成されているようである。このタイプの耳環は、珍しいのではないか。出土位置、大きさ、形体、作り方から見ても、J13と対をなすとしてよい。			
	J4 **(110)**	2.4	2.7	0.5	0.5	4.18
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	腐食が激しく、残りが悪い。開口部の形状など、オリジナルの形状はわからない。表面に巻く銀薄板の純度は高い。J1の項でも述べたが、J1、J5、J9との対関係を想定できるが、分析からどれも説得力を欠く。出土位置関係から、J5との対が自然ではある。			
	**J5** **(111)**	2.6	2.7	0.5	0.5	10.25
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	大きさなどの形体は、J1とよく一致するが、出土位置から不自然である。出土位置からみて、J4との対を考えるのが自然ではあるが、J5の表面からかなりの金と水銀が検出されるところも、対関係を論じるには問題が残る。J9も対の候補ではあるが、後に述べるように銅芯部の素材が異なるようである。			
	J6 **(119)**	1.9	2.0	0.2	0.2	1.87
		細形　銀無垢 断面：丸	細い銀を丸めた耳環。銀の純度はたいへん高い。大きさや形状は、J10と対としてよい。出土位置からみても、矛盾はない。			
	**J7** **(113)**	2.9	3.2	0.8	0.8	23.31
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	今回の分析では、確認できないが芯材はおそらく銅であろう。少し太めの芯の表面を銀の薄板で巻いている。今回調査した耳環の中で最も重量がある。大きさ、形状、分析結果、出土位置のすべてが、J8との対関係を支持している。			
	**J8** **(112)**	2.8	3.1	0.7	0.8	21.68
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	J7と対をなす。			
	J9 **(109)**	2.6＊	2.6	0.4	0.4	3.05
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	腐食が激しく、形状、特に開口部の様子は不明。大きさや形体は、J1、J4、J5と共通する部分を持つが、いずれとも異なるのが、芯材の材質である。他の3つの耳環の芯材が、純度の高い銅であるが、J9の芯材は、銅に、数%のスズと鉛、さらにヒ素、アンチモンを含む。従って、単純に対関係を論じることができない。			

表1　耳環の材質分析の成果(1)

写　真	番　号 (報文番号)	外形上下(cm)	外形左右(cm)	断面径上下(cm)	断面径左右(cm)	質量(g)
			所　見			
	J10 **(120)**	2.0	2.0＊	0.2	0.2	1.78
		細形　銀無垢 断面：丸	細い銀を丸めた耳環。銀の純度はたいへん高い。変形してはいるが、もとの大きさや形状から、J６と対としてよい。出土位置からみても、矛盾はない。			
	J11 **(105)**	2.2	2.2	0.4	0.4	4.03
		中実　銅芯 断面：丸 細形タイプ 銀薄板巻 開口部：不明	細い銅芯の表面を金の薄板で巻いた耳環。開口部は、破れて銅芯が顔を出しているが、金薄板で巻いて仕上げていたのだろう。今回分析した中で、最も安定した分析値を示した。金薄板は、金94%、銀５%、その他に微量の銅を含む。			
	J12 **(104)**	2.2	2.2	0.4	0.4	4.29
		中実　銅芯 断面：丸 細形タイプ 銀薄板巻 開口部：不明	J11と、大きさ、形状、分析結果ともに、非常に良い一致を示す。出土位置からみても、この２つの耳環が対であったことは疑う余地はなかろう。			
	**J13** **(115)**	2.8	3.0	0.7	1.0	5.36
		中空　無芯 断面：楕円 銀薄板のみ 開口部：銀板貼	J３と同様、中空耳環でありながら、ベースとなる銅製のパイプを持たず、断面が楕円の銀薄板パイプのみで構成されていると考えてよい。珍しいタイプの耳環である。出土位置、大きさ、形体、作り方から見ても、J３と対をなす。			
	J14 **(117)**	2.6＊	2.8	0.6	0.9	3.04
		中空　銅芯 断面：楕円 銀薄板巻 開口部：銀薄板貼	破損して、バラバラになっている。J３、J13と同様、中空で、大きさや形状はよく似ているが、芯に銅のパイプを持つ、通常の中空耳環である。銀薄板の純度は高いようである。			
	**J15** **(114)**	2.8	2.8	0.5	0.5	13.03
		中実　鉛芯 断面：丸 表面？ 開口部：不明	今回調査した中で唯一の鉛製。表面からの分析では、鉛の純度は高い。鉛芯に何か他の金属を被覆しているのか調べたが、痕跡は認められなかった。おそらく、鉛のみの耳環なのだろう。他に対をなす耳環は見つかっていない。			
	**J16** **(118)**	2.8	2.8	0.6	0.9	4.06
		中空　銅芯 断面：楕円 銀薄板巻 開口部：銀薄板貼	中空耳環。J３、J13と同様、中空で、大きさや形状はよく似ているが、芯に銅のパイプを持つ、通常の中空耳環であることから、破損はしているもののJ14と対をなすのではないかと考えられる。J14同様に、銀薄板の純度は高い。この耳環は、残念ながら、出土位置を特定できない。			
	**J17** **(106)**	2.0	2.0	0.4	0.4	3.85
		中実　銅芯 断面：丸 銀薄板巻 開口部：不明	ほぼ純銅芯の表面を純度の高い銀の薄板で巻いて仕上げていることがわかる。この耳環も開口部の隙間が極めて小さく、サビで埋もれてしまっている。出土位置の特定ができないが、大きさ、形体、分析結果からは、J２との対が考えられる。			
	**J18**	－	－	－	－	－
		中空　銅芯 断面：？ 銀鍍金？ 開口部：不明	羨道部からの出土である。破片しか確認できないが、銅薄板のパイプを芯に、表面を銀鍍金したのであろうか。かなりの水銀を検出できる。分析で確認できていないが、おそらく銅薄板の合わせ目部分を銀鑞付けしているものと思われる。			

＊復元　　重量には錆の重さも含む

表２　耳環の材質分析の成果(2)



第38図　分析耳環セット関係図（1/20）

第6章　まとめ

第1節　北原2号墳の築造過程

北原2号墳は一つの墳丘内に2基の横穴式石室が築かれていた。規模の大きいほうを第1石室、小さいほうを第2石室と呼称した。第1石室は天井石を含めた石室上部はすでに失われていたが、基底石や床面は良好に残っていた。また第2石室も土圧により上部は崩壊していたが、基底石や床面は良好に残っていた。ここでは調査を通じて知りえた北原2号墳の築造過程を復元する。

①古墳築造場所の選定

北原2号墳の位置は尾根の先端部分で一部、下方に向かって傾斜をしている。立地的には条件の悪い場所であるが、ここに築造しなければならなかった理由は、西側の尾根の上側に築かれていた北原1号墳に規制されてのことである。北原1号墳の被葬者と2号墳の被葬者とは同系列と考えられる。

②古墳築造場所の整地

選定場所が尾根上の傾斜地であったため、西側の高い部分を削り低いほうの東側に盛土を行う。このことは古墳築造時の地表面である黒褐色土の有無と墓壙の掘削面から理解出来る。

③第1石室と第2石室の墓壙掘削

墳丘の南北ベルトの土層観察により、同一面・同一レベルからの墓壙掘削が読み取れる。

④第1石室基底石設置と基底石裏側～墓壙間の充填、第2石室構築

第1石室玄室の側壁の大型の基底石が丁度収まり、奥壁の南側の大型の石の頂部が少し覗いている状態。基底石を設置し、小型の基底石の上には2段ほど石材を積んだ後に、墓壙との間の空間に裏込めの土を充填し叩き締める。第2石室は最も大型の石材である玄室の奥壁の頂部が墓壙に収まっている状態。そして墓壙の中で石材を積み上げて石室を完成させる。

⑤第1石室の構築と盛土、周溝の掘削

第1石室の石材の積み上げとともに盛土を行ってゆくが、この盛土により完成した第2石室は覆われる。周溝を掘削した土を利用して盛土を行うが、盛土は石材が安定するように単位を細かくしている。

⑥天井石架設、一次墳丘の完成、（墓道掘削）

天井石を架設により石室が完成し、それを盛土で覆うと一次墳丘が完成する。この段階で墳丘上の祭祀が行われる。おそらく墓道はこの段階で掘削されている。

⑦二次墳丘の完成

⑧墳丘完成

以上のように北原2号墳の築造過程を復元したが、実際に調査で確認出来たのは⑤の段階までである。墓道については第1石室、第2石室ともに調査区がちょうど羨門部分で終わっているため、第2石室で僅かに確認出来た以外に平面的な調査や墳丘との関係をつかむための断面観察は出来ず、わずか調査区東壁の土層断面による知見によるものである。従ってその掘削時期についての確認は不十分なものであることは否めない。

第２節　一墳丘複数横穴式石室墳について

(1)はじめに

北原２号墳では墳丘の中央部に規模の大きい第１石室が、その南側には小さい単葬用の第２石室が構築されており、第１石室・第２石室ともに横穴式石室であった。横穴式石室採用以前には一墳丘に複数の埋葬施設をもつことは墳端埋葬などを含めて珍しいことではなかった。しかし横穴式石室採用以後になると、横穴式石室そのものが一つの石室で、追葬という複数の埋葬が可能であったため、一つの墳丘に複数の埋葬主体を構築することは激減し、一墳丘に一横穴式石室が基本となった。しかしながら一墳丘に複数の横穴式石室を持つ例も少ないながら存在するのは事実である。

こうした一墳丘に複数横穴式石室をもつ古墳に関しては、泉森皎が本格的に検討して以来すでに何人かの先学がふれている。泉森は「双墓」を「隣接墳」、「双丘墳」、「双室墳」に分類し、このうち「双室墳」を一墳丘内に複数の石室を構築したもので石室は横穴式石室で二石室が主であるとした(1)。この泉森のいう「双室墳」をさらに検討を加え、「双室墳」を含む一墳丘複数石室墳を五つの類型に分類・検証したのは楠元哲夫である(2)。北原２号墳を理解するうえでもこの分類は参考になるものである。また久保田昇三は一墳丘複数横穴式石室墳は集成し、その分布状況と紀氏及びその同族の分布状況が似ていることに注目した。そして一墳丘複数横穴式石室墳という造墓形態は、紀氏及びその同族による南海道航路の掌握、大和政権の朝鮮半島進出に紀氏がかかわったことに関連すると想定した(3)。

(2)香川県内の様相

さまざまなタイプの一墳丘複数横穴式石室墳を含むが、その集成を行った久保田昇三によると(3)、香川県には観音寺市上母神８号墳、観音寺市小天王塚古墳、三豊郡財田町吉田４号・５号墳、三豊郡山本町山王山古墳、仲多度郡多度津町向井原古墳、仲多度郡満濃町佐岡１号・２号墳、さぬき市長尾町北山八坂古墳の「双室墳」７基があり、北原２号墳を加えると８基の「双室墓」、つまり一墳丘複数横穴式石室墳があることになる。このうち発掘調査が行われたものの概要を紹介する。

上母神８号墳(4)　観音寺市木之郷町

独立丘陵の裾部に位置する直径約19ｍの円墳で、最大幅５ｍの周溝を伴う。墳丘は削平されており横穴式石室の下部が検出されたにとどまる。墳丘内に125°の異なった方向に開口する２基の横穴式石室がある。

第１石室は全長6.5ｍの両袖式で、玄室長は3.4ｍ、玄室奥壁幅は1.6ｍである。玄室床面には二重に礫を敷いている。玄門部は片側が欠損しているが大型の立柱石があり床面には仕切り石がある。須恵器・鉄鏃などの鉄器、耳環、玉類が出土している。

第２石室は全長3.8ｍの両袖式で、玄室長は2.6ｍ、玄室奥壁幅は1.2ｍで、第１石室より一回り小さい。玄室床面は二重に礫を敷いている。鉄鏃、紡錘車、ガラス小玉が出土したが須恵器は出土していない。

第１石室と第２石室の間の土層観察や周溝の平面形から、両者は同時に構築されたと考えられている。第１石室の須恵器から６世紀後半～７世紀前半（ＴＫ43～ＴＫ209）が考えられる。

吉田４号墳・５号墳(5)　三豊郡財田町財田中

丘陵の斜面地に位置する古墳で、４号墳・５号墳ともに墳丘は完全に削平されており４号墳には周溝の一部が検出されたが、墳形や規模は不明である。

４号墳は玄室の一部のみが残っており、奥壁から見て右片袖式とされている。残存長は4.3ｍで、玄室長は2.3ｍであるが幅は不明である。玄室床面には礫を敷き、玄門部には仕切り石がある。須恵器と耳環が出土している。７世紀前半（ＴＫ209）段階のもので追葬の痕跡はない。

５号墳は全長3.7ｍほどの無袖式で、玄室長2.6ｍ、玄室奥壁幅1.2ｍである。玄室床面には全体に礫を敷いている。仕切り石が置かれ玄室と羨道を区別している。須恵器と鉄鏃、鉄製釣り針が出土している。７世紀中葉（ＴＫ217）段階のもので、追葬の有無は不明である。

４号墳と５号墳の横穴式石室は３～４ｍと至近距離にあることから「双墓」とされている。時期的には４号墳が築かれた後に５号墳が築かれている。墳丘がすべて削平されているため不明であるが、「双室墳」であれば４号墳の墳丘を利用して５号墳の墳丘を付け足した、あるいは元々ある４号墳の墳丘に５号墳の石室を築いたかであろう。

向井原古墳(6)　仲多度郡多度津町

丘陵裾部の傾斜地に位置する、現存部分では20ｍ×12ｍの楕円形の墳丘になる。一墳丘に第１石室と第２石室があったが昭和の初期にすでに第２石室は全壊している。

第１石室は現存の全長6.1ｍの両袖式で、玄室長2.4ｍ、玄室の最大幅は2.2ｍである。玄室床面には礫が敷かれていた痕跡がある。側壁は上部で持ち送りが強くなっている。玄門部には立柱石を配し、仕切り石と楣石がある。須恵器と鉄器片が出土している。

第２石室は昭和初期の記録によると第１石室の西側1.8ｍに位置し、玄室長1.45ｍ、玄室幅0.85ｍであり、第１石室に比べて小さなものである。

第１石室と第２石室とは規模や構造にかなりの隔たりがあるため、第２石室は付属的な石室とされているが、同時に築造されたのかどうかは不明である。

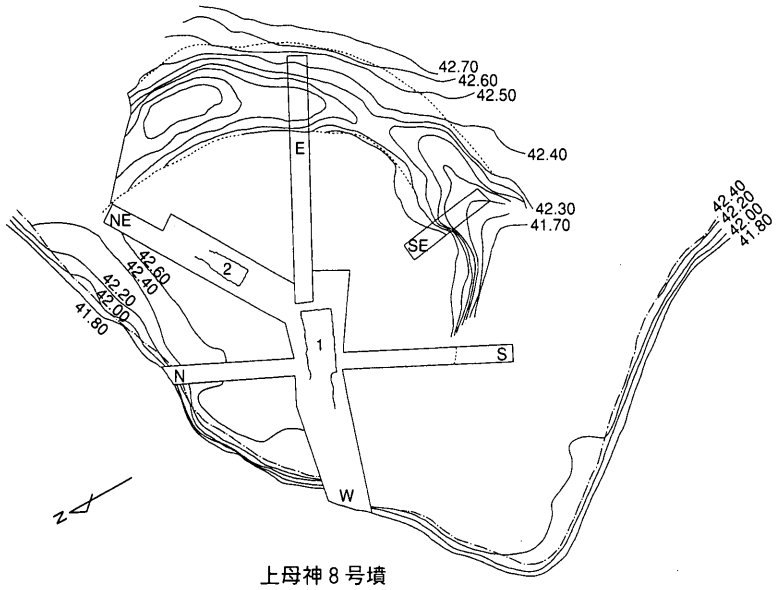
北山八坂古墳(7)　さぬき市長尾町

丘陵の尾根上に位置する直径15ｍ前後の円墳で、幅３ｍほどの周溝を伴う。墳丘は削平されており石室も下部が残っているにすぎない。墳丘内に若干ずれるがほぼ同じ方向に開口する２基の横穴式石室がある。

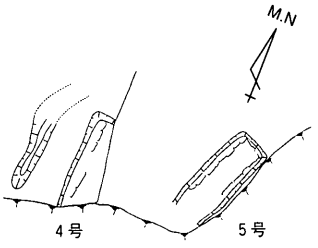
第１石室は全長約6.5ｍの両袖式で、玄室長は約3.5ｍ、玄室奥壁幅は約1.7ｍである。玄室床面には一面に礫を敷いており、玄門部の立柱石は内側に突出し、間に仕切り石を置く。須恵器、刀子・鉄鏃・辻金具などの鉄器、玉類、耳環が出土している。

第２石室は玄室袖部と羨道部が失われており、現存の石室の全長は約3.5ｍで両袖式と報告されている。玄室床面には大きめの礫を全体に敷いている。須恵器、刀子、玉類、耳環が出土している。

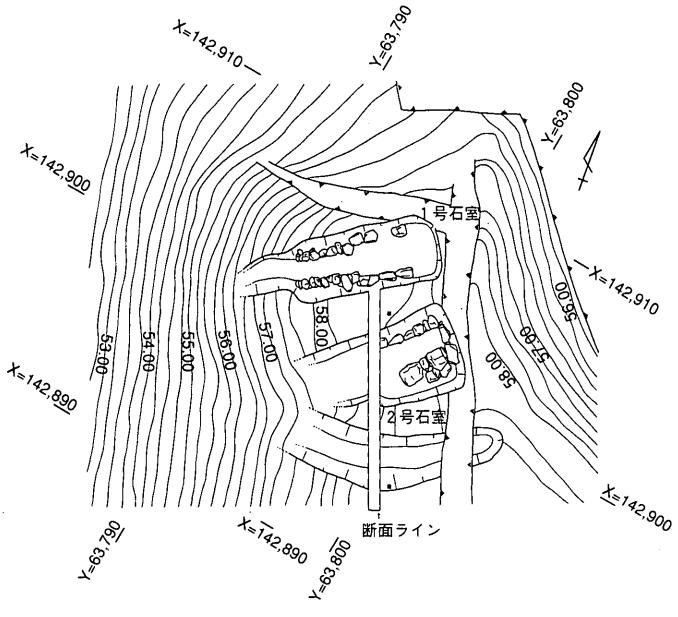
第２石室は第１石室の墳丘盛土から墓壙を掘り込んでおり、第１石室構築後に新たに作られこれに伴って墳丘も拡張している。第１石室は６世紀後半～７世紀中葉（ＴＫ43～ＴＫ217）、第２石室は７世紀前半～中葉（ＴＫ209～ＴＫ217）で、両石室ともに追葬が認められる。



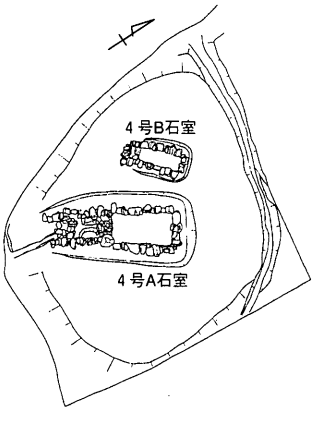
上母神８号墳



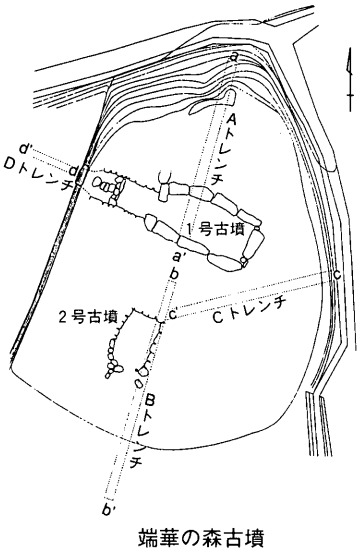
吉田４号墳・５号墳
（一部加筆改変）



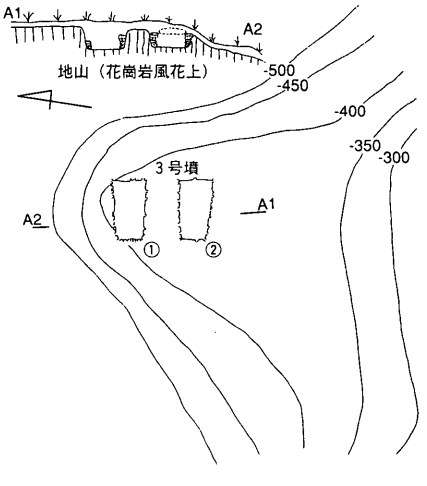
北山八坂古墳



東山鳶が森４号墳



端華の森古墳



治平谷３号墳

第39図　一墳丘複数横穴式石室墳（1/400）

(3)周辺地域の様相

先述した久保田の集成によると、一墳丘複数横穴式石室墳は奈良県北部の旧国でいう大和を中心とする近畿地方と、香川県西部から愛媛県にかけての瀬戸内海沿岸地域に多い。香川県の隣国である愛媛県では久保田によると25基が確認されている。発掘調査が行われたものの中からいくつかその概要を紹介する。

東山鳶が森4号墳(8)　松山市東石井町

丘陵の緩斜面に位置する最大径約14ｍのやや歪んだ円墳で、最大幅1.2ｍの周溝が巡る。墳丘盛土は大部分が削平されているが、ほぼ同じ方向に開口する大小2基の横穴式石室（Ａ石室、Ｂ石室）が検出された。

Ａ石室は全長6.3ｍの両袖式で、玄室長は3.2ｍ、玄室奥壁幅1.8ｍである。玄室床面は間に20～30cmほどの板石を挟んで上下に円礫を敷く3重構造の礫床である。玄門部には塊石が3段積み上げられている。須恵器、直刀・刀子・鉄鏃・轡・鉄鎌・鉄斧などの鉄器、玉類、耳環が出土している。鉄器が量的に出土しているのに加えて、耳環が16個出土しているのが注目される。

Ｂ石室は全長3.5ｍの無袖式で、玄室長は2.3ｍ、玄室中央幅1.0ｍである。玄室床面には小礫の上に20cm前後の川原石を敷く二重の礫床になっている。羨道部は0.9ｍと極端に短く、羨道というよりは横口部の閉塞のための壁と言ったほうが良いものである。玄門部には2段の石積みがあり階段状に玄室に下りる形態である。刀子・鉄鏃の鉄器と玉類、耳環が出土している。

Ａ石室とＢ石室は周溝に囲まれた一つの墳丘内に築かれたもので、墳丘断面から両者は同時期に一緒に築造されたと報告されている。Ａ石室には追葬が見られ、ＴＫ43段階の杯蓋と杯身が1点ずつ見られるが概ね7世紀前半～中葉（ＴＫ209～ＴＫ217）の時期である。

端華の森古墳(9)　伊予三島市上柏町

丘陵から派生する緩斜面に位置する直径25～30ｍほどの円墳と推定される。墳丘は削平されているが直交する位置に2基の横穴式石室（1号古墳・2号古墳）があり、90°振った方向に開口している。

1号の石室は全長9.1ｍの両袖式で、玄室長は4.96ｍ、玄室奥壁幅2.1ｍ、玄室中央幅2.28ｍで胴張りになっている。玄室の奥壁側半分と片方の側壁際には40～50cm四方ほどの大型の板石を3～5段ほど積んで、棺床を作っている。玄門部の立柱石は内側に突出しており、間には仕切り石がある。羨道にも細めの仕切り石があり、両仕切り石間の空間には須恵器や鉄器などの副葬品が出土している。石室からは須恵器、土師器、刀子・鉄鏃・鉄鎌・鉄斧などの鉄器、玉類、耳環が出土している。

2号の石室は袖部から羨道にかけて片側が失われているが、奥壁から見て右片袖と報告されている。石室の全長は現存部で4.3ｍ、玄室長3.1ｍ、玄室奥壁幅1.7ｍ、玄室中央部幅1.94ｍと緩やかな胴張りになっている。玄室の床面には大型の板石が敷かれており、須恵器、刀子・鉄鏃・鉄斧などの鉄器、玉類が出土している。

1号の石室と2号の石室は規模・構造に差があり、2号の石室は1号の墳丘盛土から掘り込んで1号の墳丘内に構築している。1号の石室は6世紀後半（ＴＫ43）に構築され、7世紀後半（ＴＫ46）まで追葬されている。2号の石室は明瞭な追葬の痕跡はないが、7世紀前半～中葉（ＴＫ209～ＴＫ217s）段階のものである。

治平谷３号墳(10)　今治市桜井

丘陵の尾根上に位置する古墳で、削平され墳形や規模は不明であるが、径15ｍ程度であろうか。同規模の横穴式石室が並列し、同じ方向に開口している。

第１石室は玄室のみが残存しており、玄室長3.24ｍ、玄室幅1.52ｍである。床面には礫が敷かれている。玄門部には立柱石が内側に突出して両袖式になっており、仕切り石を置いている。羨道は検出されていない。須恵器、刀子・鉄鏃・鏡板・鋤先・鉄鎌などの鉄器、玉類および人骨が出土している。

第２石室も玄室のみで、玄室長3.44ｍ、玄室幅1.72ｍである。床面には礫が敷かれている。玄門部の構造は不明であるが、仕切り石と考えられる石が検出されている。第１石室と同様に羨道は検出されなかった。須恵器、鉄鏃、玉類が出土している。

墳丘土層からの第１石室と第２石室の前後関係は捉えられないが、墓壙の床面が第２石室のほうが高い位置にあることから、第１石室築造に伴う盛土面から第２石室を構築している可能性が高いが、単に第２石室の墓壙が浅いだけで同時に構築されていることも考えられる。また両石室ともに羨道が検出されなかったが、その痕跡もないことから羨道がないタイプの石室かもしれない。第１石室には明瞭に追葬の痕跡が見られ、６世紀前半～中葉（ＭＴ15～ＴＫ10）の時期である。第２石室は良好な須恵器がないが、これより少し遅れる時期と考えられる。

(4)一墳丘複数横穴式石室墳の構造

これまでに紹介した古墳でも複数の横穴式石室の構築関係にはいくつかあることがわかる。楠元の分類によると(11)、

類型１：先行して存在する墳丘・石室にいま一つの墳丘・石室を擦り寄せるように付加するもの。

類型２：一墳丘内に大小規模に差のある複数の石室を営むもの。主たる石室は墳丘中央部にあり、追葬が行われる。従属的埋葬施設の石室は小形で、中央石室の周りないしは墳丘縁辺に配され、単人埋葬用である。

類型３：本来、一墳丘一石室であったところに、墳丘の一部を利用して新たな石室を構築するもの。後出の石室は偏在し、先行する石室と開口方向を異にしている。

これまで紹介してきた一墳丘複数横穴式石室墳をこの楠元の分類にあてはめると、

類型１：北山八坂古墳

類型２：北原２号墳、東山鳶が森４号墳

類型３：上母神８号墳、端華の森古墳

となる。吉田４号・５号墳は類型１か類型３になる。治平谷３号墳については類型１とすれば両石室が１ｍほどしか離れておらず、新たに墳丘と石室を付加したとすれば両石室が近すぎる。類型３とするには両石室は並列しており開口方向も同じで、計画的に構築された配置になっている。墳丘の残りが悪いため現状では判断がつきがたいもので、このような例は少なからずある。

この類型によると、類型１と類型３は明らかに前後関係があり、先行する一墳丘一石室墳が構築された後に新たに石室あるいは石室と墳丘を加えるものである。これに対して類型２のものは当初から複数の石室を同時に構築しうるものである。

類型２の場合、中心となる横穴式石室以外の石室は、横穴式石室に加えて小竪穴式石槨や箱式石棺の場合もある。愛媛県松山市東山鳶が森８号墳では、主となる横穴式石室に隣接し直交した小型の竪穴式

石槨を1基同時に築造している。奈良県新庄町寺口千塚平石谷川地区10号墳・11号墳(12)では、中心となる横穴式石室のほかに同時に4基の石室が築かれている。10号墳は小竪穴式石槨3基、構造不明小石室1基が、11号墳は小竪穴式石槨3基、横穴式石室1基がそれぞれ付随している。

また治平谷3号墳のように上記の類型に当てはまり難いものや新たなタイプのものもあろう。特に墳丘が削平されている古墳の場合、一墳丘複数石室墳であることの判明がつかない場合が多い。したがって過去の調査の再検討や新たな調査例など今後の資料の増加とともに、実態がつかめてこよう。

(5)北原2号墳の理解

北原2号墳は墳丘の中心に主となる第1石室があり、同時に一回り小さい第2石室が構築されている。第1石室は合計6体までは確実に埋葬されているのに対し、第2石室は単葬である。まさに上記の類型2に該当するものである。

問題となるのは第2石室とその埋葬者である。現象面として明らかことは、第1石室と同時に構築されたが、副葬品や石室構造などにおいて第1石室より劣るということである。副葬品も土器の他には、鉄鏃と刀子のみである。耳環や玉類などの装身具はない。それに加えてその埋葬者は第1石室に埋葬されなかったということである。

同時に石室が構築されるということは、あらかじめ埋葬される人物が少なくとも2名いることになる。そのうちの1名が第2石室の埋葬者で、残りの1名は北原2号墳の造営を必要とした人物である第1石室の最初の埋葬者である。横穴式石室が家族墓であるならば、第1石室の埋葬者は血縁家族の長とその構成員と言える。そうすると第2石室の埋葬者は単純に考えると第1石室の血縁家族以外の者ということになる。この第2石室の埋葬者が第1石室と異なる系列の家族の者であれば、その属する系列の家族墓、つまり他の横穴式石室墳に埋葬されよう。それが第1石室の埋葬者家族の墓と同一の墳丘内に埋葬されているのである。楠元は「中央部の石室内の被葬者群（家族）の構成員として認められず、つまり石室内への埋葬が許されなかったため、単独に別の埋葬施設を営んだと解されるのである。それらの立場が、家族に対して隷属的とも言うべき地位にあったことは、副葬品の稀少さ・貧弱さに如実に反映されている」(13)人物を考えたのである。

しかし、「家族に隷属的とも言うべき地位」でありながらも墳丘内に埋葬施設として石室を築くことを許された埋葬者はどのような人物であったのであろうか。出土人骨の歯冠計測値の分析から古墳時代の親族構造を研究した田中良之によると(14)、6世紀前半～中葉以降の古墳被葬者の基本的な親族構造は、家長夫妻と家長を継承しなかった子の二世代構成で、次世代の家長は基本的に新たに古墳を造営するのである。またこの家長を継承しなかった子、つまり傍系親族は父である先代の家長の墓に追葬され、自らの墓を造営することはないのである。このような傍系親族は基本的に家長である直系親族に従属しているが、このなかで特に独立して行き、独自に墓を造営することが出来るようになった結果が、群集墳の爆発的増加であるとする。

では北原2号墳の第2石室の埋葬者は、楠元が想定する「家族に隷属的とも言うべき地位」のものであろうか、また田中によるどの「親族」であろうか。楠元が「隷属的」としたのは主たる石室に比べて、その規模・構造・配置や副葬品からである。第2石室は第1石室と同時に構築されており、出土した須恵器からみると、両者の埋葬時期（第1石室は初葬）にはほとんど時間差はない。第1石室の初葬者つまり北原2号墳の造営者は家長ということになろうが、その家長と埋葬時期がほぼ同じか少し後出する

人物である。年齢的に近い人物といえば第1石室の初葬者＝家長の兄弟が考えられる。田中の理論によると、今考えた家長の兄弟は前世代の家長、すなわち父親の墓所（おそらく北原1号墳）に追葬されることになる。家長の兄弟＝傍系親族の独立化が群集墳に見られる造墓層の拡大であるなら、墳丘を共有しているということは、完全に直系親族＝家長から独立しきっていない、つまり石室までは構築できても新たに単独の古墳を造るまでには至らない者と言えよう。そして6世紀前半～中葉以降の古墳被葬者からみる基本的な親族構造の二重構造の上部構造である家長の継承は父系の直系で行われ、下部構造である傍系親族にはそれ以前の古い被葬者モデルを残しているとしている。下部構造の被葬者モデルでは配偶者はともに埋葬されず、第1石室の初葬者たる家長の傍系親族と考えられる第2石室の埋葬者にはその原理が働いたために単独で埋葬されたのではないか。北原2号墳の家長の傍系親族の中で、独立途中であった者に対して最初からその原理が働いていたため、第2石室もあらかじめ単葬用の小型石室を用意したと考えたい。

北原2号墳では第1石室から人骨の細片が微量出土しただけで、分析に耐えうるものではなかった。したがって実際に人骨の人類学的分析は出来なかったが、その蓄積から導かれた田中の理論に則って北原2号墳の被葬者について考えてみた。先に述べたように、横穴式石室が家族墓でその石室以外に埋葬された者は一家長の血縁家族以外の者という単純な図式ではなく、複雑な埋葬原理が働いているようだ。また、大小二つの横穴式石室を同じ墳丘内にもつ古墳が、想定したような家長と独立途中の傍系親族の合葬墳ならば、独立して新規に造墓に至った結果としての群集墳の量を考えると、その予備軍の古墳形態は量的にもっと多くてもよさそうである。もっと特殊な事情、たとえば家長を継承する予定が何かの理由で継げなかったとか双子であったなど、が働いたのかもしれない。いずれにしても古墳時代後期における一墳丘複数石室墳は圧倒的に少なく、そのような古墳を造営した契機を正しく理解するには、良好な資料の増加を待つしかない。

第3節　出土副葬品について

(1)鉄器

北原2号墳では、第1石室から刀子・鉄鏃の武器、鉸具・雲珠などの馬具が、第2石室からは刀子・鉄鏃の武器が出土している。加えて第1石室には鍔の出土により鉄刀が、鉸具に取り付けた兵庫鎖の出土により鐙の存在が考えられる。

＜第1石室＞

鉄鏃は平根式、長頸式、雁股式が出土しているが量的には長頸式が多い。長頸式の箆被部には6世紀後半段階に採用される棘箆被になっているものがある。7世紀前後で消滅する長頸柳葉式と、これに変わるように出現する鑿箭式が出土していることは注目される。また1点であるが7世紀に出現する雁股式がある。

鉄刀は刀身の細片が出土しているにとどまるが、鍔（第21図　67）が良好な状態で出土している。鉄刀は刀身の長さが不明であるため大刀と呼べるかどうかは分からない。鍔は楕円形の大きな板状の無窓式で、側縁部に銀と考えられる象嵌が施されている。鍔の形態からこの鉄刀は通常の直刀あるいは頭椎・円頭・圭頭大刀などの装飾付大刀と考えられる(15)。しかし柄頭や装飾を施した刀装具は出土してい

ない。この鍔は一般的に無窓式のものが有窓式のものより早く出現し、6世紀後半段階（ＴＫ43段階）に急速に普及し、7世紀前半段階（ＴＫ209段階）まで盛行する。これは北原2号墳の時期に一致する。出土した鍔は現状では錆によることもあるが金銅装の痕跡は認められない。

馬具では雲珠あるいは辻金具、鋲具、兵庫鎖、飾金具が出土している。いずれも表面は錆が付着しており、金銅張りが確認できたのは飾金具の1点のみである。雲珠あるいは辻金具はドーム形の鉢部と脚部がそれぞれ出土したが、脚部はすでに遊離しており、元々の脚数は不明である。鋲具は6点出土しているが、どの部分に使用されたかは不明である。しかし98のように鋲具に取り付けた兵庫鎖が出土していることから、これと組み合わされば鐙を吊るための兵庫鎖（鐙靻）の上端に装着されていたことになる。また馬具を馬に装着したり、装着具合を調整する部分での使用が考えられる。

＜第2石室＞

刀子は1点であるが、第2石室が単葬であることから1体につき1点の副葬ということになる。鉄鏃は平根式と長頸式である。平根式は圭頭のものである。長頸式はいずれも箆被部から茎部にかけての破片で鏃身の形状は不明であるが、棘箆被のものを含んでいる。

上記のように、北原2号墳の第1石室と第2石室では出土鉄器は量・質ともに格差がある。横穴式石室墳ではその副葬品により、馬具や装飾付大刀を副葬する古墳の階層的優位が言われている(16)。北原2号墳の第1石室から、上記のように馬具に加えて直接的ではないが象嵌入りの鍔の出土とその形態から、通常の直刀あるいは装飾付大刀の存在が考えられる。

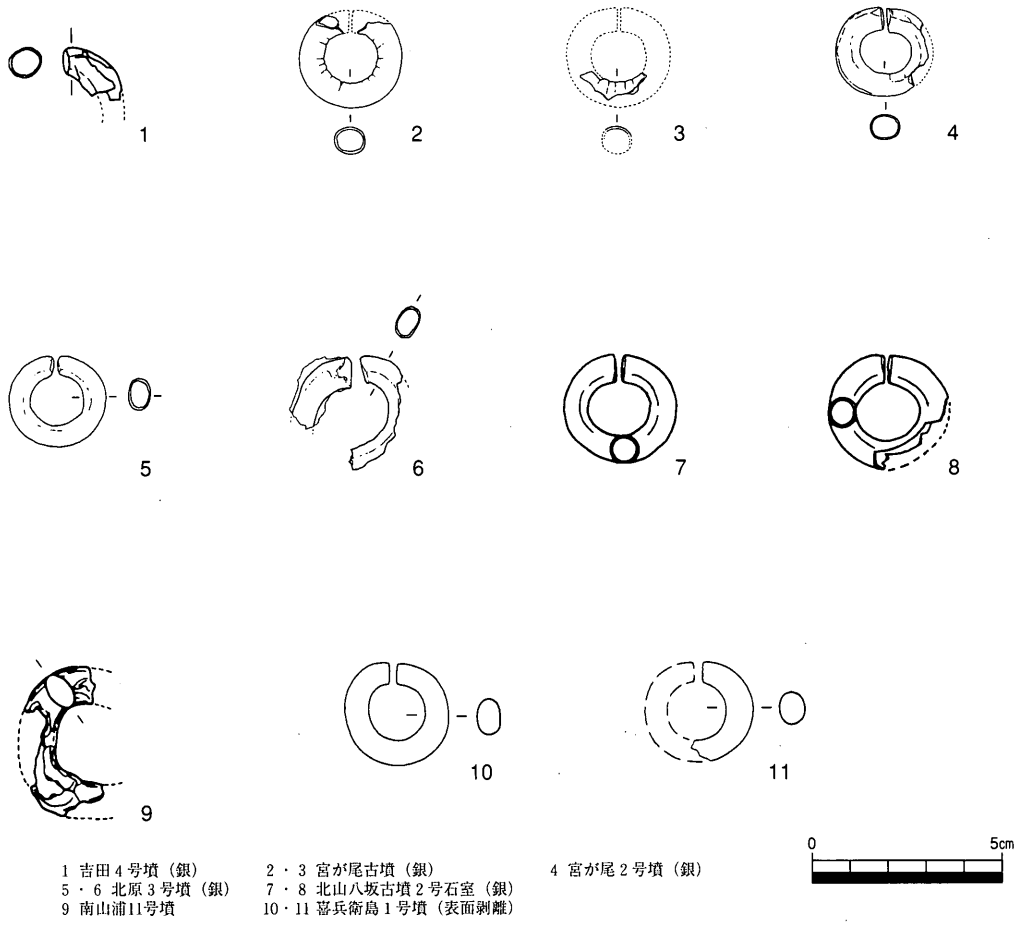
香川県内で発掘調査が行われた横穴式石室墳約130基のうち、中心的な馬具である轡が出土しているのは管見にのぼるもので17基で全体の14％にすぎない。轡を含めた馬具が出土しているものは北原2号墳を含めて29基で22％である。刀剣が出土したのは24基で18％、馬具と刀剣が共に出土したのは14基で11％である。北原2号墳が所在する善通寺市内では前方後円墳である王墓山古墳から轡・杏葉などの馬具と銀装の喰出鍔付き大刀や刀身に銀象嵌のある大刀などが出土している。宮が尾2号墳では轡が出土している。仲多度郡まで範囲を広げても満濃町安造田東3号墳(17)で大刀と轡がともに出土しているのみである。これらのことからも、北原2号墳の被葬者は上位に位置していたと言える。

(2)耳環

北原2号墳の副葬品で特徴的なことのひとつに、耳環が玄室から17点（羨道部で出土した破片を含めると18点）と多量に出土したことがあげられる。玄室出土の17点のうち13点が中実、4点が中空耳環であった。また17点のうちの2点が表面に金薄板を巻くいわゆる金環である。他には鉛製のものが1点ある以外はすべて銀薄板巻きか銀のみの銀環である。これらの耳環は形態・成分・構造などから8対＋1点（鉛製）に分類出来る。同じ玄室からこのような様々なタイプの耳環が出土している。

全国的に見ても大多数の耳環が中実で芯をもつか、あるいは素材そのものである。これらに加えて北原2号墳で出土しているように中空耳環(18)が含まれていることがある。北原2号墳では4点の中空耳環が出土しているが2点ずつ対になり、銅芯銀薄板巻きのものと無芯銀薄板のみのものがあるが、両者とも開口部は円形の薄板を貼っている。

香川県内でも確認できた中空耳環は三豊郡財田町吉田4号墳、善通寺市宮が尾1号墳、同宮が尾2号墳、善通寺市北原3号墳、坂出市サギノクチ1号墳、高松市南山浦11号墳、香川郡直島町喜兵衛島1号



第40図　香川県内出土中空耳環（1/2）

墳、さぬき市長尾町北山八坂古墳２号石室、大川郡白鳥町成重２号墳の９基と北原２号墳を加えた合計10基である。このうち吉田４号墳と北山八坂古墳は広義の一墳丘二石室墳であることが注目される。また宮が尾１号墳、宮が尾２号墳、北原３号墳は北原２号墳と至近距離である。宮が尾１号墳とサギノクチ１号墳には線刻壁画が施されている。このようにみると、中空耳環は香川県内においては善通寺市の北原２号墳の周辺と、一墳丘二石室墳や線刻壁画など特殊な古墳に集中しており、時期的にも７世紀前半代のもの（ＴＫ209ぐらい）が多くなっている。

第４節　北原２号墳の石室について

北原２号墳では、一つの墳丘に第１石室、第２石室と呼称した大小２基の横穴式石室が築かれていた。ここではこの横穴式石室の構造をまとめることにする。

＜第１石室＞

第１石室は上半分と天井部は失われており構造等は不明であるが、残存部分について調査で知り得た構造を列挙して、その後この石室の特徴や系譜などを検討する。

1．玄室の幅は奥壁部分で2.05ｍ、玄門側の幅が1.85ｍと奥壁側の方が若干広くなっている。玄室長は3.0ｍであることから、玄室の長さに対する幅の割合＝玄室比は1.54となる。

2．両袖式の石室で、袖部の石の大きさは玄室や羨道の基底石の幅より若干狭い程度である。高さは玄室の大型の側壁石とほぼ同じで、他の側壁や羨道の石よりはひとまわり高い。明瞭な玄門立柱石ではなく、玄門立柱石を意識した石と言えようか。

3．袖部の石は羨道と同じ幅で、羨道より内側に突出しない。

4．羨道長は4.6ｍで玄室より1.5倍の長さである。

5．羨道の側壁は玄室に比べて小型の石を積み上げている。

6．玄門部床面に仕切り石を置き、さらに１ｍ近く羨門方向にも仕切り石を置いており、合計２つの仕切り石がある。

7．両仕切り石の間の部分で須恵器と鉄器が量的に出土している。

8．閉塞は羨門側の仕切り石部分で、大きな板石を使用している。

9．羨門側の仕切り石部分の羨道側壁に、片側だけであるが少し内側に突出した小型の立柱石がある。

10　玄室と羨道の閉塞部分までの床面には板石を二重に入念に敷き、玄室では上下の板石の間に粘土を充填している。

11　玄室の中央部から羨門部にかけて排水溝が築かれており、玄室から羨道の閉塞部分までは石で蓋をしている。

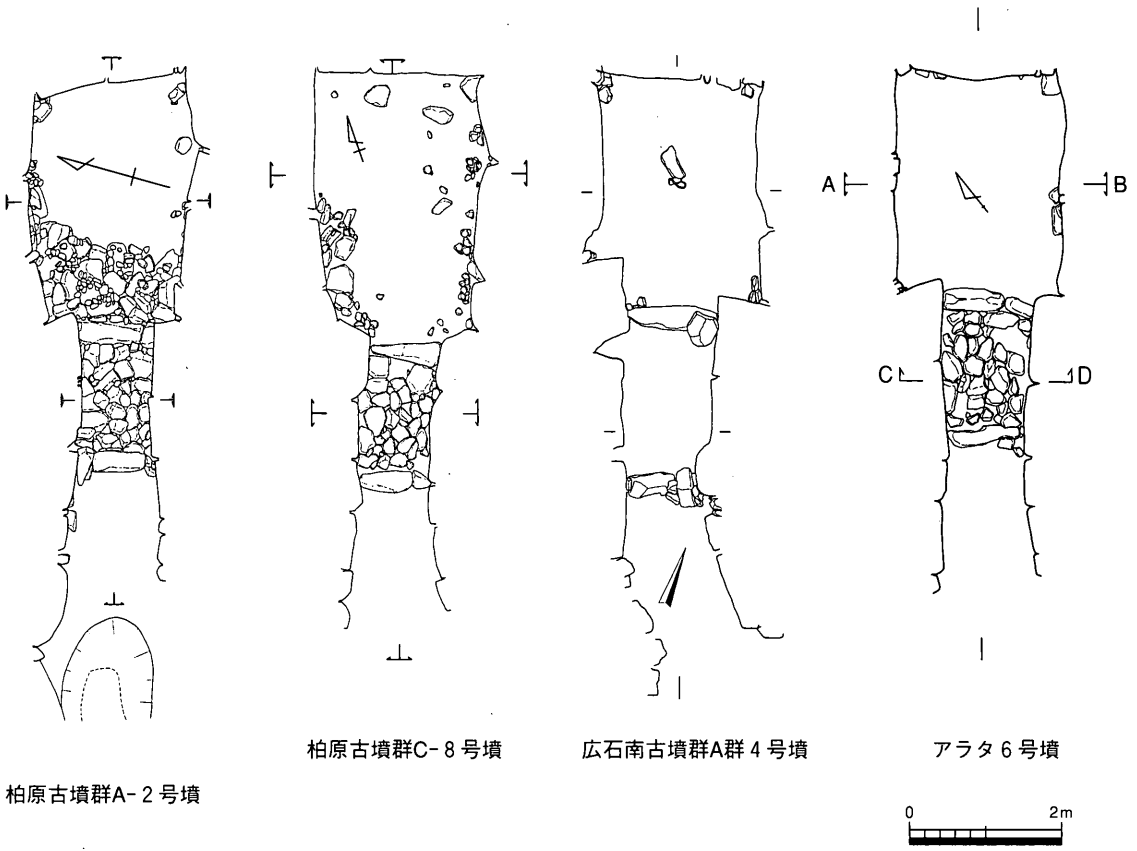
以上が第１石室の主だった特徴であるが、上記の１、６、８、９から北部九州型の横穴式石室の特徴が伺える。しかし袖部には明瞭な形の立柱石はなく、袖部は内側には突出しないなど北部九州型の指標(19)の一つとされているものが欠けている部分もある。

上記の特徴のなかで注目すべき点は６と７である。北部九州の横穴式石室の展開を検討した重藤輝行(20)は、その横穴式石室の分類の中で単室両袖型としたものは、羨道に玄門部の仕切り石に加えてもう一つの仕切り石を配して、両仕切り石間の区画を作ることを指摘している。そして羨道のこの区画は土器や鉄器を副葬する葬送儀礼の場としており、複室両袖型石室の前室と同様の機能を果たすとした。

北原２号墳の第１石室でも同様に２個の仕切り石で区画された部分に土器や鉄器が集中して出土している。重藤が指摘した北部九州型の単室両袖型横穴式石室ではこの羨道の区画部分に遺物が集中するが、北原２号墳では玄室でも土器、鉄器、耳環が出土している点が異なる。しかし北原２号墳でも羨道の区画で土器や鉄器が層位的にかつ量的に出土しているし、鉄鏃や刀子以外の馬具類はすべてこの区画から出土している。また何よりも区画の内部の礫上と羨門側の仕切り石上にはある程度広がりを持って炭化物が検出されており、火を使用した痕跡があり葬送儀礼の場が確認できるのである。

羨門側の仕切り石は石室構築当初から配されており、羨道の区画部分での葬送儀礼は追葬のたびに礫を敷き土器を副葬しており、最終的には仕切り石の表面が覆い尽されていた。そして玄門部の仕切り石部分ではなく、羨門側のこの部分で大型の板石を使用した閉塞を行っているということは、区画部分を空間として意識していることになろう。そしてこの閉塞部分の側壁には片側だけではあるが、少し内側に突出した小型の立柱石が配されているのである。この小型立柱石は明瞭な複室構造の前室前門部に見られる立柱石が退化した痕跡器官的なものと言えよう。

北部九州では６世紀中葉以降の首長墓には複室両袖型の横穴式石室が採用されている。香川県内でも前方後円墳消滅以後の首長墳のなかで複室構造をもつものとして、三豊郡大野原町椀貸塚古墳、観音寺



第41図　仕切り石による区画をもつ横穴式石室（1/100）

市鑵子塚古墳、坂出市新宮古墳、坂出市醍醐3号墳がある。すでに消滅してしまったが高松市小山古墳も複室構造を持っていたと言われている。この羨道が区画された単室両袖型横穴式石室は、複室両袖型横穴式石室を築くことは規制されているが、同じ葬送儀礼に組み込まれた階層と捉えられている。

香川県内で単室両袖型横穴式石室で羨道に仕切り石による区画をもつ横穴式石室は北原2号墳のほかに、観音寺市黒島林6号墳、坂出市仏願1号墳、高松市久本古墳、尾崎西遺跡ST−162がある。
仏願1号墳は不明であるが、黒島林6号墳と尾崎西遺跡ST−162からは轡などの馬具が出土している。また久本古墳は石棚をもち、承台付き銅椀が出土するなど副葬品からみると階層的に優位な古墳と言える。北原2号墳第1石室も副葬品からみても同様である。これらは上記の複室両袖型横穴式石室墳を採用した首長層には及ばないがそれに近い階層の古墳と言えよう。

以上のように北原2号墳の第1石室は、石室の床面に北部九州の横穴式石室墳には少ない排水溝が入念に作られている点があるものの、基本的には北部九州型の石室構造を持つものである。

＜第2石室＞

第2石室は土圧で崩壊しており、大部分の石材は落下していた。したがって原位置を保っていたのは基底石と若干の積み上げた石材にとどまる。ここでもまず第2石室の構造を列挙する。

1．玄室の幅は奥壁部分で0.95ｍ、玄門側の幅が1.03ｍで平面形は長方形である。玄室長が1.8ｍであることから、玄室の長さに対する幅の割合＝玄室比は1.82となる。

2．玄室の面積は小さく、副葬品からも単葬用と考えられる。

3．左片袖式の石室で、奥壁は大型の１石で上部に石材を積み上げる。

4．羨道長は2.5ｍで玄室の1.4倍の長さである。

5．羨道は羨門近くで湾曲している。

6．玄門部床面に仕切り石を置いている。

7．副葬品は玄室と玄門部仕切り石の羨道側に納められている。

8．玄室の床面には板石を敷きつめている。

9．閉塞施設は認められなかった。

以上が第２石室の主だった特徴である。３のとおり片袖式の石室であり、大多数が両袖式で占める北部九州型石室とは異なるが、玄門部には畿内型に少ない仕切り石を配置している。閉塞施設は少なくとも北部九州型石室の特徴である板石は使用していない。羨道は特に石材の崩落が激しかったが塊石を積み上げた痕跡も認められなかった。

第２石室は上記２のとおり単葬で玄室面積も小さいものであった。北原２号墳は一墳丘に２基の横穴式石室を築いており、第２石室の位置は墳丘の端にあり、これ以上石室を大きくすると墳丘からはみ出ることになる。墳丘の規模と墓道の方向を合わせることが先に決められているならば、第２石室は築造段階で墳丘の中に納まる程度のものが企画される。この玄室のままで両袖式にすると羨道の幅が狭くなりすぎるため、片袖式として羨道の幅を確保したと考えられる。

また玄室の大きさの割に羨道はしっかりとしている。これは北原２号墳の中心となる第１石室の初葬からやや時間をおいて第２石室に埋葬する必要から、つまり北原２号墳全体からみれば追葬のようなかたちで第２石室に埋葬するために、通路としての羨道を確保したためと考えたい。

以上のことが第２石室が単葬にもかかわらず竪穴系の埋葬施設をとらず、また同じ墳丘内に築かれた石室でありながら第１石室と異なった片袖式を採用した理由とする。

註

(1)泉森皎「双墓に関する二、三の問題について」『藤井祐介君追悼記念　考古学論叢』1980

(2)楠元哲夫「一墳丘内複数横穴式石室墳の諸問題」『舞谷古墳群の研究』奈良県立橿原考古学研究所、財団法人由良大和古代文化研究協会　1994

(3)久保田昇三「古代南海道航路と一墳丘複数横穴式石室墳」『香川考古』第７号　1999

(4)久保田昇三『上母神８号古墳』観音寺市教育委員会　1998

(5)片桐節子『吉田古墳発掘調査報告書』財田町教育委員会　1992

(6)『新編香川叢書　考古篇』1983

(7)阿河鋭二『八坂墳墓群・北山八坂古墳』長尾町教育委員会　1997

(8)田辺昭三・西尾幸則他『東山鳶が森古墳群調査報告書』松山市教育委員会　1981

(9)石川士郎『端華の森古墳』伊予三島市教育委員会　1994

(10)『唐子台遺跡群』今治市教育委員会　1974

(11)(2)に同じ

(12)坂　靖編『寺口千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所　1991

⒀(2)に同じ
⒁田中良之『古墳時代親族構造の研究』柏書房　1995
⒂桜井達彦「頭椎大刀の編年」『考古学ジャーナル』№266　1986
滝瀬芳之「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』№266　1986
大谷晃二「大刀の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館　1996
豊島直博「古墳時代後期における直刀の生産と流通　－近畿地方を中心に－」『考古学研究』第48巻第2号　2001
⒃新納泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号　1983
大谷宏治「階層構造論」『東海の後期古墳を考える』三河古墳研究会　2001
⒄笹川龍一・高橋守『安造田東3号墳発掘調査報告書』満濃町教育委員会　1991
⒅小池寛「中空耳環について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987
辻村純代「耳環考」『古文化談叢』第39集　九州古文化研究会　1997
なお、中空耳環を含めた耳環全般に関して、独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　村上隆氏に御教示を得た。
⒆山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究』1984年度文部省科学研究費奨励研究A　1985
森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』111号　1986
⒇重藤輝行「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会　1999

挿図出典

第39図　1：註(5)文献
2～4：笹川龍一編『史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会　1997
5・6：森下英治『北原3号墳・北原遺跡』香川県教育委員会　1995
7・8：註(7)文献
9：藤井雄三『南山浦古墳群調査報告書』高松市教育委員会　1985
10・11：近藤義郎編『喜兵衛島』喜兵衛島刊行会　1999

第40図　柏原古墳群A－2号墳、柏原古墳群C－8号墳：山崎純男『柏原遺跡群Ⅱ』福岡市教育委員会　1986
広石南古墳群A群4号墳：屋山洋・中村啓太郎『広石南古墳群A群』福岡市教育委員会　1999
アラタ6号墳：田中寿夫『徳永アラタ古墳群』福岡市教育委員会　1980

第41図　上母神8号墳：註(4)文献
吉田4号墳・5号墳：註(5)文献
北山八坂古墳：註(7)文献
東山鳶が森4号墳：註(8)文献

端華の森古墳：註(9)文献

治平谷3号墳：註(10)文献

北原2号墳　土器観察表

遺物番号	遺構名	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外面	内面	焼成	残存量	備考
1	第1石室玄室	杯蓋	14.0	4.2		中:黒色粒・普	外:灰白5Y8/1 内:灰白2.5Y8/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　天井部マメツ	回転ナデ	不良	7/8	
2	第1石室玄室	杯身	12.6	4.4		中:黒色粒・やや多 長石・少	外:灰白5Y8/1 内:灰白5Y8/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	やや不良	7/8	
3	第1石室玄室	杯蓋	12.4	4.5		中:長石・少 黒色粒・普	外:灰白N7/ 2.5Y7/1 内:灰白10YR7/1	回転ヘラ削り状のナデ 回転ナデ　天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	普	ほぼ完形	
4	第1石室玄室	杯身	11.3	3.4		中:長石・ 黒色粒・やや少	灰白N7/	回転ナデ 底部外面ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	7/8	
5	第1石室玄室	杯蓋	12.6	4.4		粗:長石・石英・ 黒色粒・多	外:灰白2.5Y7/1 N7/ 内:灰白2.5Y7/1～7/2	回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	7/8	
6	第1石室玄室	杯身	11.2	3.6		中:長石・ 黒色粒・普	外:灰白2.5Y7/1 N6/ 内:灰白10YR7/1	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ　仕上げナデ	良好	ほぼ完形	
7	第1石室玄室	杯蓋	13.7	4.8		中:長石・ 黒色粒・少	外:灰5Y5/1 灰白5Y7/1 内:灰白2.5Y7/1 黄白2.5Y6/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
8	第1石室玄室	杯身	11.7	4.5		中:黒色粒・やや多	外:灰白7.5Y7/2 N7/ 内:灰白7.5Y7/1 N7/	回転ナデ ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
9	第1石室玄室	杯蓋	11.2	4.4		中:黒色粒・やや多	外:灰白N8/ 青灰2.5Y5/1 内:灰白N8/～N7/	回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
10	第1石室玄室	杯身	9.5	4.0		細:雲母・長石・ 黒色粒・少	外:灰白10Y8/2 内:灰N5/ 灰白N7/	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
11	第1石室羨道	杯蓋	12.6	4.2		中:長石・石英・普	外:灰N4/ 内:青灰5PB5/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	7/8	
12	第1石室羨道	杯身	11.6	4.2		細:長石・少 黒色粒・やや多	外:暗青灰5PB4/1 内:灰N4/	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	
13	第1石室羨道	杯蓋	14.8	4.2		細:黒色粒・少	外:灰N6/ 内:灰N5/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	7/8	
14	第1石室羨道	杯身	13.2	4.2		細:長石・少	外:灰N6/ 内:灰N5/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	7/8	
15	第1石室玄室	杯蓋	13.2	4.3		中:石英・ 黒色粒・普	灰白5Y8/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	不良	完形	天井部と口縁部の境に沈線
16	第1石室玄室	杯蓋	13.8	4.3		中:長石・ 黒色粒・やや少	外:灰N6/～N5/ 内:灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　一部強いナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
17	第1石室玄室	杯蓋	14.4	4.1		中:長石・少	外:青灰5B5/1 明オリーブ灰2.5GY7/1 内:灰白7.5Y7/2 灰7.5Y5/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	ほぼ完形	
18	第1石室玄室	杯蓋	13.4	4.0		中:黒色粒・やや多	外:灰白2.5Y8/2 N7/ 内:灰白N7/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　天井部マメツ	回転ナデ	良好	7/8	
19	第1石室玄室	杯蓋	13.2	3.9		粗:長石・多	外:灰白2.5Y7/1 青黒5PB2/1 内:灰5Y5/1	回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	ほぼ完形	天井部内面に同心円スタンプ
20	第1石室玄室	杯蓋	12.2	4.1		中:黒色粒・ 石英・やや多	外:灰白2.5Y8/1 灰N5/ 内:灰白2.5Y7/1	回転ナデ　天井部ヘラ切り未調整 天井部マメツ	回転ナデ	不良	7/8	
21	第1石室玄室	杯蓋	12.2	3.9		中:長石・やや多	外:灰N6/ 内:灰N5/～N4/	回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
22	第1石室玄室	杯蓋	10.5	3.8		中:長石・石英・普	外:灰N5/ 内:灰N5/～N4	強い回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	強い回転ナデ	良好	7/8	
23	第1石室羨道	杯蓋	14.0	3.7		中:長石・ 黒色粒・普	外:灰N6/ 内:明紫灰5P7/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ　天井部ヘラ切り痕跡 窯壁が一部付着	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
24	第1石室羨道	杯蓋	13.1	4.5		中:長石・ 黒色粒・普	外:灰白N8/ 内:青灰5PB6/1 青灰5B6/1	回転ナデ 天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	口縁部強いナデ
25	第1石室羨道	杯蓋	14.0	4.9		中:長石・ 石英・やや多	外:灰白2.5Y7/1 内:灰褐7.5YR5/2	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ　天井部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
26	第1石室羨道	杯蓋	13.8	2.7(現存)		細:長石・少	灰N7/	回転ナデ	回転ナデ	良好	1/8	
27	第1石室羨道	杯蓋	11.8	3.6(現存)		細:長石・少	外:灰N5/ 内:灰N6/	回転ナデ	回転ナデ	良好	1/6	
28	第1石室玄室	杯身	12.8	4.6		細:長石・ 石英・少	外:青灰5B5/1 5Y5/1 内:オリーブ灰5GY5/1	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形 (立上り一部欠)	

遺物番号	遺構名	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外面	内面	焼成	残存量	備考
29	第１石室玄室	杯身	11.9	3.9		中：長石-やや多	外：灰白N7/ 明青灰5PB3/1 内：灰N5/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	7/8	
30	第１石室玄室	杯身	12.0	3.9		細：長石-少	灰白N7/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形	
31	第１石室玄室	杯身	11.6	4.1		細：長石・ 黒色粒-少	外：灰白5Y8/1 灰N6/ 内：灰白N7/	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形	
32	第１石室玄室	杯身	10.8	3.6		中：長石-やや多	外：灰N7/～N6/ 灰白5Y8/2 内：灰N6/～N5/	底部ヘラ切り未調整 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	
33	第１石室玄室	杯身	長径10.7 短径9.3	4.1		細：黒色粒-やや多	外：灰白2.5Y8/2 灰N6/ 内：明青灰5PB7/1	回転ナデ 底面外面ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
34	第１石室玄室	杯身	10.7	4.2		中：長石-普	外：灰N6/～N5/ 内：灰白N7/～N6/	回転ナデ　強いナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
35	北原古墳試掘 ３トレ第１石室羨道部	杯身	12.4	4.2		中：長石・ 石英-やや多	灰N6/	回転ヘラ削り（ロクロ左回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	底部内面同心円スタンプ
36	第１石室羨道	杯身	12.6	3.7		中：長石-やや多	外：明青灰5PB7/1 内：灰白10YR7/1	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
37	第１石室羨道	杯身	11.8	3.7		中：長石-普	外：灰N6/ 内：灰白N7/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	1/2	
38	第１石室羨道	杯身	10.9	4.7		細：長石-少 外面粗い	外：灰白N7/ 内：明青灰5PB7/1	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ	良好	完形	
39	北原古墳試掘 ３トレ第１石室羨道部	杯身	12.5	2.5（現存）		細：長石-少	灰白5Y7/	回転ナデ	回転ナデ	良好	1/6	
40	第１石室羨道	（高杯）蓋	14.9	4.3		中：黒色粒-やや多	外：淡黄2.5Y8/3 褐灰7.5YR4/1 内：明青灰5PB7/1	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	天井部と口縁部の境に稜
41	北原古墳試掘 ３トレ第１石室羨道部	（高杯）蓋	14.3	4.5		細：長石-きわめて少	灰白N7/～灰N4/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
42	第１石室羨道	（高杯）蓋	20.2	6.9		粗：黒色粒・ 石英-多	外：灰白N8/～N7/ 褐白5YR6/～5YR5/ 内：灰白10YR7/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	7/8	天井部と口縁部の境、天井部にナデによる凹線が巡る
43	第１石室羨道	高杯	19.0	13.2	14.6	中：長石・ 黒色粒-普	外：黄灰2.5Y6/～2.5Y4/ 内：灰白10YR7/1～10YR5/1	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ　凹線１条	回転ナデ	良好	ほぼ完形	杯部歪む、脚部の屈曲部にナデによる凹線が１条巡る
44	第１石室羨道	高杯	10.2	9.8	8.2	長石-少 黒色粒-多	外：灰白N7/ 灰5Y4/1 内：灰白N7	回転ナデ 弱いヘラ削り（ロクロ右回転）	回転ナデ　脚部にシボリ目	良好	完形	杯部に稜線２条　脚部に沈線１条
45	第１石室羨道	高杯	12.6	8.3		中：石英・ 黒色粒-やや多	外：灰白N8/ 内：灰白5Y8/1	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	やや不良	完形	
46	第１石室羨道	高杯	11.9	12.6	10.8	細：長石-少	灰N6/	回転ナデ　沈線２条 板の小口による圧痕文	回転ナデ	良好	7/8 杯部 1/8 欠	向かい合う２対の長方形２段透かし
47	北原古墳試掘 ３トレ第１石室羨道部	高杯	10.8	14.1	11.0	中：長石-普	灰N6/～N5/	回転ヘラ削り（ロクロ左回転） 回転ナデ　杯部沈線２条 脚部沈線２条と１条	回転ナデ	良好	ほぼ完形	長方形２段透かしが脚部の向かい合う位置に２箇所。透かしの軸は傾く
48	第１石室羨道	高杯		14.4（現存）	12.4	中：長石-普	青灰5B5/1 灰褐5YR4/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	脚部の2/3	長脚２段３方透かし穴
49	第１石室羨道	高杯	14.2	10.2	11.4	中：長石・ 黒色粒-普	外：灰白N8/ 紫灰5P6/1 内：灰白N8/ 紫灰5P5/1	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ 杯部脚部それぞれに凹線１条	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
50	北原古墳試掘 ３トレ第１石室羨道部	高杯			13.1	細：石英-少	灰N5/ 暗灰N3/	回転ナデ	回転ナデ	良好	1/6	
51	第１石室羨道	平瓶ミニチュア	4.6	8.3		中：長石-少	灰N6/	回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	肩部に形骸化した把手２個 肩部にハケ目状の板ナデ
52	第１石室羨道	平瓶	14.7	9.4		中：長石-やや多	外：灰白5Y7/1 灰N6/ 内：黄灰2.5Y6/1	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ	回転ナデ	良好	2/3	
53	第１石室羨道	平瓶	5.9	13.5		細：長石-少	外：灰N6/ 暗青灰5B4/1 内：灰N6/～N4/	回転ナデ	回転ナデ	良好	口縁部3/4 体部ほぼ完形	口縁部歪む

遺物番号	遺構名	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外面	内面	焼成	残存量	備考
54	第１石室羨道	平瓶	7.3	13.1		細:長石・ 石英-少	灰N6/	回転ナデ 体部下半回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 体部上半カキ目-ナデ	回転ナデ	良好	完形	
55	第１石室羨道	平瓶	5.4	13.5	6.9	中:長石・ 黒色粒-普	灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 体部カキ目	回転ナデ	良好	ほぼ完形	体部の円孔ふさぐ
56	第１石室玄室	壺	14.6	18.1(現存)		中:長石-普	外:青灰5PB5/1 内:灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転)	回転ナデ	良好	1/4	
57	第１石室羨道	壺		5.6(現存)		中:長石・ 黒色粒-普	外:灰N7/ 内:明青灰5PB7/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	底部1/2	
58	第１石室羨道	台付壺	14.8	25.6	12.8	細:長石-少 黒色粒-やや多	外:灰白10Y8/1～8/2 2.5Y8/2 内:明青灰5PB7/1 淡黄2.5Y8/4	回転ナデ 体部下半にカキ目	回転ナデ	良好	ほぼ完形 口縁部1/6欠	
59	第１石室羨道	甕	16.6	27.6		中:黒色粒-普	外:灰白2.5Y8/1～7/1 黄灰2.5Y6/1 内:灰白10YR8/1	回転ナデ タタキ-カキ目 底部付近タタキ-ヘラミガキ	回転ナデ　当て具痕	やや不良	ほぼ完形	
60	第１石室羨道	横瓶	長径13.0 短径10.6	28.6		中:長石-少 黒色粒-普	灰白2.5Y8/1 明黄褐10YR7/6	回転ナデ　タタキ	回転ナデ　当て具痕	不良	ほぼ完形	体部長楕円形
127	第２石室玄室	杯蓋	14.8	4.5		細:長石-ごく少	灰10Y5/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	ほぼ完形	
128	第２石室玄室	杯身	13.6	4.9		細:長石-少	灰N5/	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
129	第２石室玄室	杯蓋	14.4	3.9		中:黒色粒-やや多	外:灰N5/ 内:灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
130	第２石室玄室	杯身	12.4	4.5		細:黒色粒-少	灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	底部に回転ヘラ削りを施すがヘラ切り痕がある
131	第２石室玄室	杯蓋	13.7	3.5		中:長石-普	外:青灰5B5/1 内:青灰5B6/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　ヘラ切り痕残る	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形	口縁部外面板状工具で調整　全体に厚手
132	第２石室玄室	杯身	11.3	4.3		中:長石・黒色粒-普 ３～５ミリ大の石 数個入る	外:青灰5B5/1 内:オリーブ灰2.5GY6/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　強いナデ 回転ナデ-板ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形	
133	第２石室玄室	杯蓋	15.0	4.7		中:長石・ 黒色粒-やや少	灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	口縁部内面に段
134	第２石室玄室	杯身	13.3	4.3		中:長石-普	外:灰N6/ 内:灰10Y6/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	ほぼ完形	
135	第２石室玄室	杯蓋	14.9	4.4		細:長石-少	外:灰N6/ 内:青灰5PB6/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ　強いナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	ほぼ完形	
136	第２石室玄室	杯身	12.4	4.2		細:長石-少	灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	7/8	
137	第２石室玄室	杯蓋	13.5	3.5		粗:長石・石英・ 黒色粒-多	外:暗灰N3/　灰N6/ 内:灰N5/	天井部ヘラ切り未調整 回転ナデ　天井部マメツ	回転ナデ	やや不良	完形	
138	第２石室玄室	杯身	11.5	4.2		粗:長石・ 黒色粒-多	外:暗灰黄2.5Y4/2 内:暗青灰5PB4/1	回転ナデ 底部ヘラ切り未調整	回転ナデ	やや不良	7/8	口縁部一部歪む　底部火膨れ著しい
139	第２石室玄室	杯蓋	15.0	5.0		中:石英・ 黒色粒-やや多	灰白5Y8/1	回転ナデ　マメツ	回転ナデ　マメツ	不良	ほぼ完形	
140	第２石室玄室	杯身	14.0	4.8		中:石英-やや多	外:灰白2.5Y8/1 内:灰白7.5Y8/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　マメツ	回転ナデ　マメツ	不良	3/4	
141	第２石室玄室	杯蓋	14.6	4.0		中:長石・石英-普	オリーブ灰2.5GY6/1	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ　強いナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	ほぼ完形	
142	第２石室玄室	杯身	13.0	3.9		細:長石-ごく少	灰N6/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	7/8	
143	第２石室羨道	杯蓋	14.8	4.0		中:長石-普	灰10Y5/1	回転ヘラ削り(ロクロ左回転) 回転ナデ	回転ナデ　仕上げナデ	良好	完形	
144	第２石室羨道	杯身	12.6	4.2		細:長石-少	外:青灰5PB5/1 内:灰白N7/	回転ヘラ削り(ロクロ右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	完形	
145	第２石室羨道	杯蓋	12.4	4.2		中:長石・ 黒色粒-普	外:明青灰5PB7/1 内:灰白N7/	回転ヘラ削り (ロクロ左回転後右回転) 回転ナデ	回転ナデ	良好	7/8	天井部にロクロ左回転の回転ヘラ削りの後に ロクロ右回転の回転ヘラ削りを仕上げに行う
146	第２石室羨道	土師器・ 把手付椀	9.8	7.2		中:石英-やや少	橙5YR6/8	指押さえ　マメツ	指押さえ　マメツ	良好	ほぼ完形	把手が片側につく
147	第２石室羨道	甕	22.4			中:長石-普	外:灰N4/　内:青灰5B6/1	回転ナデ　タタキ	回転ナデ　体部当て具痕	良好	口縁部1/8	

遺物番号	遺構名	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外面	内面	焼成	残存量	備考
148	第２石室羨道	提瓶	8.4	21.5		中：長石・ 黒色粒・やや少	首：灰オリーブ7.5Y6/2 体：灰5Y6/1	回転ナデ　体部カキ目	回転ナデ	良好	完形	体部に火膨れ
149	第２石室玄室	提瓶	7.3	20.9		中：長石・普 石英・やや少	灰N4/～N6/	回転ヘラ削り（ロクロ右回転） 回転ナデ　カキ目・ナデ 体部にカキ目、指押さえ	回転ナデ	良好	ほぼ完形 口縁部1/2欠	
158	A区盛土層	壺	14.2	15.3		中：長石・普	灰白5Y7/1	体部下半回転ヘラ削り（ロクロ左回転）回転ナデ　カキ目　ナデ	回転ナデ	良好	体部1/3欠	

北原2号墳　鉄器観察表

遺物番号	遺構名	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
61	第1石室玄室	刀子	9.4	1.4	1.2	
62	第1石室玄室	刀子	19.4	1.8	0.7	
63	第1石室玄室	刀子	6.5	1.3	0.4	茎部
64	第1石室玄室	刀子	7.5	1.1	0.3	茎と身の境界不明瞭
65	第1石室玄室	刀子	4.4	0.8	1.0	
66	第1石室玄室	鎬	2.2	0.7(現存)	0.3	
67	第1石室羨道	鍔	5.3	5.8(全体幅)	0.6	大刀の鍔　無窓式
68	第1石室玄室	鉄鏃	6.3	1.8	0.4	鏃身～茎部　平根　柳葉
69	第1石室羨道梱石下部	鉄鏃	5.1	1.9	0.4	鏃身　平根系柳葉式
70	第1石室玄室	鉄鏃	4.4	2.0	0.3	鏃身　平根　長三角形
71	第1石室玄室	鉄鏃	5.2	1.4	0.5	鏃身　柳葉　断面片丸
72	第1石室玄室	鉄鏃	4.2	1.0	0.5	鏃身　長頸　柳葉
73	第1石室玄室	鉄鏃	5.4	1.5	0.5	長頸腸抉柳葉式
74	第1石室玄室	鉄鏃	15.2	0.9	0.4	長頸片刃箭式　棘箆被
75	第1石室羨道	鉄鏃	1.8	1.9	0.3	鏃身　雁股式
76	第1石室羨道	鉄鏃	5.1	0.9	0.4	長頸鑿箭式
77	第1石室玄室	鉄鏃	10.3	0.7	0.4	長頸式
78	第1石室玄室	鉄鏃	6.6	0.9	0.5	箆被部～茎部
79	第1石室玄室	鉄鏃	8.0	0.8	0.5	
80	第1石室玄室	鉄鏃	5.5	0.5	0.4	長頸式　棘箆被
81	第1石室玄室	鉄鏃	2.7	0.8	0.5	箆被部～茎部
82	第1石室玄室	鉄鏃	4.2	0.7	0.5	箆被部～茎部
83	第1石室玄室	鉄鏃	3.3	1.0	0.5	箆被部～茎部

遺物番号	遺構名	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
84	第１石室玄室	鉄鏃	4.0	0.7	0.5	箆被部～茎部
85	第１石室玄室	鉄鏃	3.1	0.6	0.4	茎部
86	第１石室玄室	鉄鏃	4.0	0.5	0.4	茎部分
87	第１石室玄室	鉄鏃	4.1	0.5	0.4	茎部
88	第１石室玄室	鉄鏃	2.5	0.4	0.4	茎先端部
89	第１石室玄室	鉸具	7.4	4.6(全体幅)	0.6	刺金は輪金基部に巻き付ける
90	第１石室羨道	鉸具	7.0	2.0(残存全体)	0.6	刺金と輪金の一部
91	第１石室羨道	鉸具	8.4	3.3*(全体幅)	0.7	兵庫鎖の先端に取り付く
92	第１石室羨道	鉸具	5.5	4.2(全体幅)	0.6	兵庫鎖の先端に取り付く
93	第１石室羨道	鉸具	6.8	0.7	0.7	刺金部分
94	第１石室羨道	雲珠か辻金具	5.8	5	0.5	鉢部、宝珠飾の剥離痕
95	第１石室羨道	雲珠か辻金具の脚	2.9	2.2	0.4	１鋲半円形の脚
96	第１石室羨道	雲珠か辻金具の脚	2	1.8*	0.4	１鋲半円形
97	第１石室羨道	飾金具	3.6	1.7	0.3	２鋲長半円形　鉄地金銅張
98	第１石室羨道	鉸具・兵庫鎖	6.0	3.0(全体幅)	0.5	鉸具の基部に兵庫鎖が取り付く
99	第１石室羨道	兵庫鎖	4.5	0.8	0.7	
100	第１石室羨道	兵庫鎖	4.3	0.8	0.6	
101	第１石室羨道	兵庫鎖	4.3	1.1	1.0	
102	第１石室羨道	兵庫鎖	2.9	0.8	0.7	
103	第１石室羨道	釣針	2.5	0.6	0.4	
150	第２石室玄室	鉄鏃	10.4	2.4	0.4	平根系圭頭形
151	第２石室玄室	鉄鏃	7.0	2.7(復元)	0.4	鏃身　平根系圭頭形
152	第２石室玄室	鉄鏃	7.1	0.9	0.5	箆被部～茎部　棘箆被

遺物番号	遺構名	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
153	第2石室玄室	鉄鏃	6.3	0.6	0.5	箆被部～茎部
154	第2石室玄室	鉄鏃	3.1	0.7	0.4	箆被部
155	第2石室玄門部羨道側	鉄鏃	3.1	0.5	0.4	箆被部
156	第2石室羨道	鉄鏃	7.7	0.7	0.4	箆被部～茎部　長頸式　円形輪状箆被
157	第2石室玄室	刀子	12.0	1.2	0.3	関鈍い

北原2号墳　耳環観察表

遺物番号	遺構名	器種	外径(cm)		断面径(cm)		重量(g)	材質・構造	備考
			上下	左右	上下	左右			
104	第1石室玄室	耳環	2.2	2.2	0.4	0.4	4.29	中実銅芯金薄板巻	
105	第1石室玄室	耳環	2.2	2.2	0.4	0.4	4.03	中実銅芯金薄板巻	
106	第1石室玄室	耳環	2.0	2.0	0.4	0.4	3.85	中実銅芯銀薄板巻	
107	第1石室玄室	耳環	2.0	2.1	0.4	0.4	3.53	中実銅芯銀薄板巻	
108	第1石室玄室	耳環	2.6	2.7	0.5	0.5	7.73	中実銅芯銀薄板巻	
109	第1石室玄室	耳環	2.6*	2.6	0.4	0.4	3.05	中実銅芯銀薄板巻	
110	第1石室玄室	耳環	2.4	2.7	0.5	0.5	4.18	中実銅芯銀薄板巻	
111	第1石室玄室	耳環	2.6	2.7	0.5	0.5	10.25	中実銅芯銀薄板巻	
112	第1石室玄室	耳環	2.8	3.1	0.7	0.8	21.68	中実銅芯銀薄板巻	
113	第1石室玄室	耳環	2.9	3.2	0.8	0.8	23.31	中実銅芯銀薄板巻	
114	第1石室玄室	耳環	2.8	2.8	0.5	0.5	13.03	中実鉛芯	
115	第1石室玄室	耳環	2.8	3.0	0.7	1.0	5.36	中空無芯銀薄板	開口部貼り付け
116	第1石室玄室	耳環	2.7	2.9	0.6	0.9	4.51	中空無芯銀薄板	開口部貼り付け
117	第1石室玄室	耳環	2.6*	2.8	0.6	0.9	3.04	中実銅芯銀薄板巻	開口部貼り付け
118	第1石室玄室	耳環	2.8	2.8	0.6	0.9	4.06	中実銅芯銀薄板巻	開口部貼り付け
119	第1石室玄室	耳環	1.9	2.0	0.2	0.2	1.87	中実銀	細環
120	第1石室玄室	耳環	2.0	2.0*	0.2	0.2	1.78	中実銀	細環

*は現存部分での計測値

北原2号墳　玉類観察表

遺物番号	遺構名	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	備考
121	第1石室玄室	空玉	8*	15	3	1.11	銀	黒灰	下半分欠損
122	第1石室玄室	小玉	3	3	1	0.05	ガラス	青	
123	第1石室玄室	小玉	4	3	1	0.07	ガラス	淡緑	
124	第1石室玄室	小玉	3.5	4	1	0.07	ガラス	緑	
125	第1石室玄室	小玉	3	4	1	0.06	ガラス	緑	
126	第1石室玄室	小玉	2	4	1	0.06	ガラス	緑	

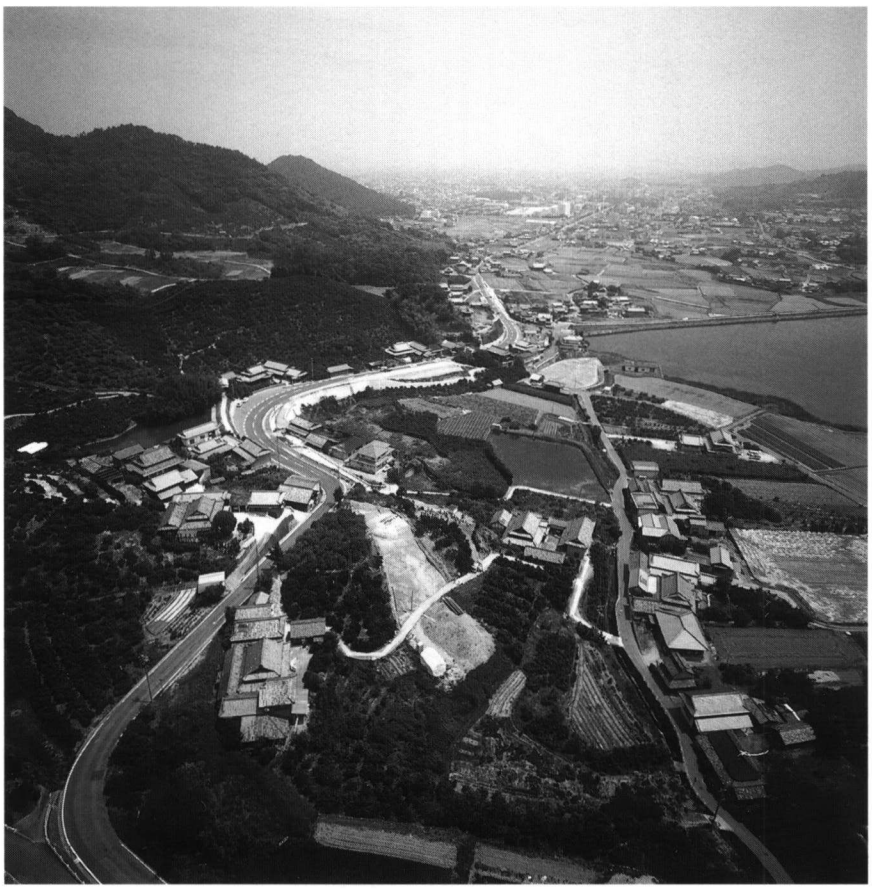
北原遺跡　土器観察表

遺物番号	遺構名	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外面	内面	焼成	残存量	備考
159	Ⅰ区SH01	弥・壺	11.9	2.2		中:長石・石英・角閃石-やや少	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	ナデ　凹線1条	ナデ	良好	1/10	
160	Ⅰ区SH01	弥・壺	18.2			中:長石・石英-普	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ　凹線3条	ナデ	良好	1/10	
161	Ⅰ区SH01	弥・壺				中:長石・石英-普	外:橙2.5YR6/6 内:明赤褐2.5YR5/6	ハケ目 板状工具による圧痕文	ナデ	良好	1/10	
162	Ⅰ区SH01	弥・甕				細:長石・石英-少	にぶい橙7.5YR6/4	ナデ	ナデ	良好	1/10	
163	Ⅰ区SH01	弥・甕				細:石英-多	オリーブ黒5Y3/2	マメツ	マメツ	不良	1/10	
164	Ⅰ区SH01	弥・甕	10.6	1.6		細:長石・金雲母-少	にぶい黄橙10YR7/5	ナデ	ナデ	良好	1/10	
165	Ⅰ区SH01	弥・甕				細:長石・石英-少	にぶい赤褐5YR5/4	ナデ　凹線3条	ナデ	良好	1/10	
167	Ⅰ区SK01	弥・壺				中:長石・石英-普	外:明赤褐5YR5/6 内:橙2.5YR6/8	ナデ　凹線3条	マメツ	良好	1/10	
168	Ⅰ区SK01	弥・壺				粗:長石・石英-多	外:橙5YR6/8 内:明赤褐2.5YR5/8	ナデ 凹線4条後にヘラ描文3条	ナデ、板状工具の小口部分による圧痕文	良好	1/10	
169	Ⅰ区SK01	縄・深鉢				中:長石・石英-普	黄褐10YR5/8	ナデ	ナデ	良好	1/10	波状口縁　沈線による文様
170	Ⅰ区SP04	弥・壺			14	粗:長石・石英-多	にぶい黄褐10YR6/3 黒褐2.5Y3/1	ナデ　ハケ目	指押さえ	良好	底部1/8	
171	Ⅰ区SX01	弥・甕				中:石英-やや多	外:橙5YR6/8 内:褐灰7.5YR5/1	ナデ　凹線2条	マメツ	良好	1/10	
172	Ⅰ区南西部黒色土	弥・甕				中:長石-普	橙5YR6/6	ナデ　凹線3条	ナデ	良好	1/10	
173	Ⅰ区南西部黒色土	弥・甕	26.8			中:長石・石英-普	外:明褐7.5YR5/8 内:橙5YR6/6	ナデ　凹線3条	ナデ	良好	1/10	
174	Ⅰ区南西部黒色土	弥・甕	26.8			中:長石・石英-普	外:橙5YR6/6 内:橙5YR6/8	ナデ　凹線2条	ナデ	良好	1/10	
175	Ⅰ区南西部黒色土	弥・高杯				中:長石・石英・金雲母-普	外:褐灰10YR5/1 内:橙5YR6/6	ナデ	ナデ　ヘラ削り	良好	1/10	
176	Ⅰ区南西部黒色土	弥・甕			7.2	中:長石・石英-やや少	外:橙5YR6/6 内:にぶい黄灰10YR6/3	ナデ　ヘラミガキ	板ナデ(ハケ目状)	良好	1/6	

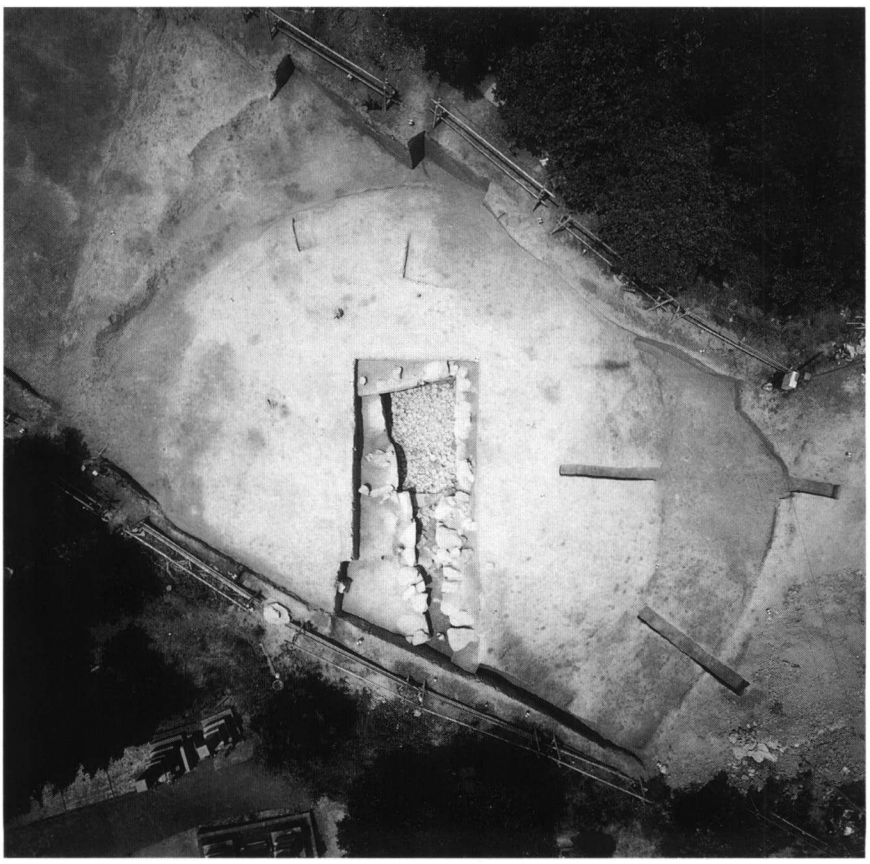
北原 2 号墳調査前（北から）

北原 2 号墳・北原遺跡調査前遠景（南から）

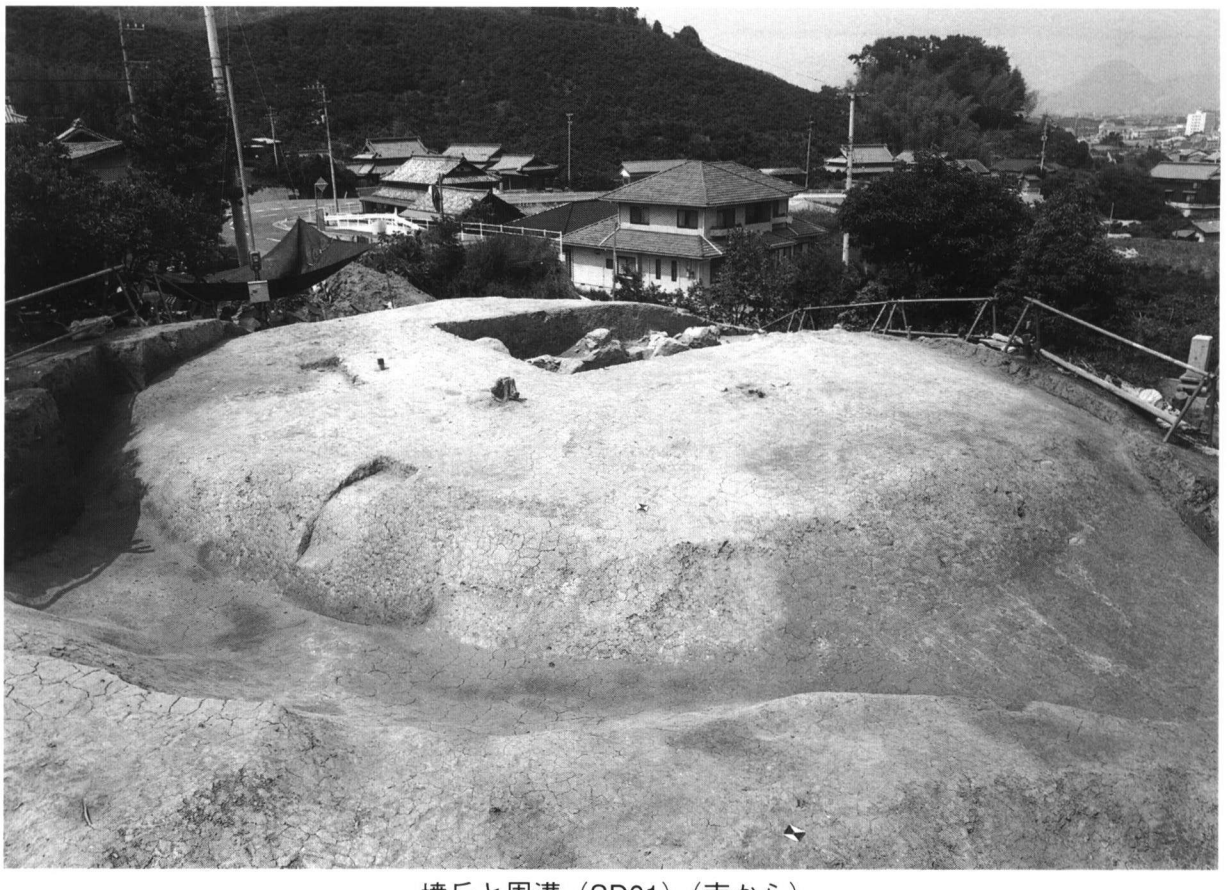
図版 2



北原 2 号墳・北原遺跡遠景（南から）



北原 2 号墳全景と第 1 石室（東から）



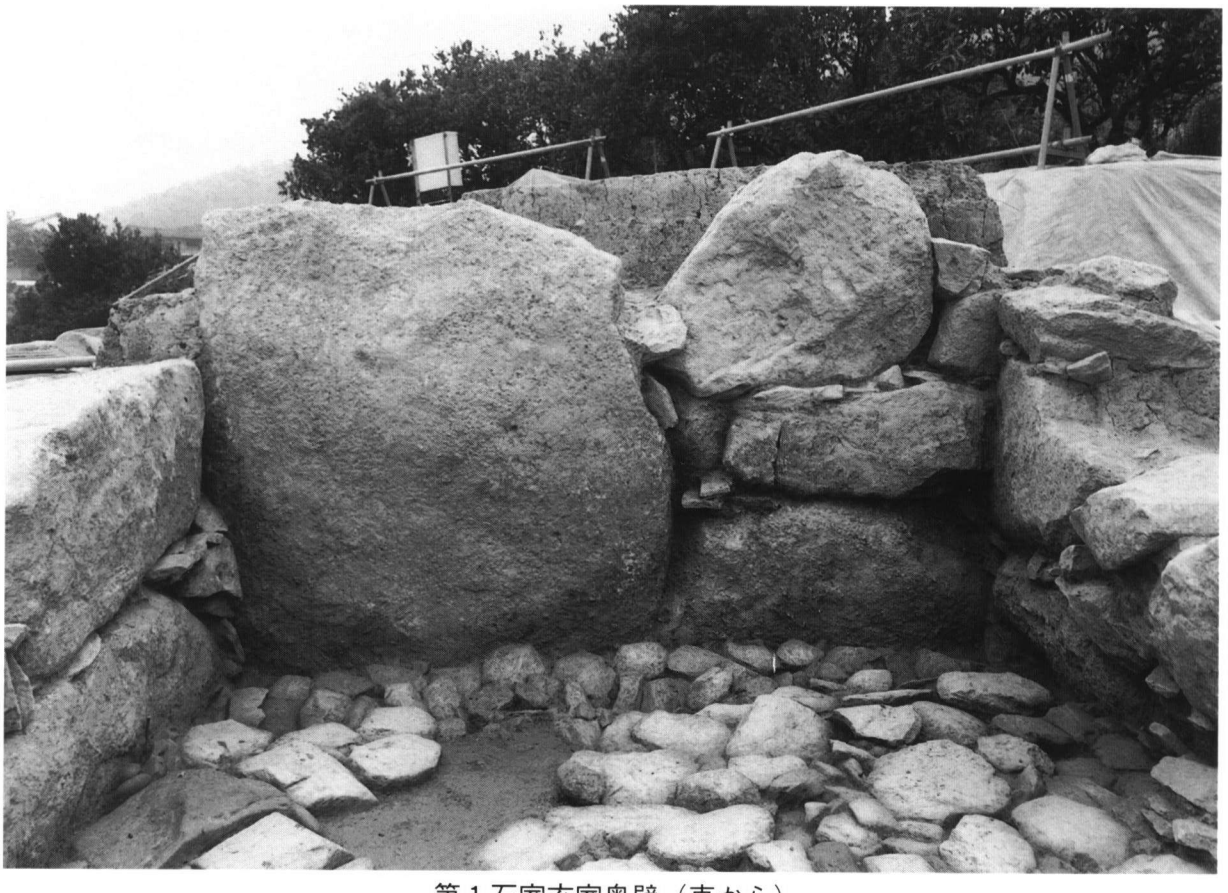
墳丘と周溝（SD01）（南から）

北側墳端部（東から）

図版 4

周溝（SD01）土層断面（北西から）

第１石室、第２石室全景（東から）



第 1 石室玄室奥壁（東から）

第 1 石室玄室左（北）側壁（南から）

図版 6

第 1 石室玄室右（南）側壁（北から）

第 1 石室玄室袖部（西から）

第 1 石室羨道左（北）側壁（南西から）

第 1 石室羨道右（南）側壁（北西から）

図版 8

第 1 石室羨道閉塞施設（南から）

第 1 石室羨道閉塞石（西から）

第 1 石室玄室床面（南から）

第 1 石室玄室下部礫面（東から）

図版10

第１石室玄室遺物出土状況（南から）

第１石室玄室奥壁部分耳環・刀子出土状況（東から）

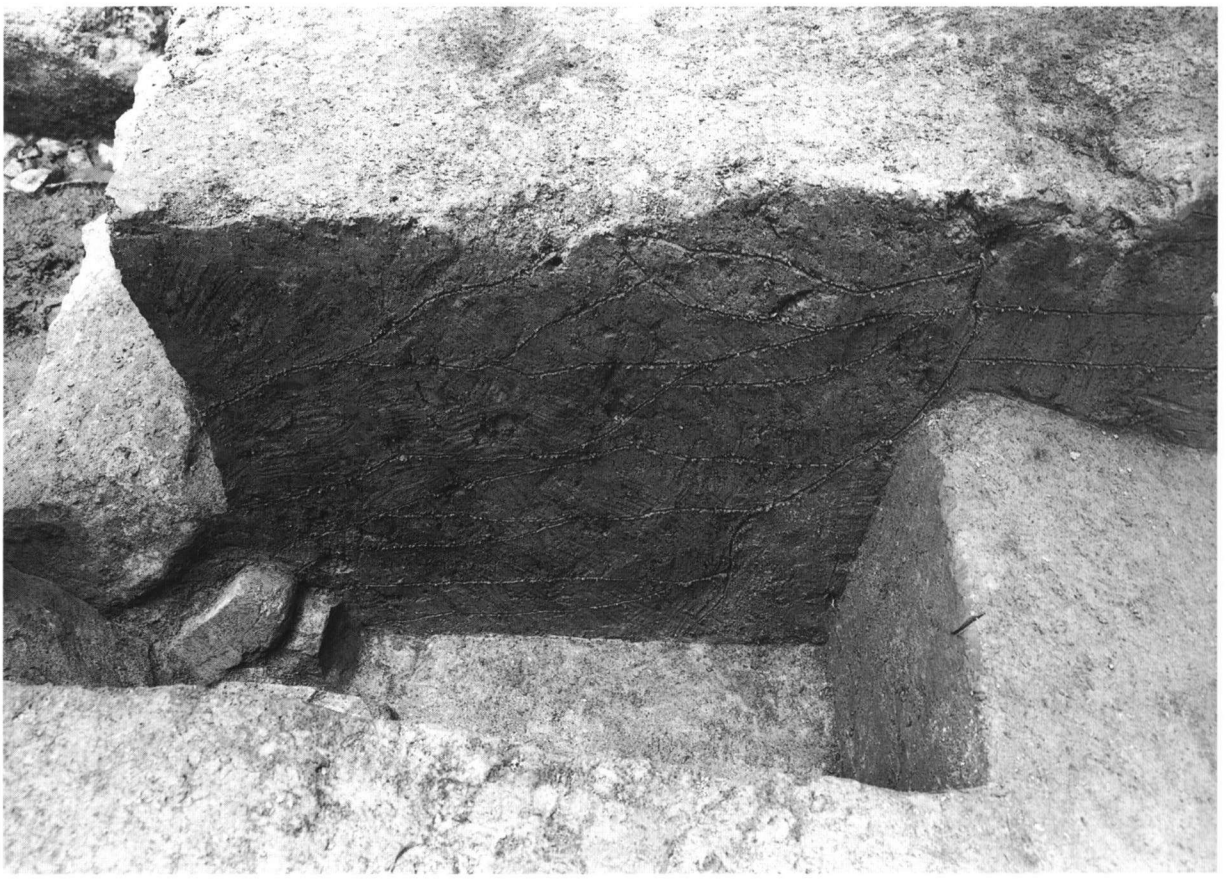
第１石室羨道仕切り石間遺物出土状況（南から）

第１石室羨道羨門部遺物出土状況（東から）

図版12

第１石室玄室排水溝（東から）

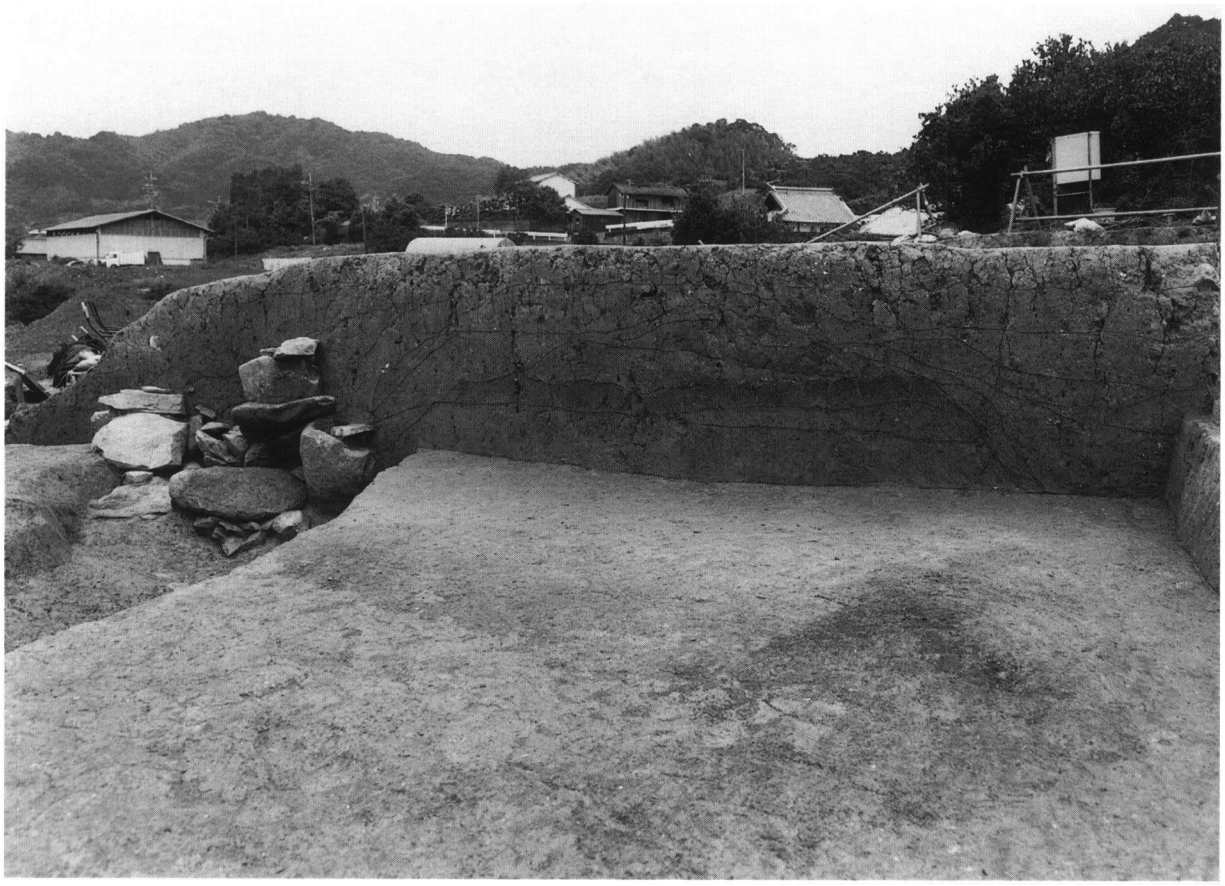
第１石室玄室排水溝断面（東から）



第１石室玄室北側墓壙断面（東から）

第１石室完掘状況・墓壙（西から）

図版14



第１石室～第２石室間の土層と墓壙断面（東から）

第２石室玄室奥壁（東から）

第２石室玄室左（北西）側壁（南東から）

第２石室玄室右（南東）側壁（北西から）

図版16

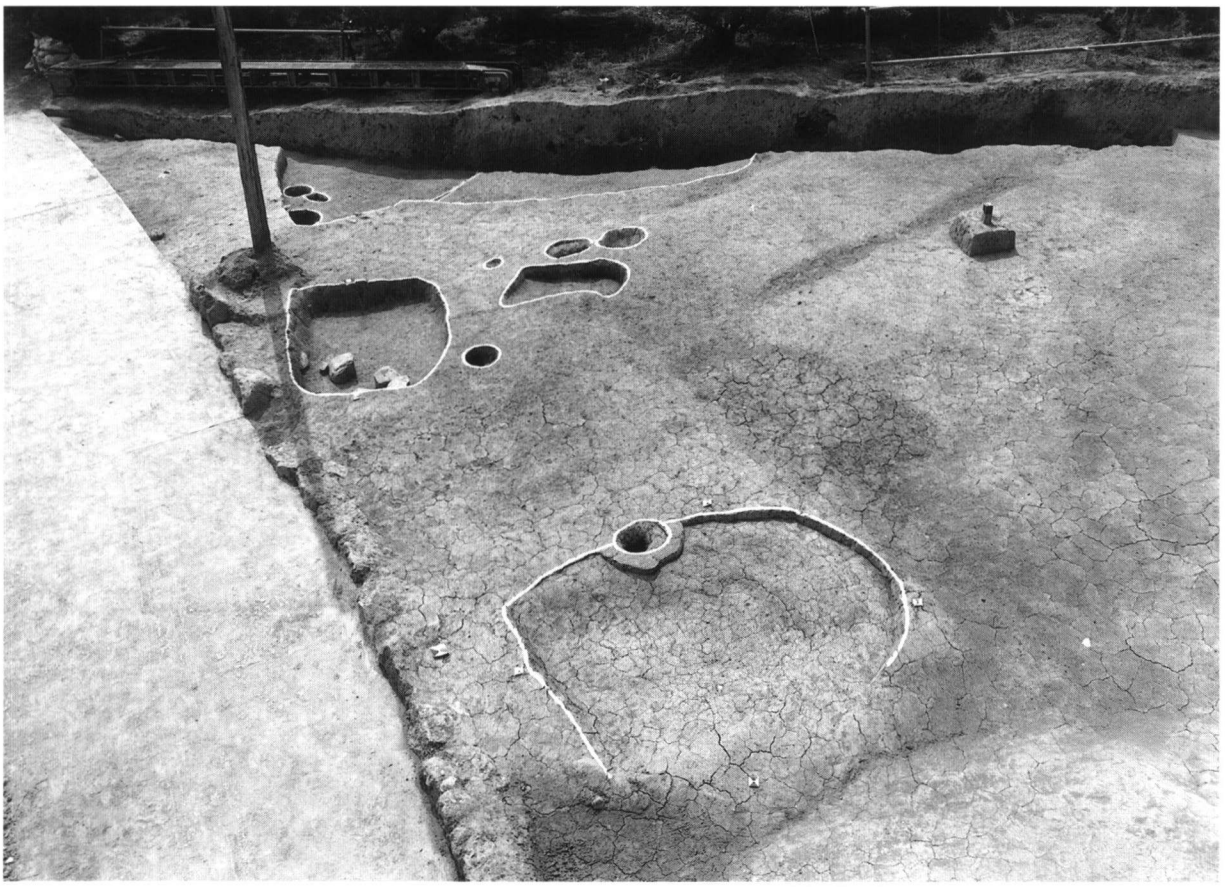
第２石室玄室遺物出土状況（南東から）

第２石室羨道（北東から）

第２石室墓道（西から）

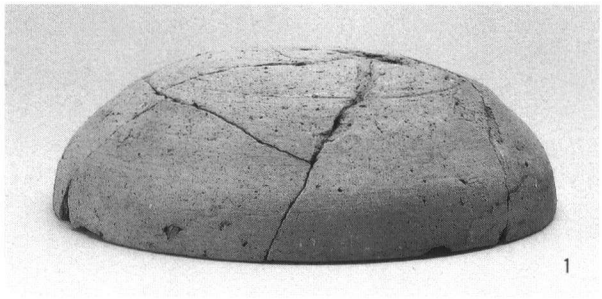
第２石室完掘状況・墓壙（東から）

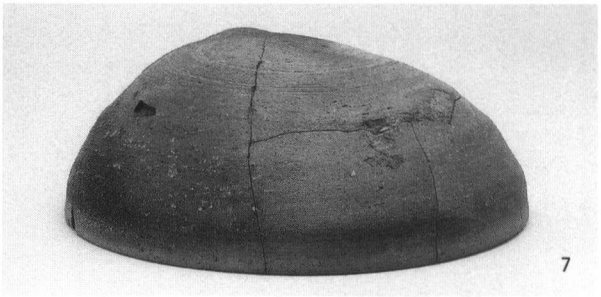
図版18

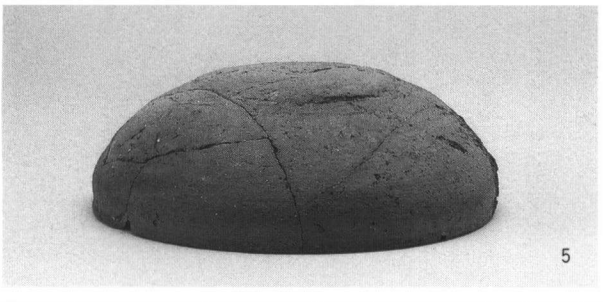


北原遺跡遺構群（東から）

北原遺跡竪穴住居跡（SH01）（北西から）

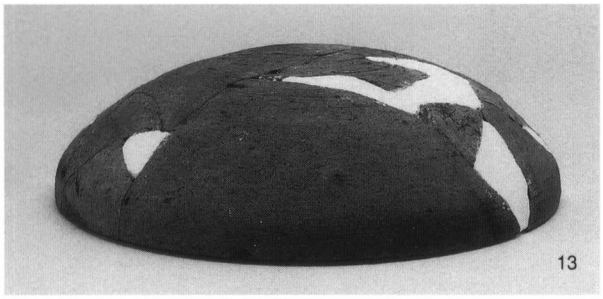


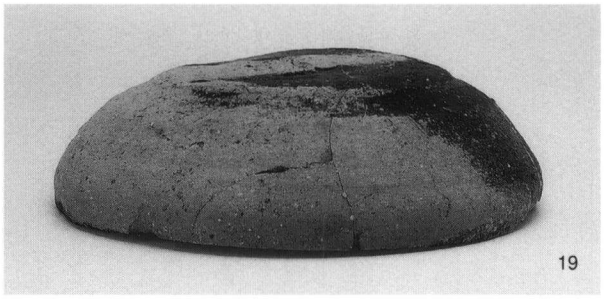




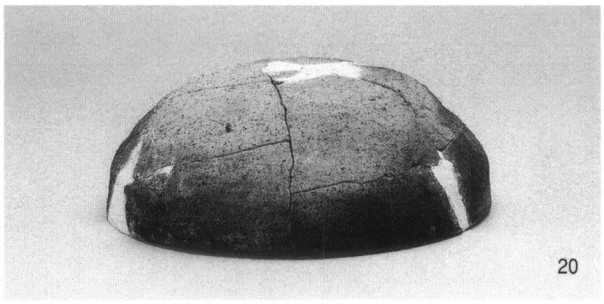
第１石室出土遺物(1)

図版20

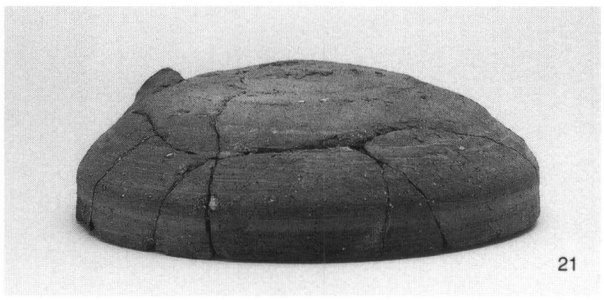

13


19

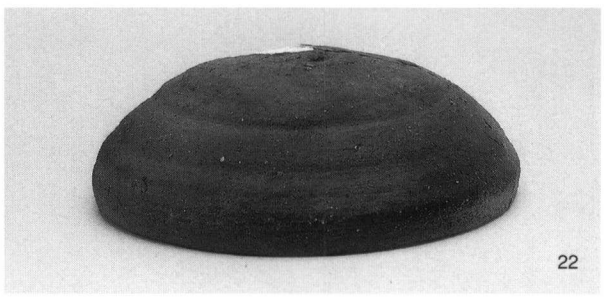
14


20

15

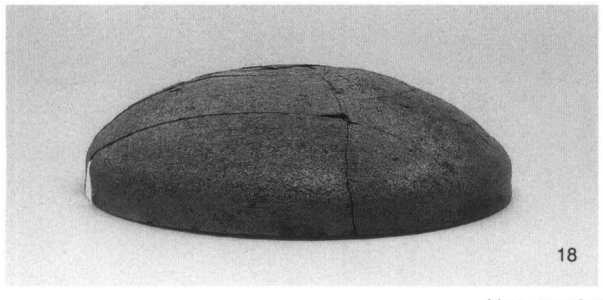

21

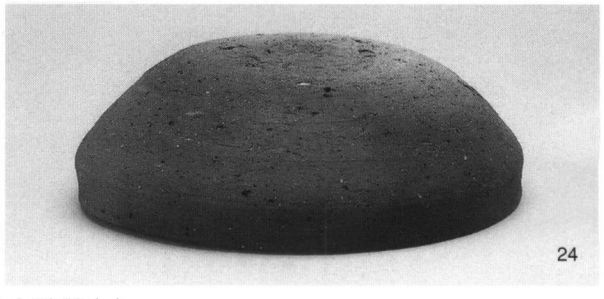
16


22

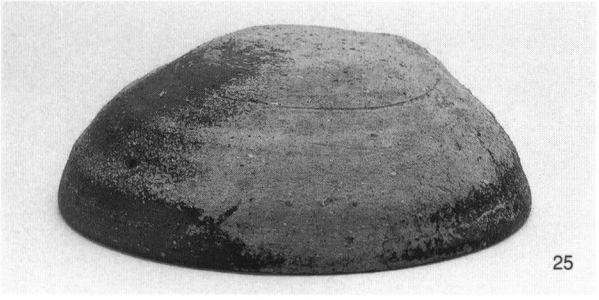
17

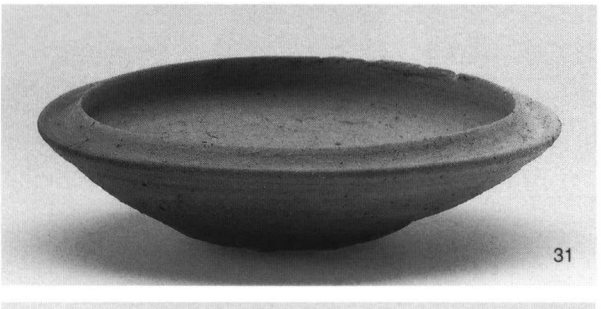
23


18


24

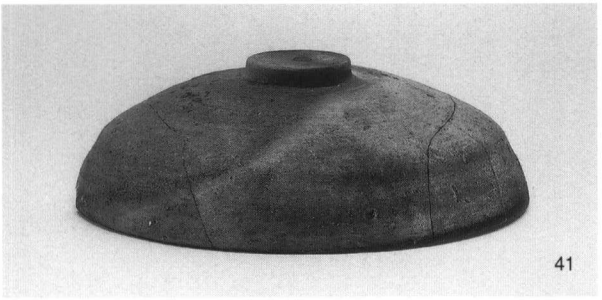
第1石室出土遺物(2)





第1石室出土遺物(3)

図版22


41

42

43

44

45

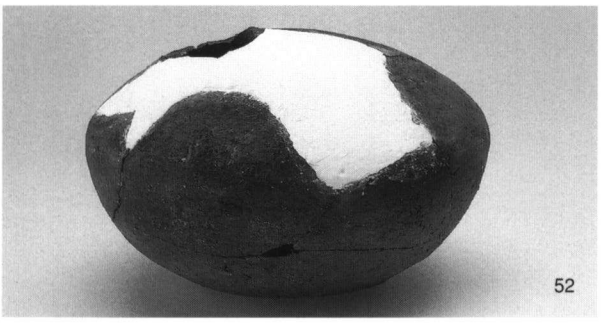
46

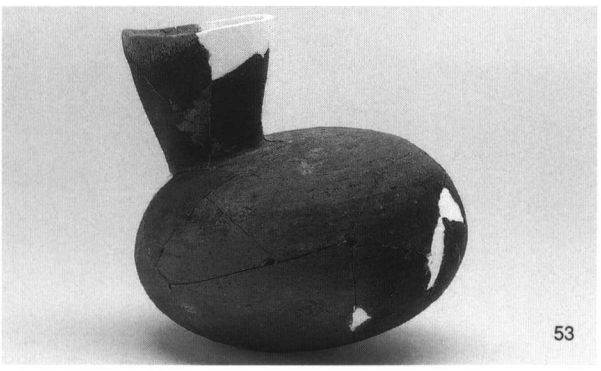
47

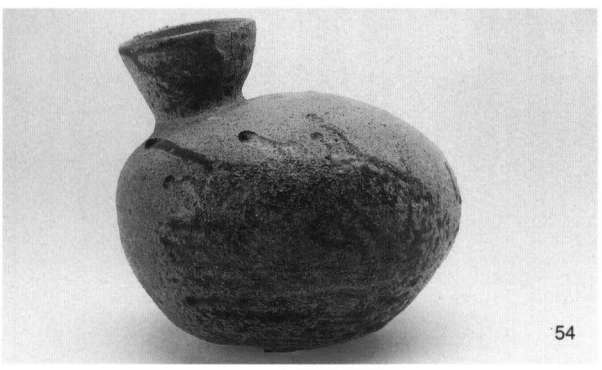
48

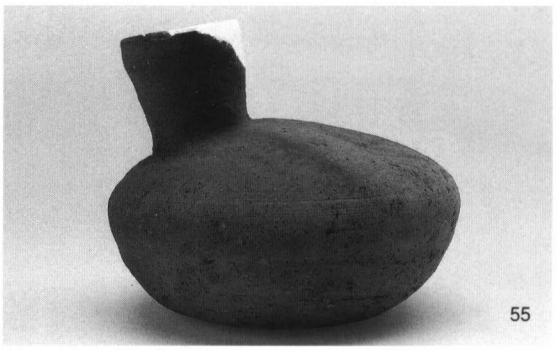
49

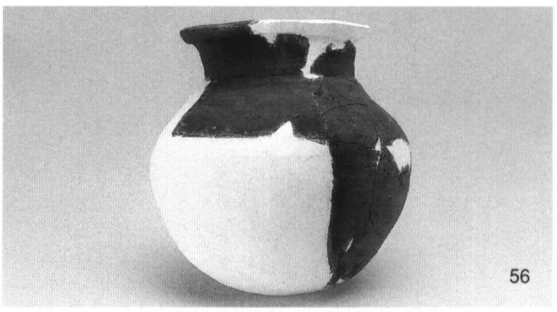
第1石室出土遺物(4)

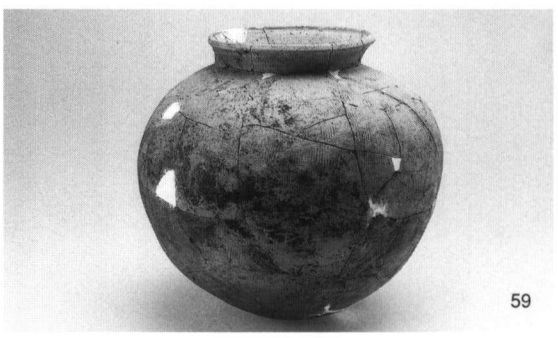


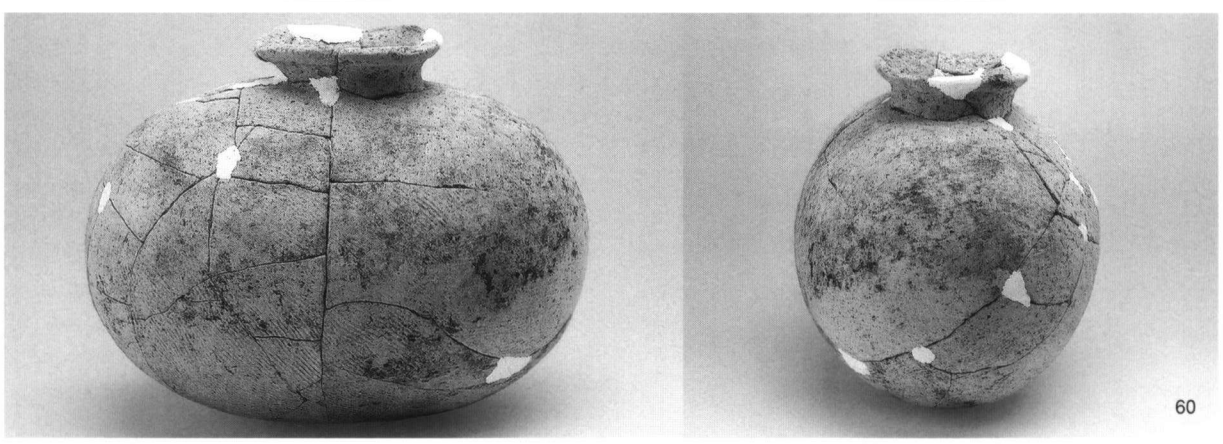






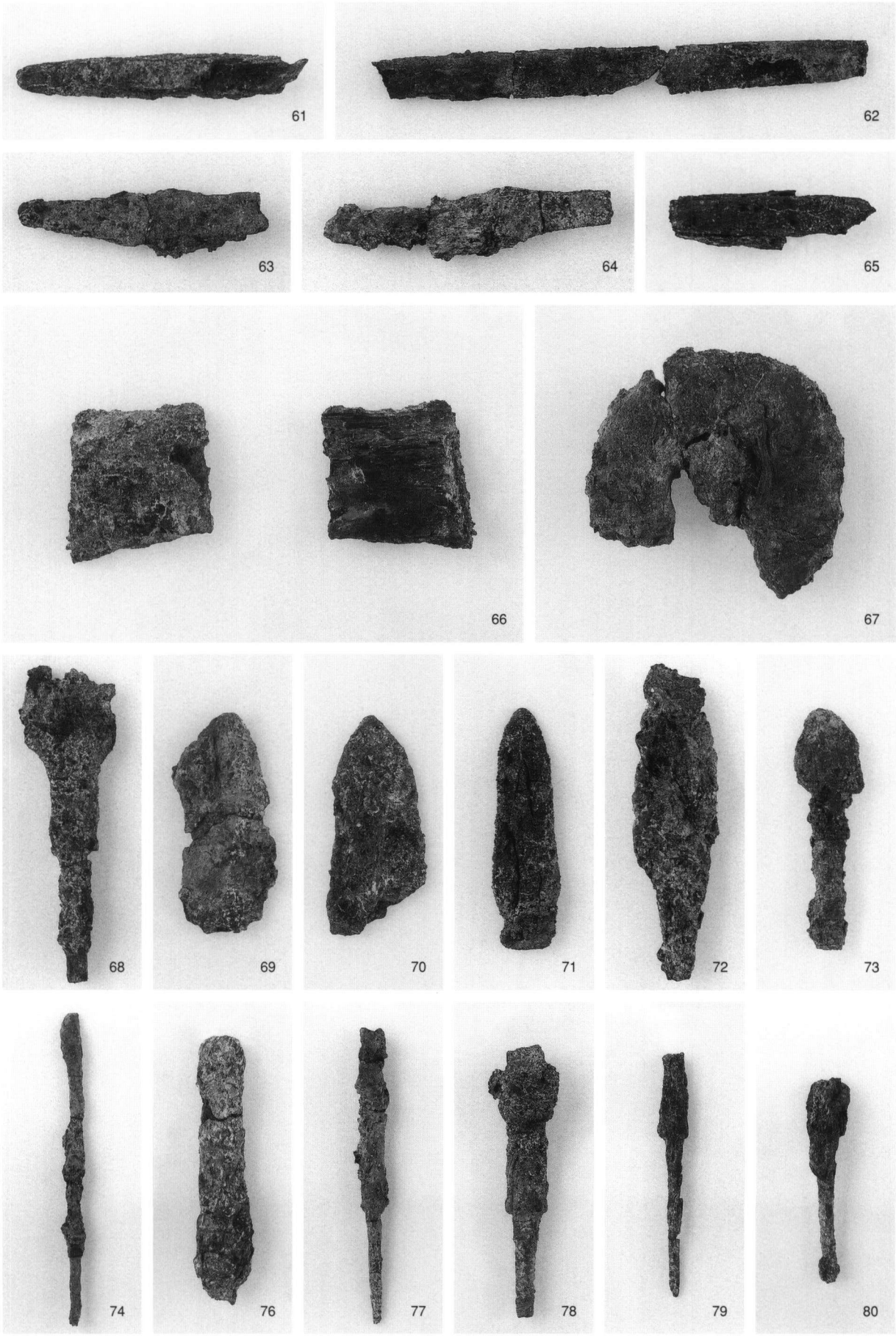




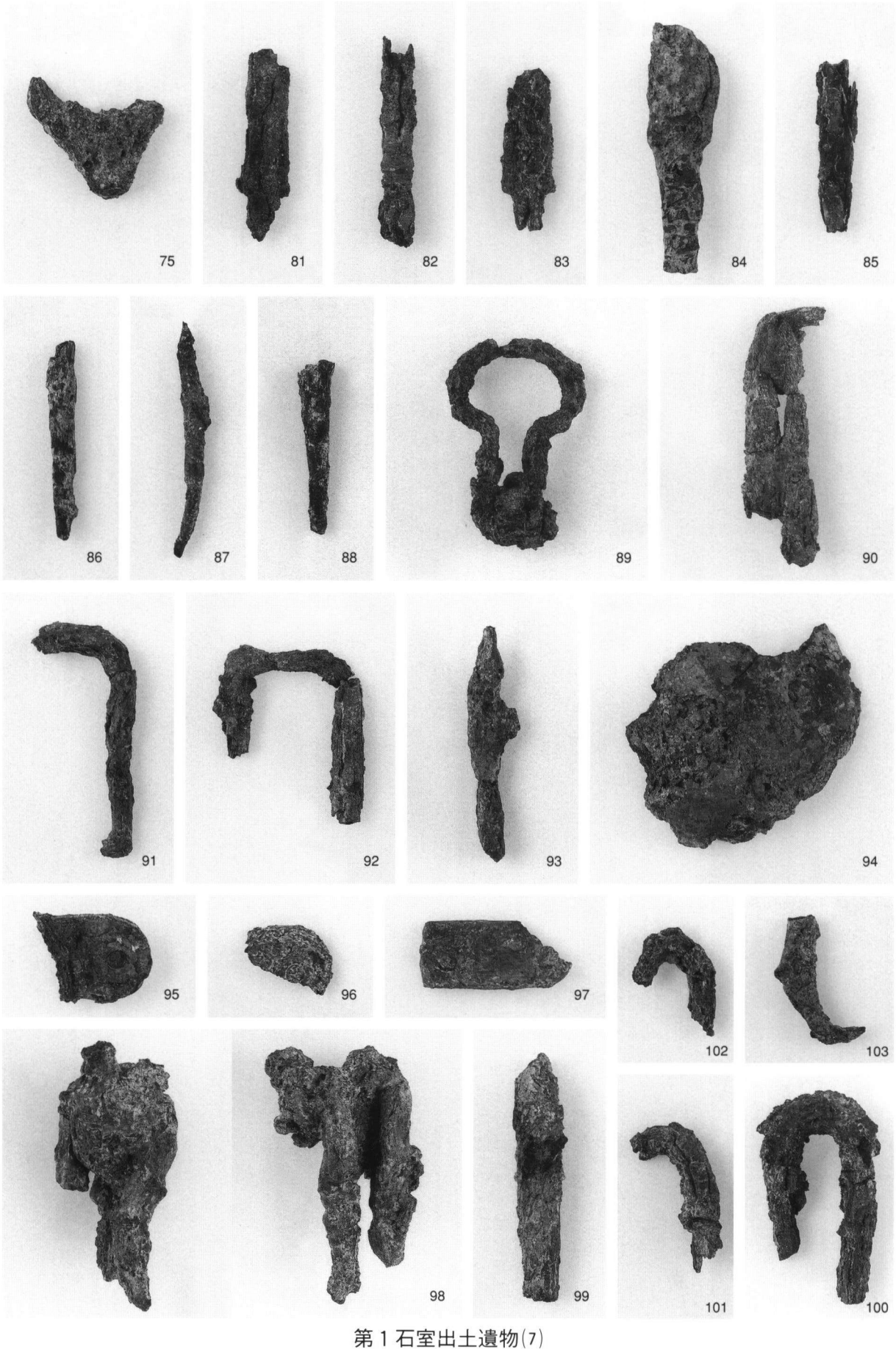


第１石室出土遺物(5)

図版24

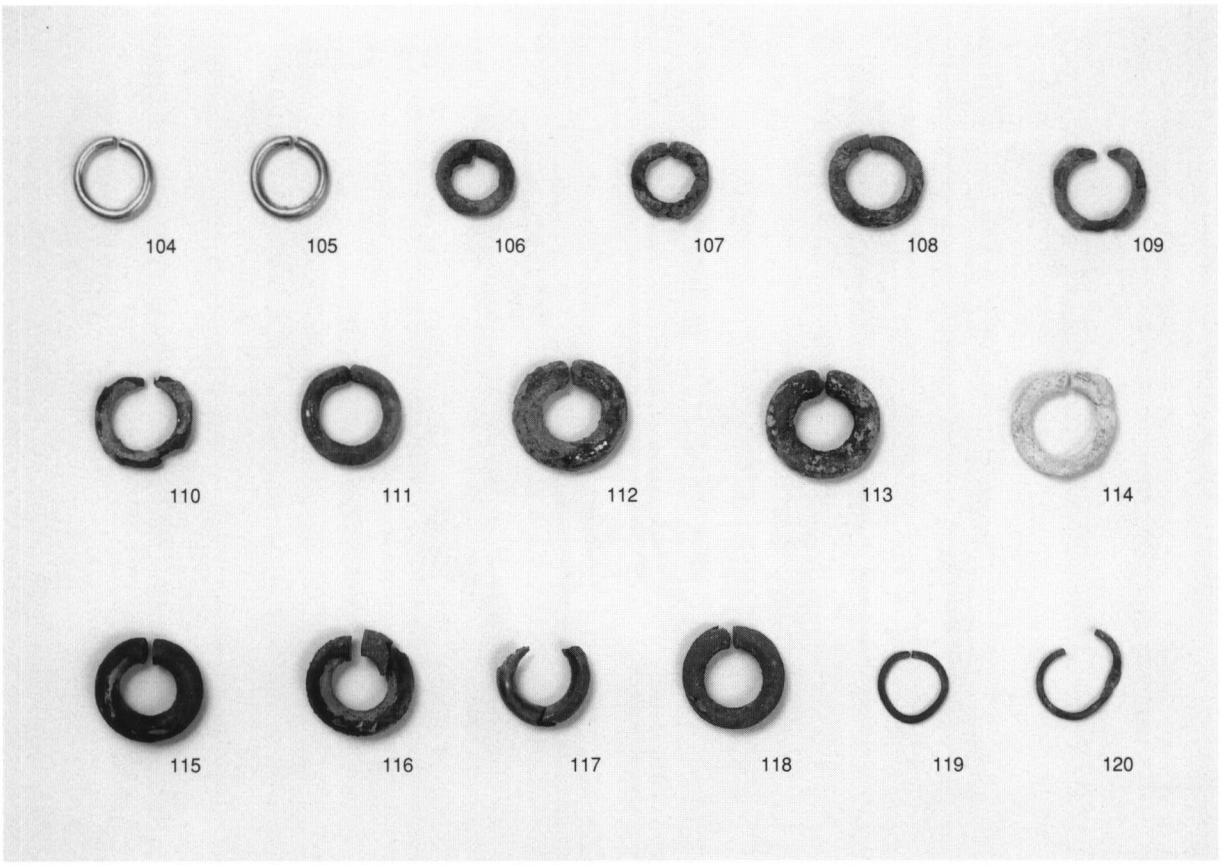


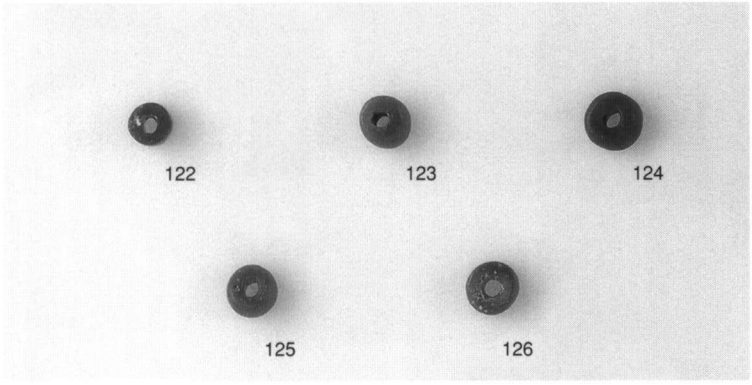
第1石室出土遺物(6)

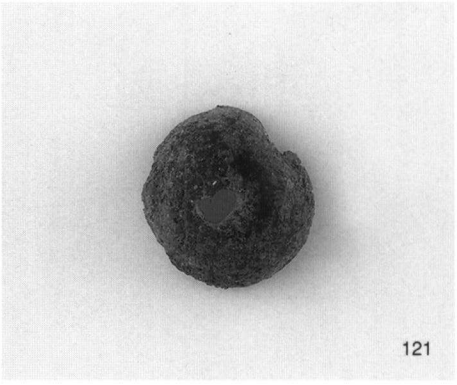

75
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
102
103
98
99
101
100

第１石室出土遺物(7)

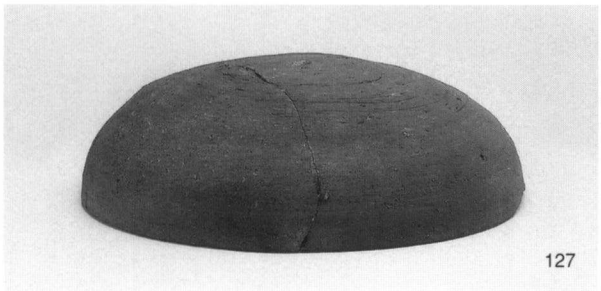
図版26

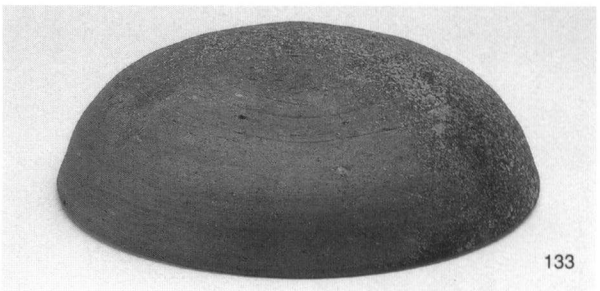






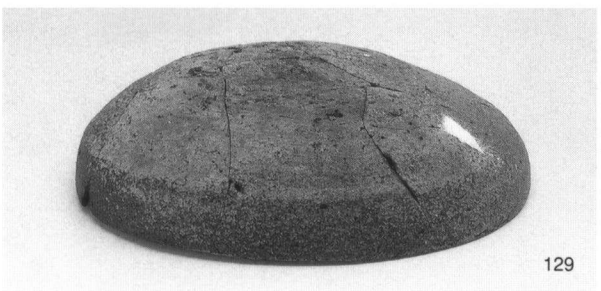
第1石室出土遺物(8)

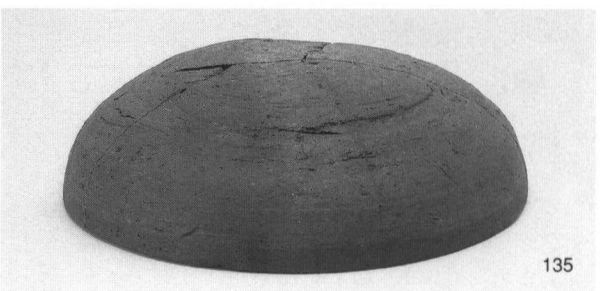

127


133

128

134

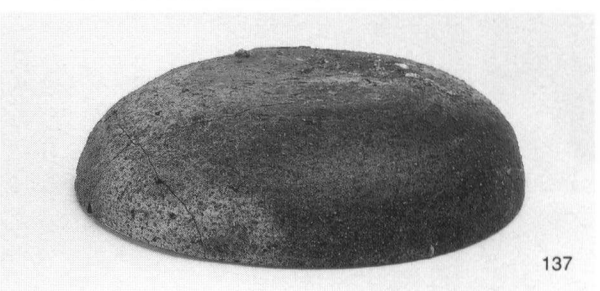

129


135

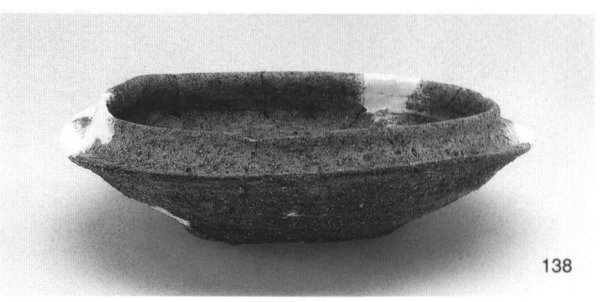
130

136

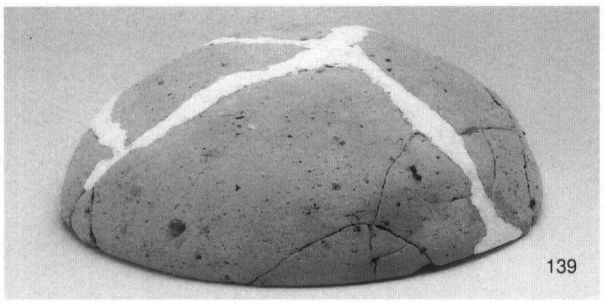
131


137

132


138

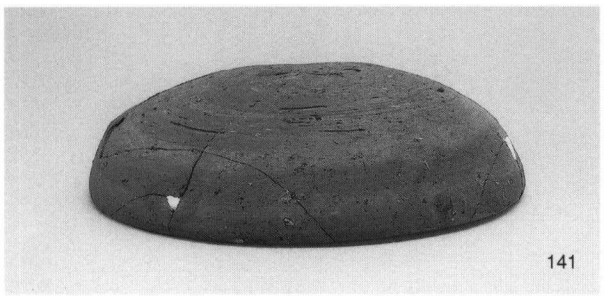
第２石室出土遺物(1)

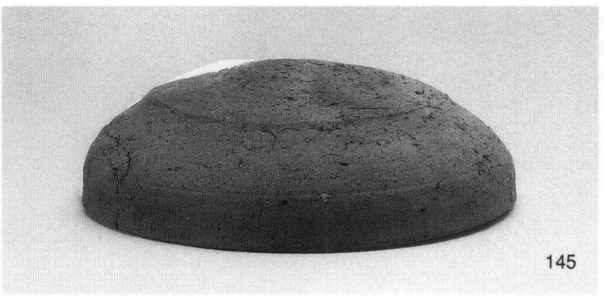

139

143

140

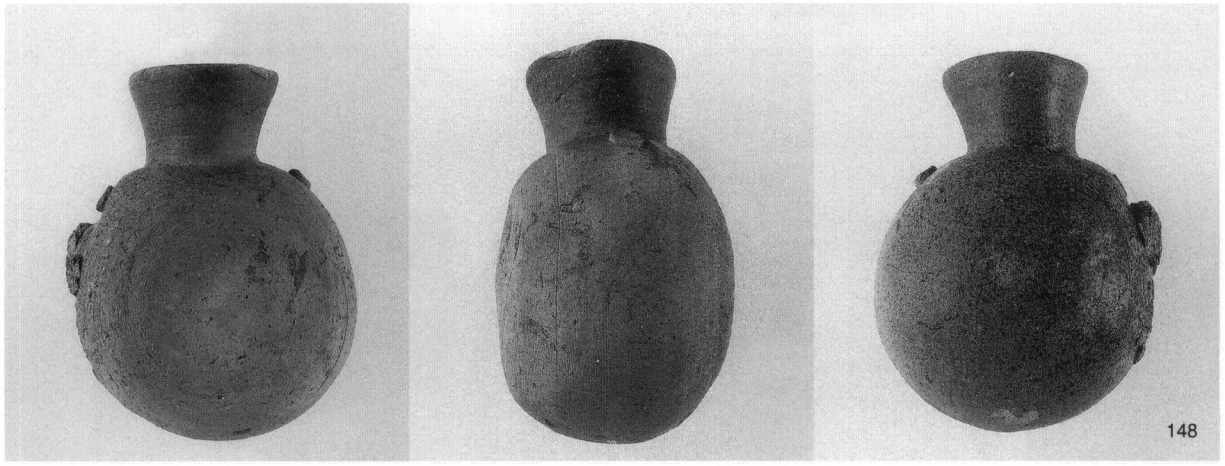
144


141


145

142

146


148

第2石室出土遺物(2)